

高 崎 城 遺 跡 25

独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター病棟等増築整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2018

高崎市教育委員会

独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター

株式会社 測研

例 言

- ・本書は、独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターの病棟等増築整備工事に伴い事前調査された高崎城遺跡の第25次発掘調査（高崎市遺跡調査番号702、遺跡名：高崎城遺跡25）の発掘調査報告書である。
- ・本遺跡は、群馬県高崎市高松町36番地に所在する。
- ・発掘調査及び整理等作業は、高崎市教育委員会の指導・監督の下に、事業者と委託契約を締結した株式会社測研が実施した。
- ・発掘調査から整理等作業を経て本書刊行に至る経費は、事業者である独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターに負担していただいた。
- ・発掘調査の体制は下記のとおりである。

高崎市教育委員会 角田 真也 矢島 浩
株式会社 測研 高林 真人

- ・発掘調査期間は平成29年7月23日～平成29年10月12日、整理等作業期間は平成29年10月13日～平成30年3月20日である。
- ・本書の執筆・編集は、高林が行った。
- ・出土した遺物及び各種原因・写真などの記録類は高崎市教育委員会が保管している。
- ・本遺跡の発掘調査及び報告書刊行にあたって、下記の方々・機関からご指導・ご協力を賜った。ここに記して御礼申し上げます。（順不同・敬称略）

独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター 山下工業株式会社 川端建材有限会社
株式会社原田総建 高崎市教育委員会 石井克己 黒田 晃

凡 例

- ・遺構番号は、原則として発掘調査時に付したものを使用している。
- ・遺構挿入図に使用した座標値は世界測地系によるものであり、方位記号は座標北を示している。
- ・遺構断面図に付した数値（L＝）は海拔を表す。
- ・土層注記及び遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局 財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖（1998年版）』を使用した。
- ・遺構には次の略号を使用した。SD＝溝跡 SK＝土坑 SE＝井戸跡 P＝ピット（小穴）
- ・遺構の実測図は、遺構配置図を1/300、堀跡の平面・断面図を1/150、溝跡・ピットの平面図を1/100、同土層断面図を1/50、基本土層断面図及び土坑・井戸跡の平面・断面図を1/40で掲載した。
- ・遺物の実測図は、土器は採鉢・内耳鍋・焙烙・土瓶を1/4、その他は1/3で掲載し、墨書・刻印は原寸を掲載した。金属製品は矢立を原寸、その他は1/2で掲載した。石製品は1/3で掲載した。木製品は大型品を1/6、小型品を1/2、その他を1/3で掲載した。瓦は1/6を基本とし、刻書・刻印は原寸で掲載した。
- ・遺物写真は、瓦の刻書及び刻印の一部を1/2、その他は実測図とほぼ同寸となるように掲載した。
- ・出土した遺物の注記は、高崎市遺跡調査番号（702）・遺構名・出土層位などを記入した。
- ・本報告書では、次の火山噴出物の略号を使用した。A s - A = 浅間 A 軽石
- ・本報告書で使用した地図の原図は下記のとおりである。

○国土地理院 地形図「高崎」・「前橋」・「下室田」・「富岡」 1/25,000

○高崎市都市計画図 1/2,500（50%縮小して使用）

- ・遺物実測図に使用したトーンは以下のとおりである。

還元焙須惠器断面：  灰釉陶器断面・施軸範囲： 

この他のトーンについては、各図中に掲載する。

目次

例言・凡例

目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	遺跡の位置と環境	1
第1節	遺跡の位置と周辺の地形	1
第2節	高崎城遺跡の既往の調査	1
第3章	調査方法と調査の経過	6
第1節	調査方法	6
第2節	調査の経過	6
第4章	確認された遺構と遺物	7
第1節	遺構の分布と基本土層	7
第2節	高崎城二ノ丸南堀	7
第3節	土坑	37
第4節	井戸跡	39
第5節	溝跡	41
第6節	ピット	44
第7節	遺構外出土遺物	45
第8節	まとめ	46

挿図目次

第1図	遺跡位置図(1/25,000)	2
第2図	高崎城遺跡発掘調査位置図(1/5,000)	3
第3図	調査区全体図・基本土層図(1/300・1/40)	8
第4図	高崎城二ノ丸南堀平面図・断面図①	10
第5図	高崎城二ノ丸南堀断面図②	11
第6図	高崎城二ノ丸南堀推定平面図①(1/400)	12
第7図	高崎城二ノ丸南堀推定平面図②(1/800)	13
第8図	堀出土近世遺物①(碗1)	14
第9図	堀出土近世遺物②(碗2)	15
第10図	堀出土近世遺物③(碗3・小坏・蕎麦猪口・皿1)	16
第11図	堀出土近世遺物④(皿2・蓋・鉢1)	17
第12図	堀出土近世遺物⑤(鉢2・徳利)	18
第13図	堀出土近世遺物⑥(鍋・土瓶・急須・播鉢1)	19
第14図	堀出土近世遺物⑦(播鉢2・焼塩壺・壺・甕・半胴・乗櫛・灯明皿受皿)	20
第15図	堀出土近世遺物⑧(灯明皿・仏飯器・火鉢・香炉・水滴・火消壺蓋)	21
第16図	堀出土近世遺物⑨(矢立)	22
第17図	堀出土近世遺物⑩(煙管・鉄製品・硯)	23
第18図	堀出土近世遺物⑪(木製品1)	24

第 19 図	堀出土近世遺物⑫ (木製品 2)	25
第 20 図	堀出土近世遺物⑬ (木製品 3)	26
第 21 図	堀出土近世遺物⑭ (木製品 4)	27
第 22 図	堀出土近世遺物⑮ (木製品 5)	28
第 23 図	堀出土近世遺物⑯ (木製品 6)	29
第 24 図	堀出土近世遺物⑰ (木製品 7)	30
第 25 図	堀・調査区出土近世瓦①	31
第 26 図	堀・調査区出土近世瓦②	32
第 27 図	堀・調査区出土近世瓦③	33
第 28 図	堀・調査区出土近世瓦④	34
第 29 図	堀・調査区出土近世瓦⑤	35
第 30 図	堀・調査区出土近世瓦⑥	36
第 31 図	堀・調査区出土近世瓦⑦・近代瓦	37
第 32 図	堀出土縄文時代～平安時代遺物	38
第 33 図	堀出土古代瓦	39
第 34 図	1号～6号土坑平面・断面図	40
第 35 図	土坑出土遺物	41
第 36 図	1号井戸跡平面・断面図、出土遺物	42
第 37 図	1号～4号溝跡平面・断面図	42
第 38 図	溝跡出土遺物	43
第 39 図	1号～3号ピット平面・断面図	44
第 40 図	遺構外出土遺物	45

表目次

第 1 表	高崎城遺跡発掘調査一覧	4
第 2 表	高崎城遺跡発掘調査報告書一覧	5
第 3 表	遺物観察表	47

写真図版目次

- | | | |
|--------|---------------------------|--|
| 写真図版 1 | I 区調査区全景 (真上から 上が北) | 1 号土坑全景 (南から) |
| | II 区調査区全景 (真上から 上が北) | 2 号土坑全景 (南から) |
| 写真図版 2 | I 区調査区全景 (西上空から) | 3 号土坑全景 (南から) |
| | II 区調査区二ノ丸南堀全景 (東上空から) | 4 号土坑全景 (南から) |
| 写真図版 3 | I 区調査区二ノ丸南堀全景 (西から) | 5 号土坑土層断面 (北から) |
| | I 区調査区二ノ丸南堀犬走り全景 (南西から) | 5 号土坑全景 (南から) |
| | II 区調査区二ノ丸南堀全景 (西から) | 写真図版 6 |
| | II 区調査区二ノ丸南堀全景 (東から) | 1 号井戸跡土層断面 (東から) |
| | I 区調査区二ノ丸南堀東端部底面全景 (西から) | 1 号井戸跡遺物出土状況 (東から) |
| | I 区調査区西端部二ノ丸南堀底面全景 (東から) | 1 号溝跡 A 全景 (東から) |
| | I 区調査区二ノ丸南堀全景 (東から) | 1 号溝跡 B 全景 (東から) |
| | II 区調査区二ノ丸南堀全景 (西から) | 1 号溝跡 C 全景 (東から) |
| | I 区調査区西壁二ノ丸南堀土層断面 | 1 号溝跡全景 (東から) |
| 写真図版 4 | B-B'① (東から) | 2 号溝跡全景 (東から) |
| | I 区調査区西壁二ノ丸南堀土層断面 | 3 号溝跡全景 (南から) |
| | B-B'② (東から) | 写真図版 7 |
| | II 区調査区東壁二ノ丸南堀土層断面① (西から) | 3 号溝跡遺物出土状況 (南から) |
| | II 区調査区東壁二ノ丸南堀土層断面② (西から) | 4 号溝跡遺物出土状況 (西から) |
| | II 区調査区西壁二ノ丸南堀土層断面 | 4 号溝跡全景 (西から) |
| | C-C'① (東から) | 1 号ピット全景 (南から) |
| | II 区調査区西壁二ノ丸南堀土層断面 | 2 号ピット全景 (南西から) |
| | C-C'② (東から) | 作業風景① |
| | II 区調査区北壁二ノ丸南堀土層断面① (南から) | 作業風景② |
| | II 区調査区北壁二ノ丸南堀土層断面② (南から) | 作業風景③ |
| | I 区調査区北壁二ノ丸南堀土層断面 | 写真図版 8 |
| 写真図版 5 | A-A' (南から) | 二ノ丸南堀出土近世遺物① (土器類 1) |
| | II 区調査区二ノ丸南堀杭出土状況 (東から) | 写真図版 9 |
| | | 二ノ丸南堀出土近世遺物② (土器類 2) |
| | | 写真図版 10 |
| | | 二ノ丸南堀出土近世遺物③ (土器類 3、金属製品、石製品、木製品 1) |
| | | 写真図版 11 |
| | | 二ノ丸南堀出土近世遺物④ (木製品 2) |
| | | 写真図版 12 |
| | | 二ノ丸南堀出土近世・近代遺物 (瓦) |
| | | 写真図版 13 |
| | | 二ノ丸南堀出土
縄文時代～平安時代遺物、土坑・井戸跡・溝跡出土遺物、
遺構外出土遺物 |

第1章 調査に至る経緯

平成29年5月、開発事業者の独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターから、高崎市高松町に於いて計画している病棟建設に先立つ埋蔵文化財の照会が高崎市教育委員会文化財保護課（以下、市教委と略）にあった。市教委では、今回の予定地が近世高崎城をはじめ、弥生時代から平安時代の集落跡、中世和田城などが確認されている「高崎城遺跡」の範囲内にあるため、開発事業者側に埋蔵文化財の保護措置が必要である旨を回答した。開発事業者と市教委で協議をしたが、現状保存は困難との結論に至り、発掘調査による記録保存の措置を講ずることで合意した。

発掘調査は「群馬県内の記録保存を目的とする埋蔵文化財の発掘調査における民間調査組織導入事務取扱要綱」（以下「要綱」とする）に準じ、群馬県登録民間発掘調査組織に民間委託することが決定した。平成29年7月に委託先が株式会社測研に決定し、これを受けて平成29年7月14日付で事業者の独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターと受託者の株式会社測研との間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書が締結された。また、同日に独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター、株式会社測研、市教委の三者で「独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター病棟等増築整備工事に伴う高崎城遺跡25発掘調査業務の取り扱いに関する協定書」を締結し、発掘調査の実施にあたって市教委が指導・監督をすることとなった。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と周辺の地形

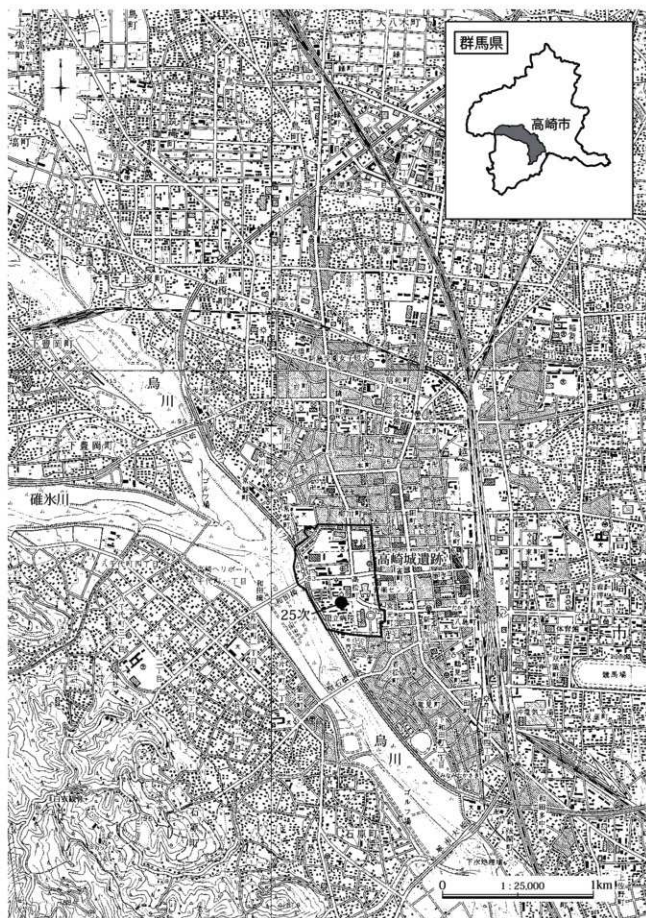
高崎城遺跡は、高崎市高松町に所在する近世高崎城を主体とする縄文時代～近現代までの遺構が確認される複合遺跡である。本遺跡の所在する高崎市は群馬県南西部に位置し、北東側に緩やかに弧を描く北西―南東方向に細長い形をしている。高松町は高崎市の南東側に位置しており、中心市街地の西縁付近にある。東側約900mにJR東日本の高崎駅があり、西側は国道17号線が北西―南東方向に走っている。

本遺跡は、榛名山麓扇状地から南東方向に延びる高崎台地上に立地する。高崎台地は南西側が高崎市倉沢町鼻曲山を源とする烏川の周辺に形成された烏川・碓氷川低地に、北東側が相馬ヶ原扇状地を源とする井野川の周辺に形成された井野川低地に挟まれており、南東端部は烏川が東に向きを変え井野川が合流する高崎市倉賀野町から岩鼻町となる北西―南東方向に長い舌状台地である。本遺跡は高崎台地中央部南西側の烏川沿いの台地縁に位置しており、烏川低地との比高差は約8mである。

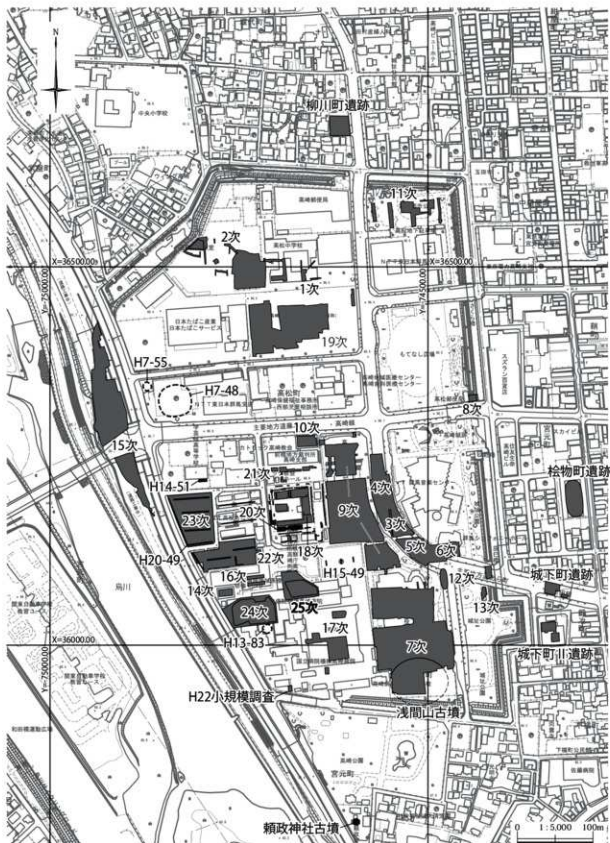
本遺跡は市街地の中にあり公的な建物が多数建つ地域で、本調査区の現況は独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターの駐車場である。標高は97m前後で、概ね平坦である。

第2節 高崎城遺跡の既往の調査

高崎城遺跡の発掘調査は、高松中学校校舎建設に伴い昭和60年に第1次調査として実施された。以降公共・公的施設の建設に伴い実施された発掘調査を中心に行われ、今回の調査が第25次調査にあたる。前回の第24次の発掘調査報告書でこれまでの高崎城遺跡の発掘調査の概要がまとめられているので、今回の概要を加えて掲載する（第1表・第2表）。



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)



2500分の1「高崎市都市計画基本図」を50%縮小し、これまでの調査区を合成した図である。調査区の座標が不明なものなどがあるため、8・11・12次調査、及び松物町遺跡・柳川町遺跡試掘調査・小調査についてはおおむねの位置を示している。

凡例：H13の「H」は平成の略。続く数字は、当該年度の試掘確認調査番号で、市内遺跡発掘調査報告に掲載された情報に一致する。

第2図 高崎城遺跡発掘調査位置図(1/5,000)

第1表 高崎城遺跡発掘調査一覧

調査	調査年	調査原因	概要	文献
1次	昭和60年	高松中学校校舎建設	二ノ丸堀の一部を検出。堀の上幅20m、その埋土は、堀の内側から黄褐色土と褐色土とが互層をなし、土塁を削して内側から埋めたことを推察。	1
2次	昭和61年	高松中学校校庭築造	赤坂中門前面付近の土塁および榎郭を検出。土堀は地山掘削ではなく、石製暗渠を埋設して土堀としていた。榎郭堀西端は烏川へと貫通していた。	2
3次	昭和63年	都市計画道路高崎駅西口線築造	二ノ丸坪ノ椀形と三ノ丸の一部を調査。坪ノ椀形堀の位置を確認。弥生中期の環濠のほか近世までの遺構を検出。	3
4次	昭和63年 平成元年	都市計画道路高崎駅西口線築造	坪ノ椀形堀を完掘。藩主居館跡地点を調査。	3
5次	平成元年 ～2年	都市計画道路高崎駅西口線築造	三ノ丸部分で御作事方面連の建物がある大型礎石建物を検出。東門付近で三ノ丸土塁の調査。また、三ノ丸部分で弥生中期後半の方形環溝を検出。	3
6次	平成元年	群馬シァンフォニーホール建設	5次調査の大型建物の一部を検出。土坑から近世後期の陶磁器が大量に出土。	4
7次	平成2年	高崎市役所新庁舎建設	弥生中期後半の環濠および浅間山古墳周溝を検出。古代および中世、高崎城関連の遺構、十五連隊建物を検出。	5
8次	平成2年	高松郵便局建替	追手門北脇部分の調査。石組の備溝を検出。	6
9次	平成3年	高崎市役所新庁舎（高崎シティギャラリー）建設	弥生中期後半の環濠および古代、中世の遺構を検出。二ノ丸堀、梅ノ木堀堀を検出。二ノ丸堀の一部で障子堀を確認。そのほか十五連隊建物を検出。	5
10次	平成3年	前橋地方家庭裁判所高崎支部構内建物増築	梅ノ木郭部分の調査。近世の土塁直下と思われる、中世和田城および馬上宿に関連すると思われる石積土坑、池状遺構、井戸等を検出。	7
11次	昭和63年	市営高松地下駐車場・友好姉妹都市公園建設	浅間B軒石下木田および柱六内に礎板を持つ大型建物を検出。幕末期の藩主御住居に付随する建物の可能性。鍋島藩室の花籠文裏白五寸皿が出土。調査次番号が無かったので後年追加。	8
12次	平成5年	都市計画道路高松若松堀改築	弥生中期後半の環濠および近世の遺構を検出。大河内家の家紋が入った陶器碗を出土。	9
13次	平成5年	城址公園公衆便所建設	中世の水路、土坑を検出。土坑からは五輪塔、板碑、青磁碗が出土し、墓塚の可能性もある。近世の遺構も検出。	9
14次	平成8年	国立高崎病院（当時）研修棟建設	古墳時代滑石製品の未製品および剥片、原石が1,000点以上出土。二ノ丸堀の一部（南端付近）を検出。	10
15次	平成14年	国道17号（高松立伏）改築	西部部分周辺調査。絵図に記載された東西方向の堀のほか、本丸堀とこれ以前の堀を検出。また和田城構台と考えられた部分が、16世紀末（高崎城築造期？）の盛土であると確認。	11
16次	平成15年	国立高崎病院（当時）仮設設備建設	二ノ丸堀？を検出。3種の掘立柱建物を検出。	12
17次	平成17年	国立病院機構高崎総合医療センター建設	三ノ丸部分（興禅寺・威徳寺付近）の調査。中近世の遺構を検出。遺物は弥生および平安時代が中心。	13
18次	平成20年 ～21年	高崎法務総合庁舎建設	十五連隊第三兵舎の基礎を検出。	14
19次	平成20年 ～21年	高崎市総合保健センター・高崎市立中央図書館建設	本丸堀・二ノ丸堀・榎郭の堀・井戸・溝・土坑等を検出。大河内家の家紋入り鬼瓦出土。古墳時代石田川式土器・埴輪が出土。中世の溝・井戸・土坑から土器の出土。	15
20次	平成23年	前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎建設	十五連隊第三兵舎の基礎を検出。古代の鬼瓦出土。	16
21次	平成24年	前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎耐震改修工事	梅ノ木郭埋門の南堀及び南岸の一部を検出。幕末～明治初期の陶磁器出土。	17
22次	平成26年	国立病院機構高崎総合医療センター看護学校建設	西部堀・二ノ丸外堀を検出。古代の軒丸瓦を出土。中世、和田城の堀・井戸・溝・土坑から土器の出土。十五連隊の建物の基礎を検出。	18
23次	平成27年	創価学会会館建設	歩兵第十五連隊煉瓦造り火薬庫2基・道・水路・石垣・土塁を検出。近世高崎城新発見の堀割、中世和田城堀割を検出。輪宝墨書土器・古代布目瓦多数出土。	19
24次	平成28年 ～29年	国立病院機構高崎総合医療センター	高崎陸軍病院。高崎城二ノ丸南堀、和田城築研堀。平安～古墳時代集落。古墳時代滑石等玉作工房址。	20
25次	平成29年	国立病院機構高崎総合医療センター病棟建設	南中門より西側の高崎城二ノ丸南堀の東端部を検出。「威徳寺」と刻書された瓦が出土。	21 本書

第2表 高崎城遺跡発掘調査報告書一覧

	文責	発行	遺跡名・調査報告書	調査主体	調査
1	高崎市教育委員会	1986	『高崎城跡』 仮称・高松中学校建設に伴う発掘調査の略報	高崎市教育委員会	1次
2	久保泰博	1988	『高崎城遺跡Ⅱ 櫻郭並びに三ノ丸北西部』 高崎市文化財調査報告書第81集	高崎市教育委員会	2次
3	久保泰博・高橋淳 田村孝・山田史仁	1990	『高崎城遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ 坪ノ枳形遺跡・坪ノ枳形及び三ノ丸遺跡・東門及び三ノ丸遺跡』 都市計画道路高崎駅西口線建設に伴埋蔵文化時緊急発掘調査概報 高崎市文化財調査報告書第107集	高崎市教育委員会	3次 4次 5次
4	高橋淳・山田史仁	1990	『高崎城Ⅵ 三ノ丸遺跡』 群馬シンフォニーホール建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査概報 高崎市文化財調査報告書第104集	高崎市教育委員会	6次
5	中村茂	1994	『高崎城Ⅶ・Ⅷ 高崎城三ノ丸遺跡』 -高崎市役所新庁舎建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査- 高崎市文化財調査報告書第129集	高崎市教育委員会	7次 9次
6	高崎市教育委員会	1992	『高崎城Ⅷ(追手門)遺跡』 高崎市文化財調査報告書第121集	高崎市教育委員会	8次
7	黒沢元夫	1993	『高崎城Ⅹ 高崎城梅ノ木郭遺跡』 前橋地方家庭裁判所高崎支部庁舎増築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報	高崎市遺跡調査会	10次
8	横倉興一・星野守弘	1989	『高崎市内遺跡緊急埋蔵文化財発掘調査報告書』 高崎市文化財調査報告書第93集	高崎市教育委員会	11次
9	中村茂・神戸肇	1994	『高崎城ⅩⅡ・ⅩⅢ 三ノ丸遺跡』『高崎市内遺跡埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』 高崎市文化財調査報告書第131集	高崎市教育委員会	12次 13次
10	折原洋一	1997	『高崎城ⅩⅣ遺跡』 高崎市遺跡調査会文化財調査報告書第57集	高崎市遺跡調査会	14次
11	大西雅広	2006	『一般国道17号(高松立体)改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 高崎城ⅩⅤ遺跡』 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第369集	群馬県埋蔵文化財調査事業団	15次
12	黒田晃	2003	『高崎城ⅩⅥ遺跡』 高崎市文化財調査報告書第193集	高崎市教育委員会	16次
13	黒田晃	2006	『高崎城ⅩⅦ遺跡』 高崎市文化財調査報告書第206集	高崎市教育委員会	17次
14	秋本太郎他	2011	『高崎城遺跡18』 高崎市文化財調査報告書第279集	高崎市教育委員会	18次
15	黒田晃	2010	『高崎城遺跡19』 高崎市文化財調査報告書第259集	高崎市教育委員会	19次
16	清水豊・飯塚光生	2013	『高崎城遺跡20』 高崎市文化財調査報告書第312集	高崎市教育委員会	20次
17	関晴彦	2013	『高崎城遺跡21』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第574集	(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	21次
18	飯塚光生・清水豊	2015	『高崎城遺跡22』 高崎市文化財調査報告書第344集	高崎市教育委員会	22次
19	大塚昌彦・高林真人	2016	『高崎城遺跡23』 高崎市文化財調査報告書第354集	株式会社 測研	23次
20	大塚昌彦	2017	『高崎城遺跡24』 高崎市文化財調査報告書第390集	株式会社 測研	24次
21	高林真人	2018	『高崎城遺跡25』 高崎市文化財調査報告書第408集	株式会社 測研	25次

第3章 調査方法と調査の経過

第1節 調査方法

高崎城遺跡 25 (第 25 次) の発掘調査は、独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センターの病棟建設に伴い、現状が変更される場所において工事を行う前に実施された記録保存調査である。開発面積は約 1,340㎡であったが、範囲内に撤去できない既存の排水管が埋設されているため掘り下げるのでできない場所があることから、発掘調査面積はその場所を除外した約 690㎡となった。

発掘調査によって生じる廃土の処理は、開発範囲内で行うことになった。開発範囲内では高崎城の二ノ丸南堀があることが想定されていたため大量の廃土が出るが見込まれたことから、発掘調査は廃土置き場を反転して 2 回に分けて行うこととした。そのため、最初に調査を行った東側をⅠ区、後から調査を行った西側をⅡ区とした。

遺構の確認は、近接する前回調査の高崎城遺跡 24 の成果を参考に現表土の除去を重機を使用して掘削し、現表土の下の黄褐色砂質土 (Ⅱ層、第 4 章基本土層参照) の上面を人力で削り遺構確認作業を行った。

遺構の掘り込みは、溝跡は残存長のほぼ半分の位置及び切り合っている遺構との新旧関係を把握できる位置に土層観察ベルトを設定し、土坑・井戸跡・ピットは平面形や大きさに応じて適宜半載位置を設定して行った。堀は調査区際で土層観察を行うようにしたため土層観察ベルトを設定せずに掘削を行った。過去の調査事例から堀は深さが 4m ほどになることが明らかだったので、平面形が確認できた後、堀東壁・南壁際及び底面際を残して重機での掘削を行った。堀底が深いこと、かつ湧水が想定されたことから調査区北壁は一割勾配を付けて掘削し、Ⅰ区調査区西壁及びⅡ区調査区東・西壁では段掘りを行った。堀の掘削を進めると多量の水が湧出した。そのため堀内部に釜場を設定し水中ポンプを使用して 24 時間排水処置を行いながら調査を進めていった。

堀の底部に関して、Ⅰ区調査区に於いては廃土置き場の容量が不足する状況であったことから、すべてを掘削する必要はなく、堀東端部及びⅠ区調査区西端部の調査を行い、その間の部分は推定線で結ぶことで問題はないと高崎市教育委員会の了承を得た。

遺物の取り上げは、遺存状態の良い遺物は座標値を測量して取り上げ、それ以外の遺物は遺構覆土で取り上げた。堀の覆土は、上層が黄褐色を主体とする人為堆積土、下層が黒褐色を主体とする自然堆積土に分かれていることが確認できた。また下層には天明 3 年 (1783 年) の浅間山噴火の際に降下した火山噴出物 (A s - A 軽石) の純層が挟まれていることも確認された。下層の自然堆積土からは多量の遺物が出たためその土を分けて置いておき、後から遺物の採集を行い下層出土遺物として扱った。黄褐色主体の人為堆積土を上層、黒褐色主体の自然堆積土を下層として取り上げ、明確に A s - A 軽石層からの出土と認められたものは A 軽石層出土として取り上げた。また、人力で精査した堀壁際からの出土遺物は、南壁で取り上げた。

遺構の記録は、遺構実測図作成及び写真撮影を実施している。遺構実測図は光波測距儀を用いて全体図を 1/200、遺構平面図を 1/40、土層断面図を 1/20 の縮尺で図化した。写真撮影は 35mm 小型一眼レフカメラと約 1800 万画素のデジタル一眼ノンフレックスカメラを使用して行った。35mm カメラはモノクローム・カラーリバーサルフィルムを使用し、ともに同一カットで露出を変えて 3 枚 1 単位で撮影を行った。また、小型無人航空機 (ドローン) による空中写真撮影を実施し、ブローニー版中型カメラでカラーリバーサルフィルム、デジタルカメラでの撮影を行った。

第2節 調査の経過

平成 29 年 7 月 23 日、開発範囲の外周に仮バリケードを設置し、開発範囲内の樹木の伐採を行う。7 月 24 日、開発範囲のアスファルト切断を行う。7 月 25 日、開発範囲内のアスファルト・コンクリート・外灯の除去作業を開始する。7 月 28 日、プレハブ・トイレ搬入。

8 月 1 日、開発範囲内のアスファルト・コンクリート・外灯の撤去作業が終了。開発範囲外周に A 型バリケード

下を設置する。開発範囲の仮囲いの準備が整わなかったため作業を一時中断する。8月9日、仮囲い設置作業を行う。8月17日、Ⅰ区調査区の表土掘削を開始する。8月18日、堀の掘削を開始する。8月21日、遺構確認作業を開始し、堀の東壁・南壁の精査を開始する。堀底が深く重機のアームが届かないため、一旦堀の掘削を中断する。後日、堀底まで掘り下げることとなった。8月22日、溝跡・土坑・井戸跡などの遺構精査を行う。8月30日、Ⅰ区調査区の空中写真撮影を実施する。高崎市教育委員会に堀下部を除くⅠ区調査区の終了確認を受け、8月31日から堀下層の掘削を開始する。

9月4日、Ⅰ区調査区堀底部の調査が終了し、高崎市教育委員会の終了確認を受ける。9月5日、Ⅰ区調査区の埋め戻しを行う。9月7日、Ⅰ区調査区の埋め戻しが終了する。9月8日、Ⅱ区調査区の表土掘削・堀掘削を開始する。9月9日、Ⅱ区調査区の堀精査を開始する。9月13日、遺構確認作業を実施、Ⅱ区調査区は後世のカクランが激しく、遺構は残っていないかった。9月19日、高崎市教育委員会からⅡ区調査区の調査終了の確認を受ける。9月21日、Ⅱ区調査区の空中写真撮影を実施する。9月22日、発掘調査道具の片付け作業を行う。9月26日、Ⅱ区調査区の埋め戻し開始する。9月28日、コンクリート基礎・パイル杭の搬出作業を実施する。9月30日、Ⅱ区調査区の埋め戻しが終了。

10月13日、開発範囲の仮囲いの撤去を行う。10月16日、プレハブ・トイレを搬出する。発掘調査に伴う全ての作業が終了した。

第4章 確認された遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構分布 今回の高崎城遺跡25の発掘調査では、近代の土坑2基（SK05・06）、近世の高崎城二ノ丸南堀、土坑3基（SK01・02・04）、溝跡1条（SD04）、中世と思われる井戸跡1基（SE01）、溝跡1条（SD03）、平安時代と思われる溝跡1条（SD01）、時期不明の土坑1基（SK03）、溝跡1条（SD02）、ピット3基（P01～03）が確認された。今回の調査範囲は後世のカクランを多く受けており、遺存状況は非常に悪いものであった。堀を除くすべての遺構はⅠ区調査区で確認され、Ⅱ区調査区ではカクランを受けていた面がⅠ区調査区よりも深かったため二ノ丸南堀以外の遺構は壊されてしまったと考えられる。

土坑・井戸跡・ピットの分布は、近代の土坑2基と中世の井戸跡は二ノ丸南堀の東端部で確認されている。近代土坑は堀が埋められてから、中世井戸跡は堀が造られる前に造られたものと考えられる。その他の土坑・ピットは、P02・03が堀付近、SK01～04、P01は調査区南壁際に分布する。カクランの影響を受けているため分布の傾向を見ることは困難である。

溝跡の分布は、SD01が堀と平行、SD03が堀と直交する方向で堀付近に、SD02・04が堀とほぼ平行する方向で調査区南壁際で確認されている。SD01・02は溝幅、方向がほぼ同じであることから、一連の遺構の可能性がある。SD04は堀とほぼ平行していることから、堀と関係する遺構の可能性がある。

基本土層 Ⅰ層は現代の砕石層、Ⅰ'層は現代の盛土層である。Ⅱ層は明黄褐色砂質土である。この土層面で遺構確認を行った。カクランを受けているため面は一定ではなく、場所によって遺構を確認した高さが異なる。Ⅲ層は浅黄色砂質シルトである。堀の壁面で確認したところ黄色系の砂質土が厚く堆積し、堀底付近で緑灰色のシルト質砂となる。

第2節 高崎城二ノ丸南堀

今回の発掘調査では、高崎城二ノ丸の南中門より西側に位置する二ノ丸南堀の一部が確認された。堀東端部の南側約1/3の幅で、長さ約30m分が確認され、南側部東壁及び南壁、底面の一部が明らかとなった。

高崎城二ノ丸南堀（第3図～第33図、写真図版2～5・8～13）

位置 調査区北壁際。**重複関係** SK05・SK06・SE01と重複する。SK05・SK06より古く、SE01より新しい。**遺存状態** 大半が調査区外にある。上端部がカクランにより削平されているが、概ね良好。



A L=97.50m A'



基本土層

- I 砂石層
- I' 10984/3 濃い黄褐色土、しまり強、粘性强、黄褐色中粒・白色粘土
(e 5mm)・(a) 5mm少量、礫(入礫心)層部分、長径のカタクラシ
- II 10986/6 明黄褐色砂質土、しまり弱、粘性强、礫化表(e 1cm)・(a) 少量、白色粘土(e 1cm)層部分
- III 577/2 浅黄色砂質シルト、しまり強、粘性强、白色粘土(e 5mm)多量、白色粘土(e 1cm)少量、礫化表(e 5mm)層部分

0 1:40 1m

第3図 調査区全体図・基本土層図 (1/300・1/40)

覆土 上層は黄褐色土を主体とする人為堆積土、下層は黒褐色砂質シルトなどが主体の自然堆積土が堆積する。上層の黄褐色土は、北側が高く南側へ傾斜する土層が何層にもわたって堆積している状況が見て取れる。大量の黄褐色土が堆積していること、北側から南側へ傾斜している状況から、堀北側にあった土塁の土を利用して北側から逐次土を流し入れた状況を示していると考えられる。堀東端部では、黄褐色土の前に黒褐色土で埋められていた状況が確認された。下層は、堀底面の南壁際で水が流れている状態の水成堆積土と考えられる土と地山に似た土が交互に堆積している状況が確認された。このことから、堀が造られてからしばらくの間は水の流れがある状況であり、その間に堀の壁が数回崩れたと想定することが出来る。その上には堀幅全域にわたると思われる水の流れが停滞した状態の水成堆積土と考えられる土が70cmほど堆積しており、長期間にわたって水の流れが滞っていたとみられる。その土は間に1783年(天明3年)の浅間山噴火の際に降下したA s - A 軽石の純層が堆積している。**平面形と規模** 平面形はほぼ東西方向に走る直線的な堀で、東端部が確認されている。規模は上端幅12.4m、長さ30.1mが確認された。確認面から底面までの深さは3.99mを測る。**長軸方向** N-84°-E。**壁面** 南壁が確認されており、下部1/3がⅠ区調査区西壁で52°、Ⅱ区調査区西壁で59°の傾斜で立ち上がり、上側2/3がともに35°の傾斜で大きく傾いて立ち上がる。堀内部に壁面の崩落土と思われる堆積土が見られることから、本来は一律50°以上の傾斜であったものが時間の経過に伴い壁が崩落し、安定する現況の傾斜になったものと考えられる。堀東端部では、壁面中位に幅80cmほどの犬走りのような平坦な場所が確認された。

底面 堀が調査区北側で確認されたこと、崩落を防ぐため調査区北壁側は一割勾配を付けて掘削を行ったため、確認できた底面はごくわずかであった。底面の標高は、東端部が92.86m、Ⅱ区調査区西端部が92.78mで、東西方向で比高差はほとんど見られない。南北方向では南壁際と中央寄りがわずかに低くなっているが、概ね平坦といえる。堀を築造した際に講じた排水処置と考えられる。堀底は礫を少量含む緑灰色シルト質砂である。

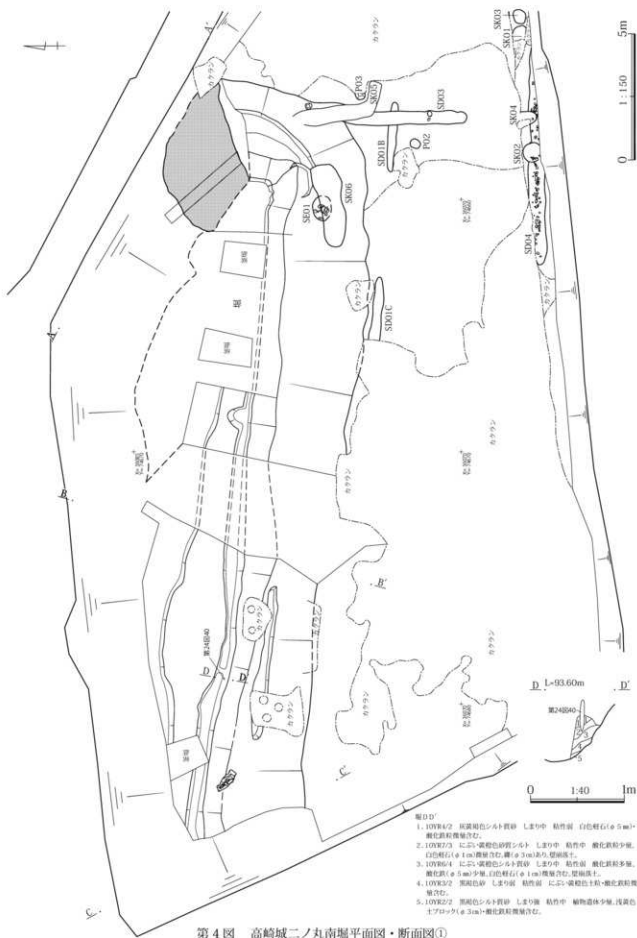
遺物 上層からも遺物は出土しているが、大半が下層から出土している。出土した遺物は、陶磁器、土師質土器、須恵器、土師器、弥生土器、縄文土器の土器類のほか、近世・近代瓦、古代瓦、木製品、金属製品、石製品と多岐にわたり、テンバコ21箱分と大量に出土した。

第8図～第15図は近世遺物の土器類を掲載した。第8図1～第10図66が碗類で、第8図1が青磁染付、第8図2～第9図36が染付、第9図37が色絵、第9図38～41が白磁、第9図42～第10図61が陶磁器、第10図62～64が焼締め陶器である。第10図65は染付小坏、第10図66は陶器小坏である。染付は器形にパリエーションが見られ、小型のものも多く見られる。また、多種多様の絵付けがされているが、第8図14・15や第8図19・20のように同じ意匠のものでも出来に差がある遺物も見られた。第8図14・15は内面見込みに「文化年製」と書かれていたと思われる。第9図52は織部焼の四方筒向付と思われる。細長い四角形の筒形をした器形である。第10図61は美濃焼と思われる小型の半筒碗で、底部に「●●●● 鳥居氏」と墨書されている。最初の2文字は「卯一四日●●」と読むことが出来るのではないかと。また『元禄十四年十一月高崎藩新規召抱家臣書上』ほか複数の近世文書に複数の鳥居姓の人名が見られることから、それらの人物または家族・親類が関わるものと思われる。

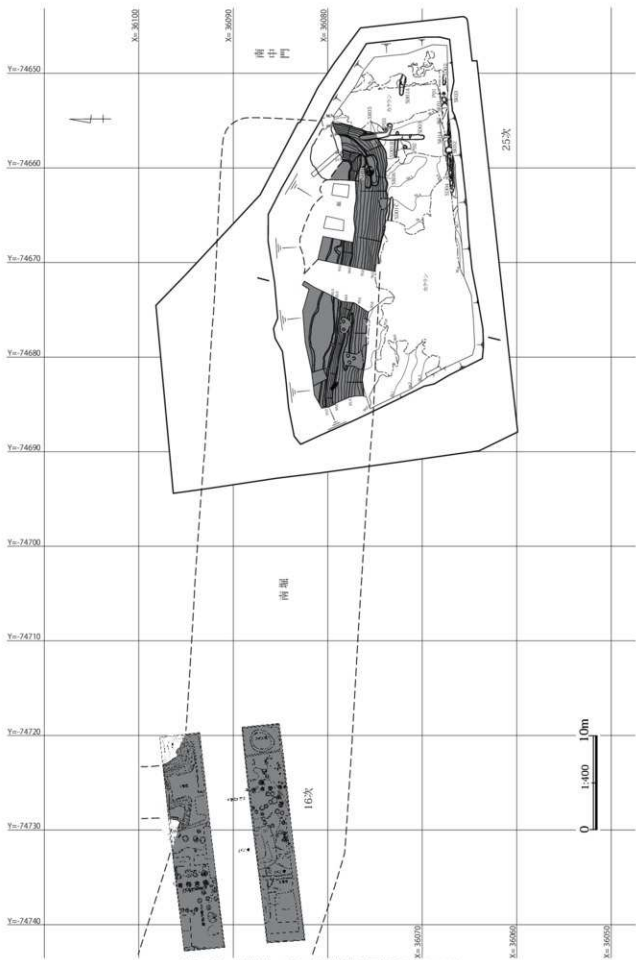
第10図67～72は染付の蕎麦猪口である。大・中・小と大きさに違いが見られる。第10図68は細かく割れたものを漆継ぎで補修されていたものである。

第10図73～第11図90は皿で、第10図73～76が染付、第10図77-78が青磁、第10図79～81が白磁、第10図82～84が陶器、第10図85が焼締め陶器、第11図86～91が土師質土器かわらけである。第10図73はほぼ完形の染付である。内面に松と鶴という縁起の良い図柄が描かれており、口脣部に鉄錆軸が施されていることから、特別な日に使用されたものかと思われる。第10図80・81は内面に陽刻で文様が施されている。第10図84は木葉型で、陰刻で外面に綱目模様、内面に葉脈模様が描かれている。

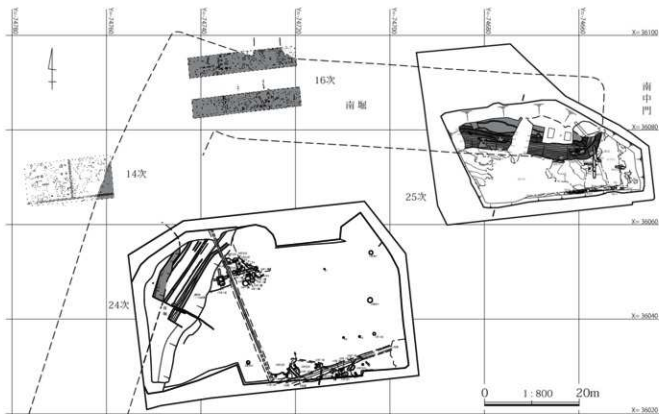
第11図92～99は蓋で、第11図92が青磁染付、第11図93～98が染付、第11図99が陶器である。第11図93は外面見込みに「萬曆年製」、第11図94は内面見込みに「万延年製」と書かれている。第11図98・99は合子の蓋と思われる。



第4図 高崎城二ノ丸南塹平面図・断面図①



第6図 高崎城二ノ丸南堀推定平面図① (1/400)



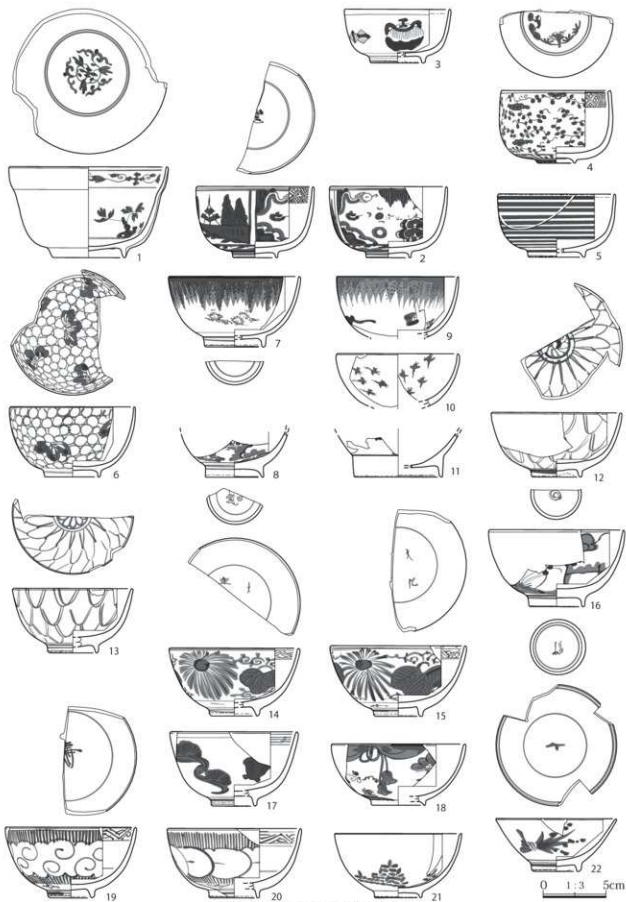
第7図 高崎城二ノ丸南側推定平面図② (1/800)

第11図100～第12図110は鉢で、第11図100～102は染付、第11図103が青磁、第11図104～第12図109が陶器、第12図110が土師質土器である。第12図111は染付徳利である。第11図100は角鉢と思われる。第11図103は陰刻、第12図109が象嵌で文様が施されている。食膳具は、染付が一番多く出土しているが、他の種類の焼物も多く、当時使用していた食器の多様さを窺い知ることができる。

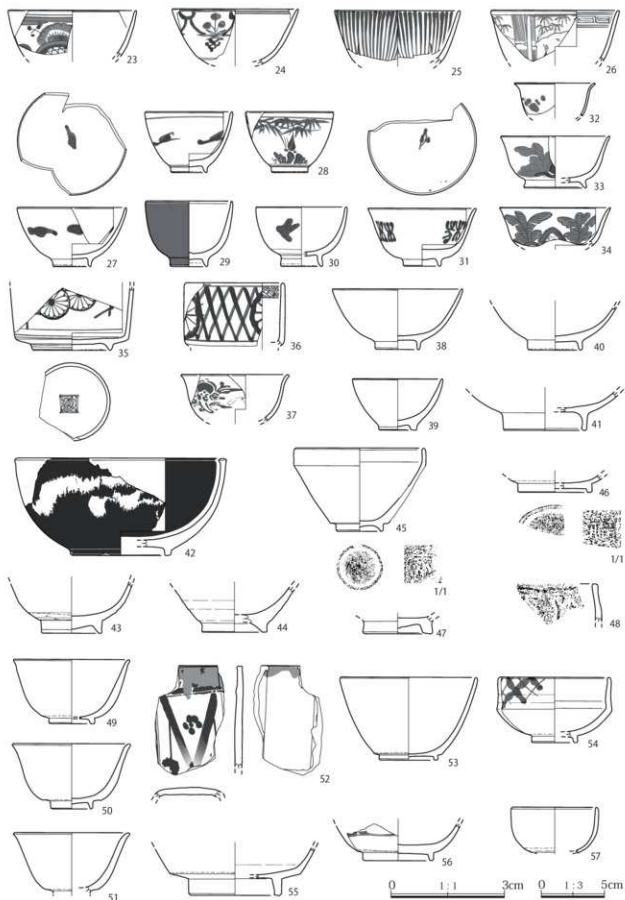
第13図112～第14図140は調理具・貯蔵具を掲載した。第13図112・113は陶器土鍋である。ともに小型と思われ、耳が1か所遺存する。第13図114～122は土師質土器の内耳土器で、第13図114～118はいわゆる内耳鍋、第13図119～122はいわゆる焙烙である。第13図123～125は陶器土瓶、第13図126は陶胎染付の急須、第13図127は染付急須である。第13図128～第14図132は播鉢で、第13図128・132は陶器、第13図129～131は焼締め陶器である。第14図133は土師質土器の焼塩壺、第14図134～136が陶器壺である。第14図134は肩部に耳があることから四耳壺又は三耳壺と思われる。第14図136は小型品で用途は不明である。第14図137は陶器水甕、第14図138・139は焼締め陶器甕、第14図140は陶器半甕である。

第14図141～第15図157は道具類を掲載した。第14図141～143は陶器乗燗、第14図144・145は焼締め陶器灯明皿受皿、第15図146は焼締め陶器、第15図147～149は土師質土器かわらけの灯明皿、第15図150は染付、第15図151は陶器の仏飯器、第15図152・153は土師質土器火鉢、第15図154は陶器香炉である。第15図155は焼締め陶器水滴、第15図156は土師質土器火消壺蓋、第15図157は不明であるが土師質土器火鉢ではないかと考えられる。

第16図・第17図は金属製品・石製品を掲載した。第16図1は真鍮製の矢立である。墨壺と筆筒の一体型であるが、一体型の一般的な形態である柄杓型とは異なり分離型の筆筒内に墨壺が含まれるような形態となっている。江戸時代後期の随筆「世の姿」に「天明の末までは真鍮にて柄杓の如きものばかりなりしが、寛政年中、印籠矢立といふもの行はれ、筆入れと墨入れとは別にして墨入れは印籠の如く作り、紐を筆入れに通して結び、腰に差せば、墨入れ印籠の如く下るなり。また文化の初めより生赤銅の矢立新製して、是より印籠型真鍮製の物



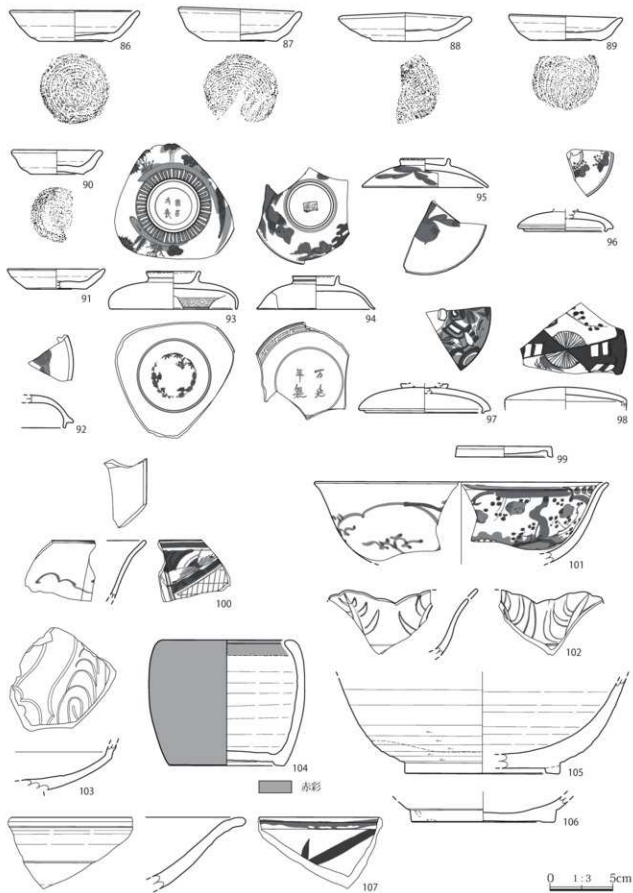
第8图 掘出土近世遺物①(碗1)



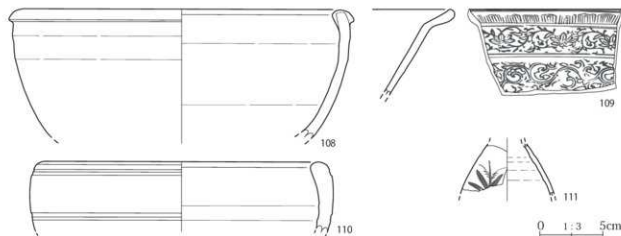
第9図 堀出土近世遺物②(碗2)



第10图 堀出土近世遺物③(碗3・小环・蕎麦猪口・皿1)



第11図 堀出土近世遺物④(皿2・蓋・鉢1)



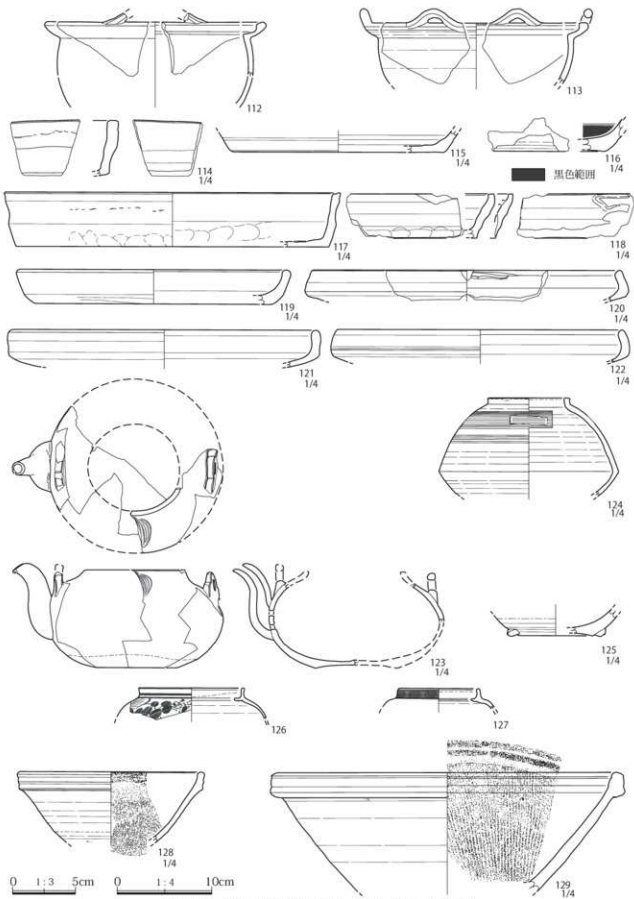
第12図 堀出土近世遺物⑤(鉢・徳利)

絶へたり」とあることから、本製品は一体型から分離型へ移行する過渡期的のものと思われる。第17図2・3は煙管雁首、第17図4は煙管吸口である。第17図2・4は真鍮製、第17図3は銅製で緑青が付着する。第17図5～7は鉄製品で、第17図6は釘と思われる。第17図5・7は用途不明で5は赤色塗料が塗布されている。第17図1は石製品の硯である。

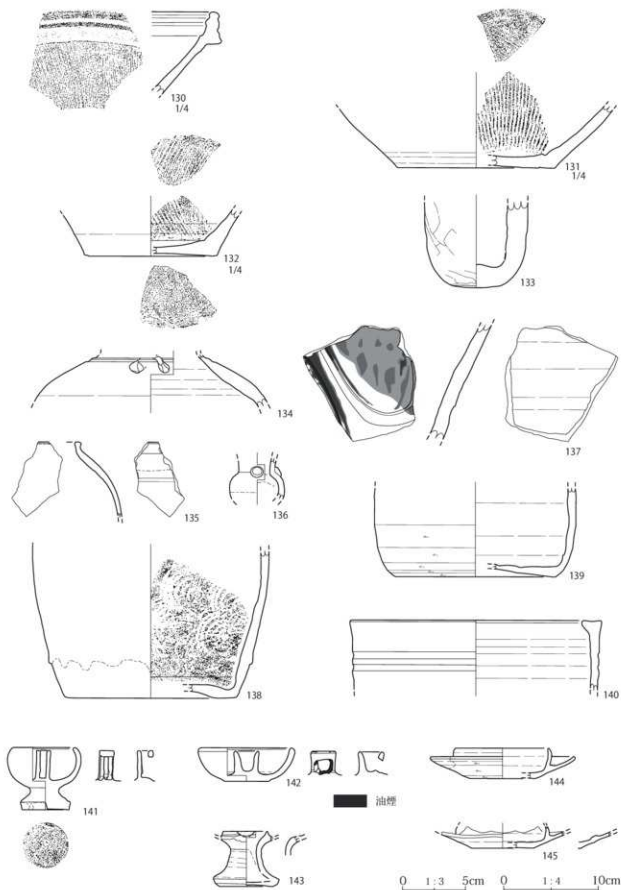
第18図～第24図は木製品である。堀下部は土が多量の水を含んでいたため、道具類・部材などの木製品のほか枝などの自然遺物も多量に残っていた。第18図1～第20図18は道具類を図示した。第18図1・2は下駄で、第18図1は差歯下駄、第18図2は一本下駄である。第18図2は大ききから女性用または子供用と思われる。第18図3～第19図8は曲げ物・桶などの底板である。第18図3・4・第19図8は小型の曲げ物、第18図5・6は桶類、第18図7は大型の桶のものと思われる。第19図9～12は桶の側板である。第19図9・10は持手を取り付ける穴があることから水汲み桶または手桶と思われる。第19図10は屋号と見られる焼印が押されている。第19図11はたらい、第19図12は湯桶と思われる。第19図13はのし棒、第20図14は糸巻きの一部である。第20図15は形状から風呂鎌の風呂部分と判断した。第20図16は細長い形状であること、横断面が窪んでいることから種と考えられる。第20図17は何らかの道具と思われるが不明である。第20図18は筒状で両端部がケズリ加工されており、形状から浮きと思われる。

第20図19～第23図39は部材と考えられるものを図示した。第20図19・第21図21は片方の先端が細くなる形状から楔と考えられる。第20図20・第21図22～25・第22図26～28・30は角材と判断した。第20図20は虎口面角に3つの切り込み、第21図22・24・25は釘穴がある。第21図24は側面に鉄釘が遺存する。第21図23はほぞがあったと思われる。第22図26は斜め方向に鉄釘が刺さり、一部炭化している。第22図27は斜め方向にφ4cmの穴が少なくとも3つ開いている。第22図28・30は1～2面が著しく炭化しており、一方から火を受けたものと思われる。第22図29・32～第23図39は板材である。第22図29は表面が整えられているが、裏面は著しく炭化している。裏側から火を受けたものと思われる。第22図32は鋸でつけたと思われる切り込みが6本見られる。第22図33は一部が斜めに切断加工されている。第23図34は床板か。第23図35は一方の端部を斜めに切断した薄く細長い板で、もう一方の端部に小さな切り込みがある。用途は不明である。第23図36～38は小さな板材で、いずれも釘穴が複数見られる。第23図39は細長い板材で、端部が細くなるように加工され、釘穴が見られる。用途は不明である。第22図31は角を落とした四方板目角材の先端部を利用した部材か。墨痕がある。第24図40・41は杭である。第24図40は堀下部の南壁際から覆土に刺さった状態で出土した。壁崩落などで堀の一部が埋まった後に打ち込まれていたものと思われる。

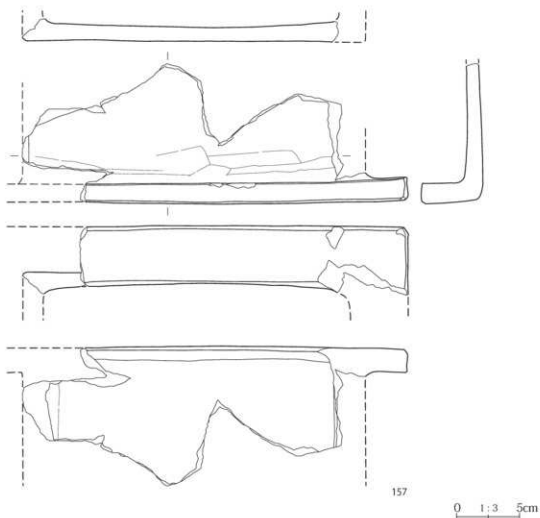
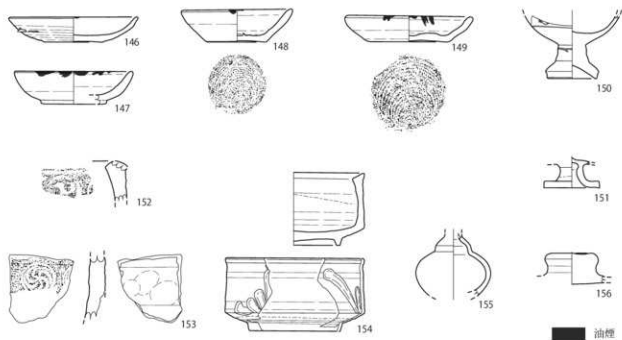
第25図～第31図は瓦を図示した。近世瓦が主体であるが、一部近代の瓦も掲載している。掲載するにあたって、堀出土の瓦は厳密に言えば堀に直接かかわるものではないと考えられることから種類ごとにまとめて掲載する方が良いかと考え、堀以外の遺構外(廃土・表土)の遺物も掲載している。出土位置は遺物観察表に記載した。



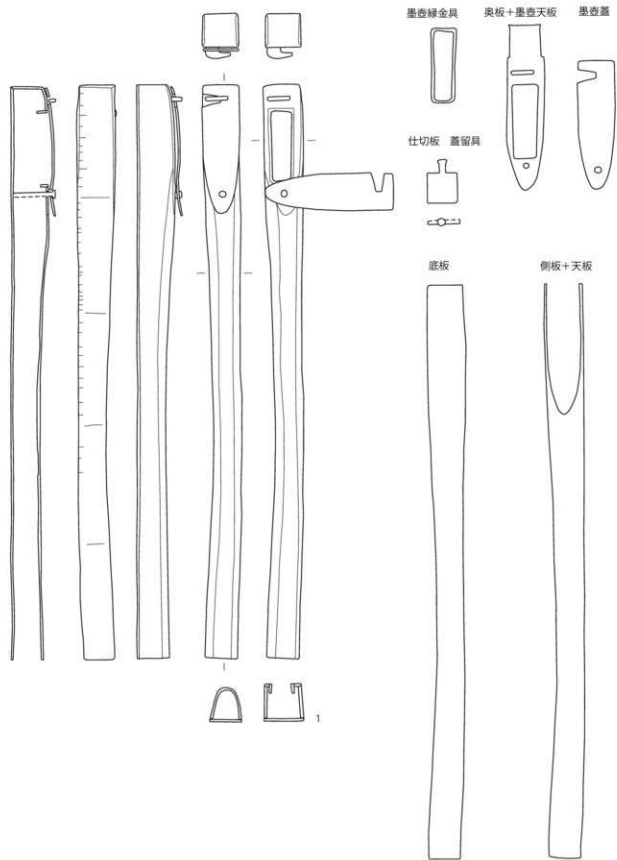
第 13 図 堀出土近世遺物⑥(銅・土瓶・急須・播鉢 1)



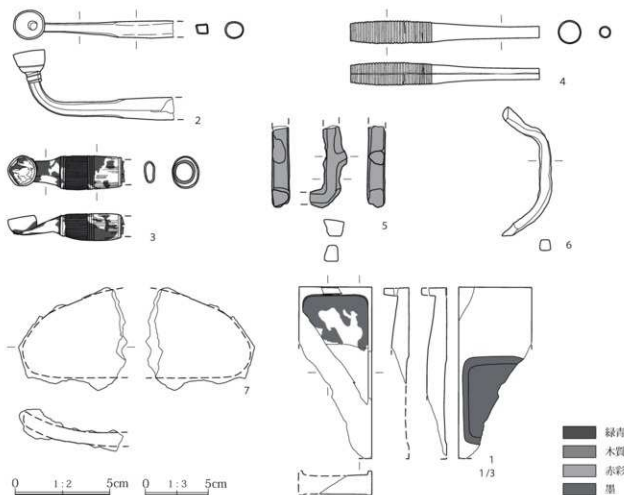
第 14 图 掘出土近世遺物⑦(播鉢 2・燒塩壺・壺・甕・半胴・乘獨・灯明皿受皿)



第15圖 掘出土近世遺物⑧灯明皿・仏飯器・火鉢・香炉・水滴・火消壺蓋



第16図 掘出土近世遺物⑨ (矢立)



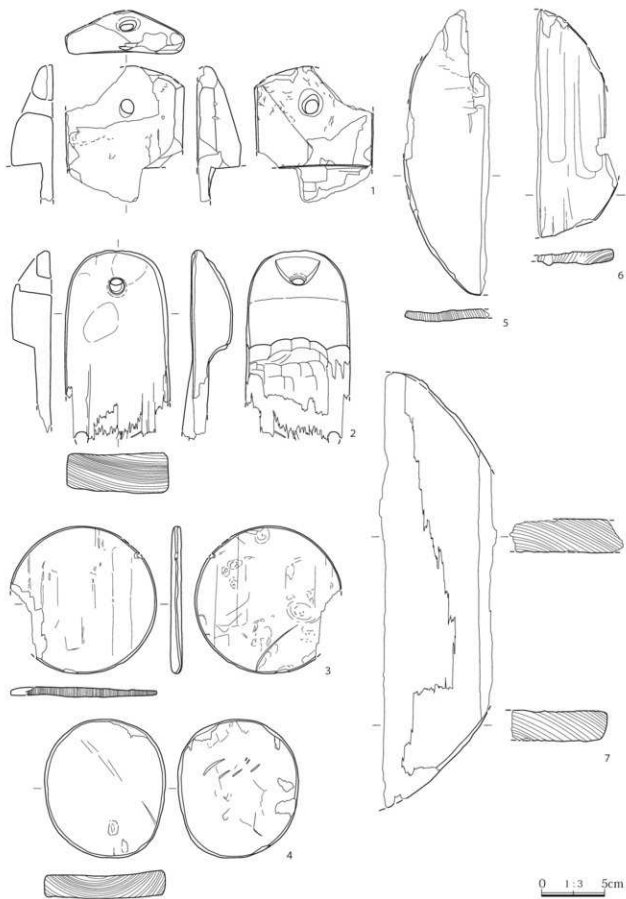
第17図 堀出土近世遺物⑩(煙管・鉄製品・硯)

出土した瓦は、高崎城遺跡 24 の調査を踏襲し A・B の 2 タイプに分類を試みた。A は江戸時代後半～明治時代にかけての瓦と考えられるものである。高温で良く焼かれたもので、黒色が主体である。表面に炭素の被膜が付着し銀色に光るものが見られる。B は江戸時代の瓦と考えられるものである。灰色から黒色で厚みのあるものが多く見られる。分類は遺物観察表にも掲載した。今回の分類は執筆者の感覚で行ったものであるため、間違っているものもあるかと思われるのでその場合はご容赦願いたい。

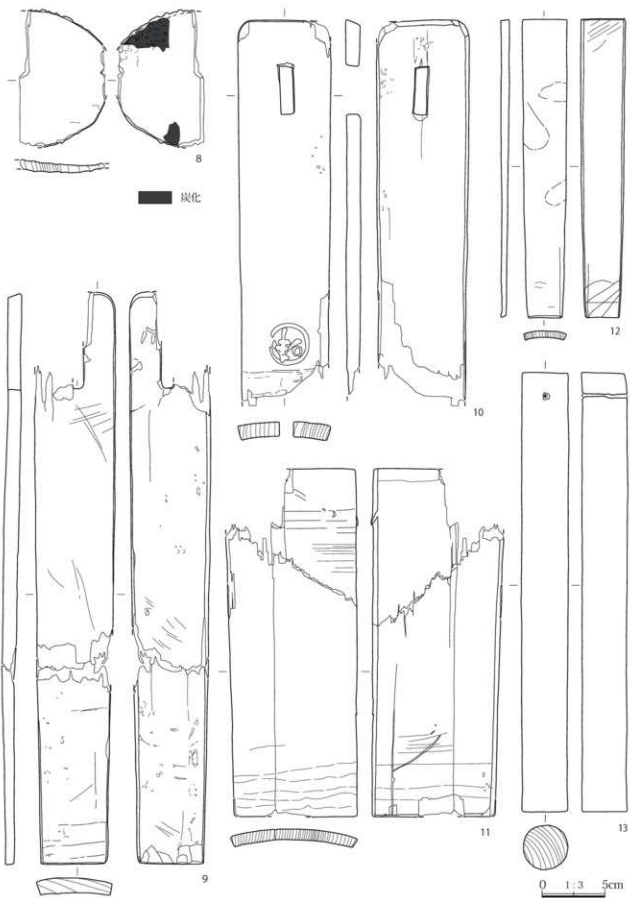
第 25 図 1～5 は伏間瓦、いわゆる冠瓦ですべて A タイプである。第 25 図 1～3 は角棧伏間瓦で第 25 図 3 は緑に刻印が押されている。第 25 図 4・5 は弧の形状から伏間瓦と判断した。第 25 図 6・7 は丸瓦と同じ形状であるが、緑に段差が見られることから鳥衾瓦と思われる。第 25 図 6 は A タイプで、釘穴がある。第 25 図 7 は B タイプである。第 25 図 8～13 はいずれも横幅が短く細長い形状を呈する畷斗瓦で、第 25 図 8～12 が A タイプ、第 25 図 13 が B タイプである。

第 25 図 14～16 は門や塀の屋根に用いる目板瓦である。第 25 図 14 は垂が付くもので、第 25 図 15 は垂が付き目板が左右両側に付くものである。第 25 図 16 は釘穴がある。第 25 図 14・16 が A タイプ、第 25 図 15 が B タイプである。第 25 図 17 は L 字型に垂の付いていた痕跡が見られることから角瓦と思われるもので、A タイプである。

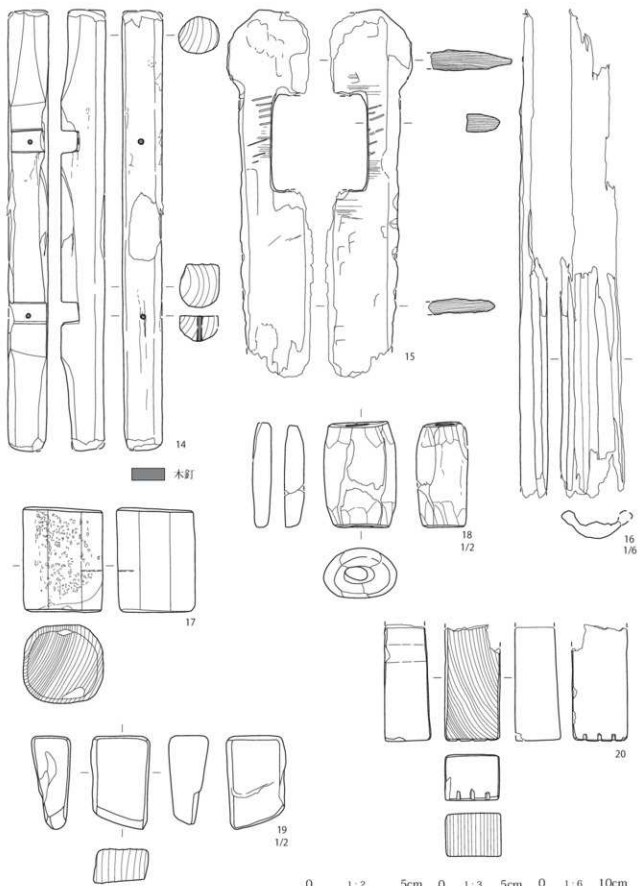
第 26 図 18～25 は軒丸瓦である。大きさによって 3 種類に分けられる。一つは直径約 16cm、一つは直径 13.2cm、一つは直径 12.3cm で大きい方から大・中 1・中 2 とした。文様は全て巴文で珠文は大が 24、中 1 が 16 個と思われ、中 2 は 16 個である。第 26 図 18～21 が A タイプ、第 26 図 22～25 が B タイプ、第 26 図 18・22 が大、第 26 図 24 が中 1、その他が中 2 である。第 26 図 26 は万十型の巴瓦で、軒丸瓦に載せるのが妥当であった。



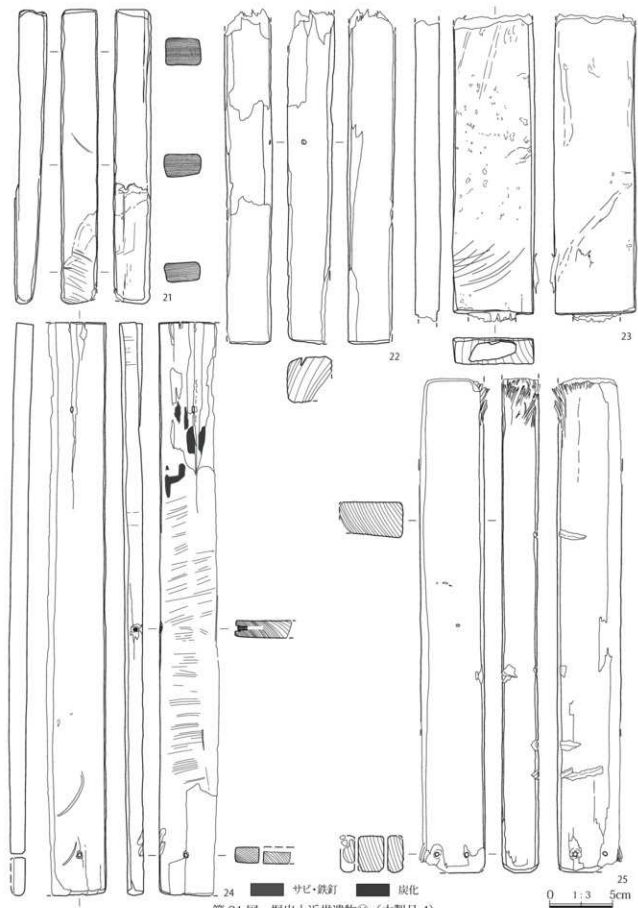
第18図 掘出土近世遺物①(木製品1)



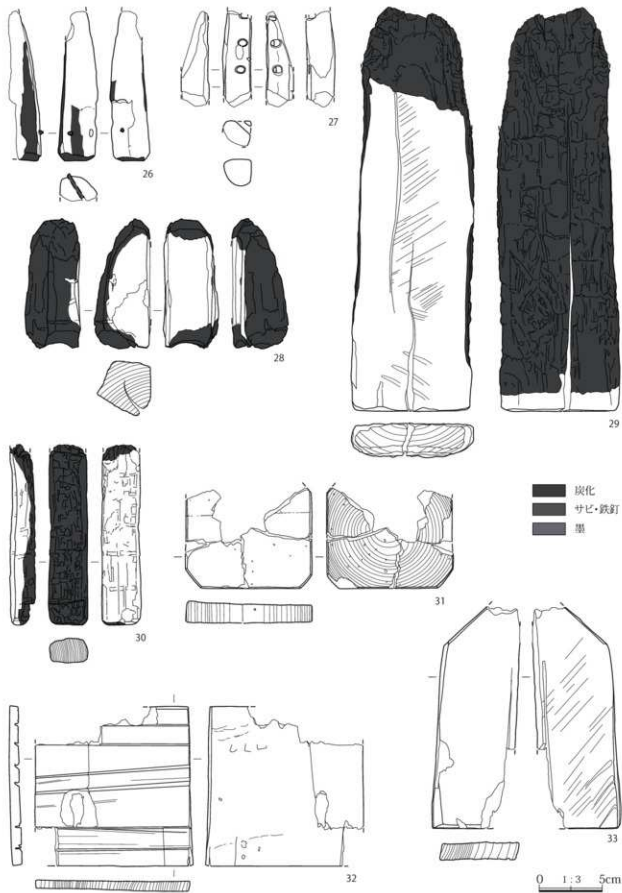
第19図 掘出土近世遺物⑫(木製品2)



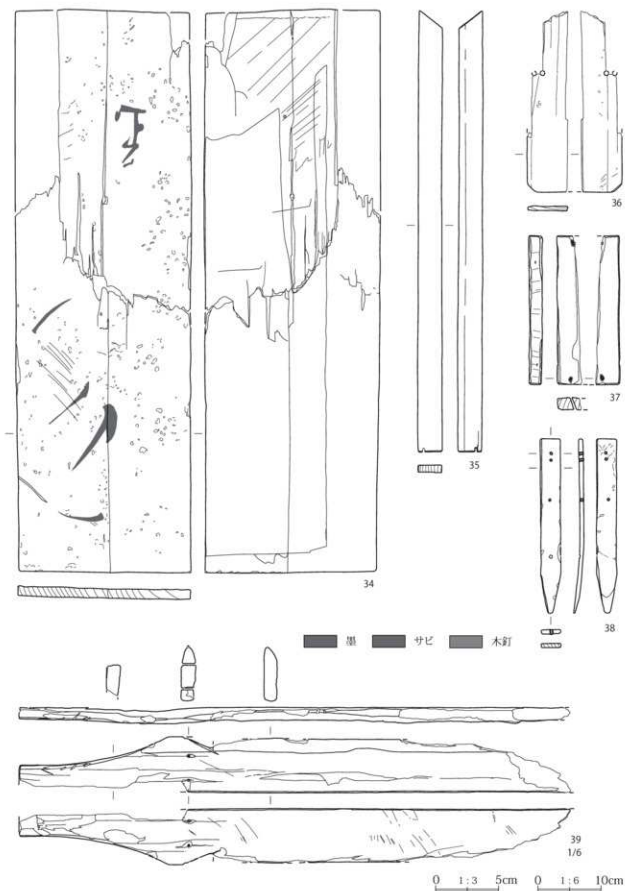
第20図 掘出土近世遺物③(木製品3)



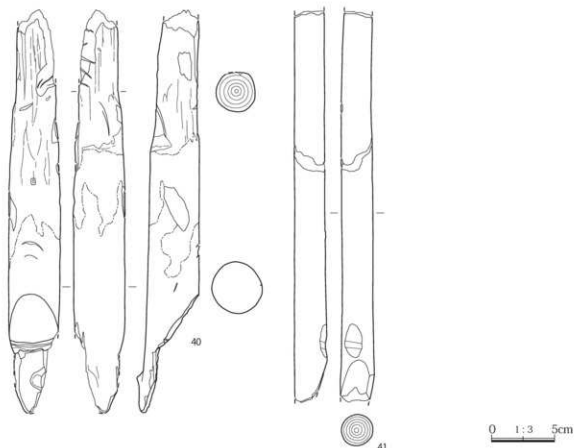
第21図 堀出土近世遺物⑩(木製品4)



第22図 掘出土近世遺物⑤(木製品5)



第23図 掘出土近世遺物⑩(木製品6)



第24図 掘出土近世遺物①（木製品7）

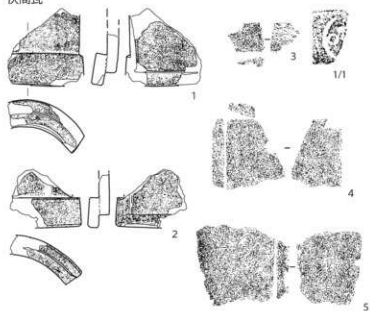
第26図27～第27図53は丸瓦である。第26図27～30は丸瓦と接続するための切り込みがあるもので隣棟で使用する丸瓦と思われる。全てBタイプである。第26図31～38は非常に浅い丸瓦である。第26図33・36がAタイプ、その他はBタイプである。第26図31～33は釘穴が見られるが、第26図31は端部からやや奥、第26図32・33は端部際と位置が異なる。第27図39～45はAタイプの丸瓦で、第27図39～41は玉縁部が遺存する。第27図39・41は内面にヘラ状工具痕が残る。第27図46～53はBタイプの丸瓦である。第27図46～48は玉縁部が遺存し、第27図47は内面にヘラ状工具痕が残る。

第27図54～67は軒平瓦で、第27図54～61・67がAタイプ、第27図62～66がBタイプである。第27図54～57・67は反りがなく平らな形状を呈する。丸瓦と併用して目板瓦と同様に門・塙で使用されたものと考えられる。瓦当の文様は、第27図54～57および第25図14目板瓦、第27図58～60、第27図61・65、第27図62・63、第27図64がそれぞれ同一の系統である。第27図66は無文の瓦当で、第27図67は側面に窪みがある。

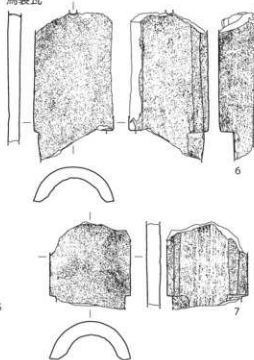
第28図は平瓦Aタイプ、第29図は平瓦Bタイプである。第29図85は縁に「○中にー」の刻印が押されている。第28図68・第29図88・89は釘穴があり、第28図69・70・第29図86・87は側面近くに縦方向の沈線がある。第28図80～84、第29図97～102は反りが弱いものである。

第30図は軒椀瓦・椀瓦である。第30図103が軒椀瓦Aタイプで、第30図104が軒椀瓦Bタイプである。第30図105～117が椀瓦で、第30図105～113がAタイプ、第30図114～117がBタイプである。第30図105は表面に変体仮名で「耳（又は曾）乃乃 ●耳（又は曾）に（又はそ）の ●に（又はそ）」と刻書されている。●は天（て）と読めるのではないかとと思われる。裏面には「威徳寺」と刻書されている。威徳寺は三ノ丸内の二ノ丸南中門・南廂に隣接する場所に建てられていた寺院である。威徳寺で使われていた瓦が南廂に落ちた・破壊されたものと思われる。第30図110は裏面にハケ状工具痕が残り、第30図111は端部が丸

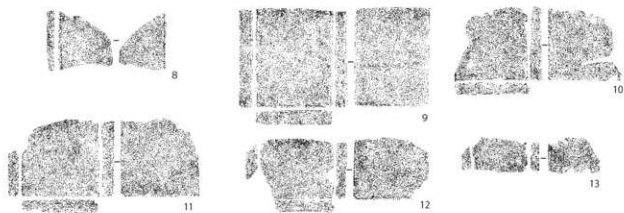
伏間瓦



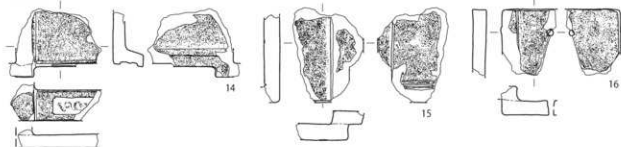
鳥会瓦



熨斗瓦



目板瓦



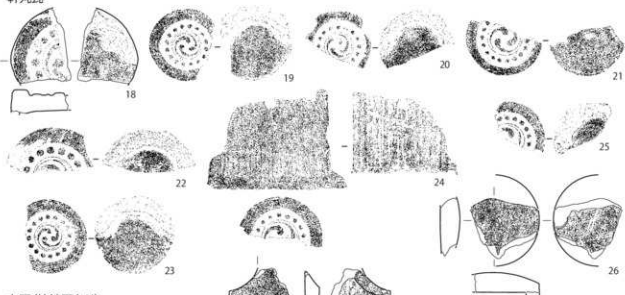
角瓦



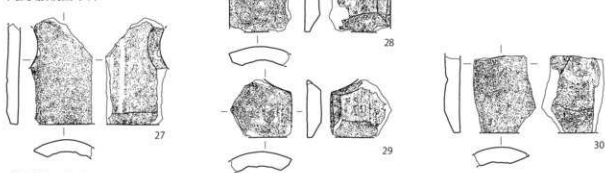
0 1:1 3cm 0 1:6 10cm

第 25 图 堀・調査区出土近世瓦①

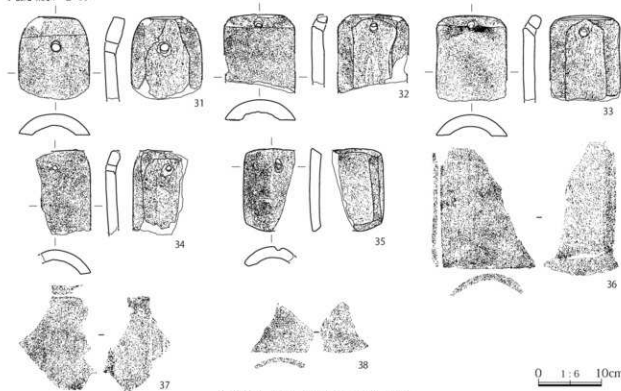
軒丸瓦



丸瓦 (接納面あり)



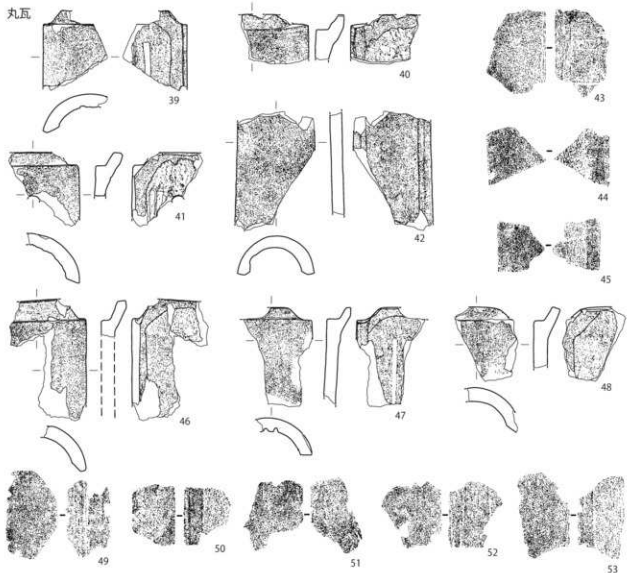
丸瓦 (浅いもの)



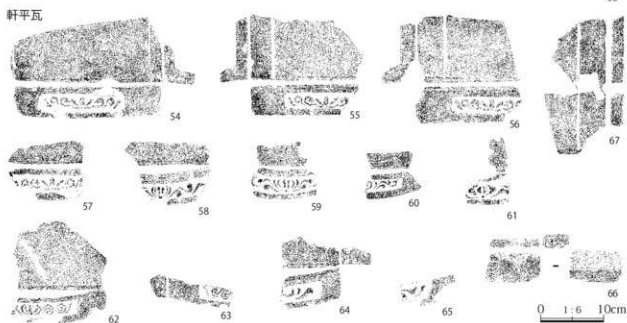
0 1:6 10cm

第26図 堀・調査区出土近世瓦②

丸瓦

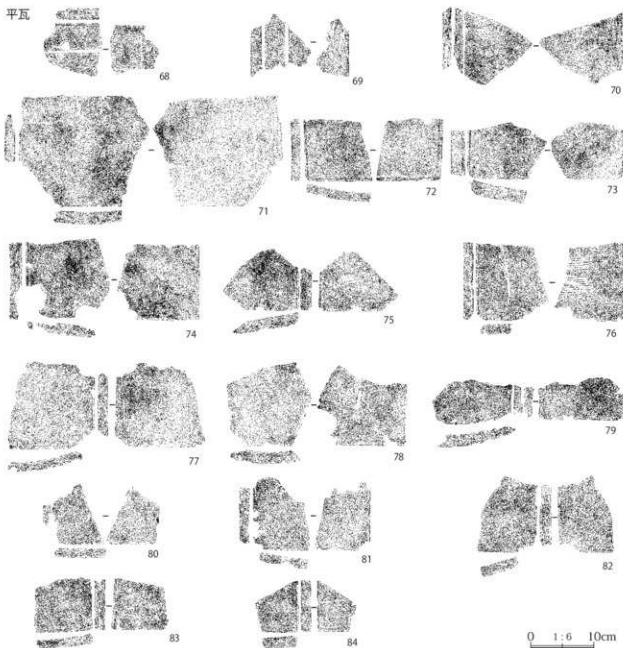


軒平瓦



第 27 图 堀・調査区出土近世瓦③

平瓦

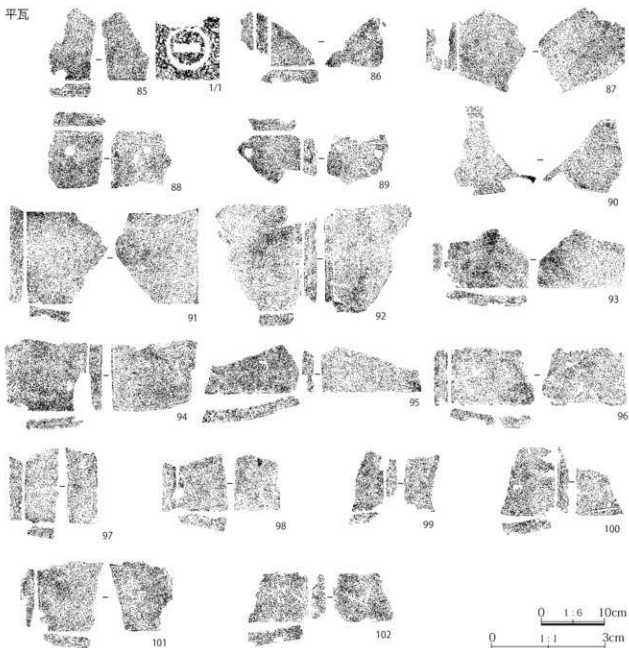


第28図 堀・調査区出土近世瓦④

く取められるものである。第30図116は屈曲部に切り込みが見られるものである。

第31図は不明瓦及び近代瓦である。第31図118・119は詳細不明の瓦で、いずれもBタイプである。第31図118は平らな面があり、大きく湾曲していることから丸瓦の一種と考えられるがどのような形状になるのか判断できなかった。第31図119は端部が尖り、尖る部分は弧を描くように湾曲する。断り瓦の一部と考えられる。第31図120～126は明確に近代瓦と判断できたもので、全てAタイプである。第31図120～122は明治初期に考案された引掛棧瓦である。第31図123～126は平瓦で刻印が押されたものである。第31図123・124は裏面に「四角囲いの間に上段左から群馬、下段左から藤岡、中央に丸で囲った和」の刻印が押されている。第31図125は緑に「永の右に」, 第31図126は緑に「扇型の囲いの内側に左から藤籬」の刻印が押されている。

平瓦



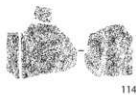
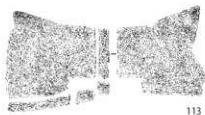
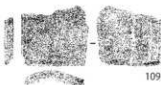
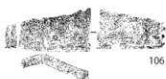
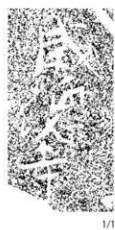
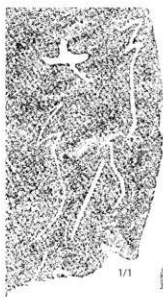
第29図 堀・調査区出土近世瓦⑤

第32図・第33図は近世以外の時代の遺物を図示した。第32図1は縄文時代の凹石、第32図2は縄文土器、第32図3は弥生土器壺である。第32図4～8は古墳時代の遺物で第32図4・5は土師器環、第32図6は土師器甕・甕の把手、第32図7は土師器高坏脚部、第32図8は円筒埴輪である。第32図9～18は平安時代の遺物で第32図9が土師器甕、第32図10～17が須恵器で、第32図10が坏蓋、第32図11・12が坏、第32図13～15が高台付坏、第32図16が円形硯、第32図17が甕である。第32図18は羽釜である。第33図19～22は古代瓦で、第33図19が軒丸瓦、第33図20・21が平瓦、第33図22が丸瓦である。備考 今回の発掘調査で高崎城二ノ丸南中門の西側に位置する二ノ丸南堀の東端部が明らかとなった。このことにより、これまで明確でなかった南中門の位置がより正確に推測できると思われる。これまでの調査事例と同様、高崎城の土塁を壊してその土を利用して堀を埋めたと考えられる堆積状況が確認され、南中門側では土塁盛土の前に黒褐色土で埋められた状況が確認された。

軒棧瓦

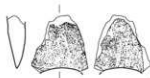


棧瓦

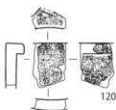


第30图 堀・調査区出土近世瓦⑥

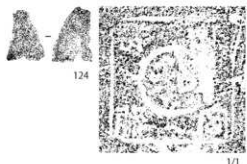
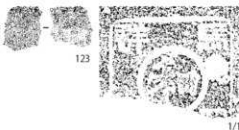
不明瓦



引掛棧瓦



刻印瓦



第31図 堀・調査区出土近世瓦⑦・近代瓦

第3節 土坑

今回の発掘調査では6基の土坑が確認された。調査区南壁際に4基(SK01~04)、二ノ丸南堀と重複する位置に2基(SK05・06)が分布する。

1号土坑 (第34図・第35図、写真図版5)

位置 調査区東部。**重複関係** なし。**遺存状態** 南側が調査区外にあり、北端部・西側がカクランによって壊されている。**覆土** 黒褐色土である。**平面形と規模** 楕円形を呈すると思われる。規模は長軸0.58m、短軸0.32m残存し、深さは16cmを測る。**長軸方向** N-74°-W。**壁面** 大きく外傾して立ち上がる。

底面 概ね平坦である。**遺物** 近世磁器、土師器、須恵器が出土し、そのうち磁器・土師器杯を図示した。

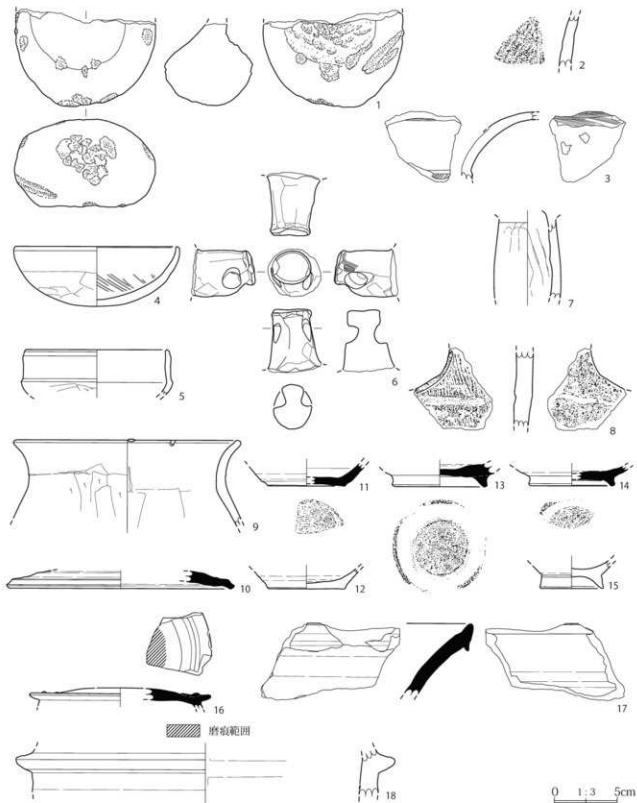
備考 大半がカクランで壊されているため性格は不明である。近世磁器が出土していることから、本遺構の帰属時期は近世以降と考えられる。

2号土坑 (第34図、写真図版5)

位置 調査区東部。**重複関係** SK04と重複し、本遺構の方が新しい。**遺存状態** 南端部のみが調査区外にあり、良好。**覆土** 上層が暗褐色土、下層が黒褐色土である。**平面形と規模** 円形を呈すると思われる。規模は長軸が0.78mで、短軸は0.68m残存する。深さは25cmを測る。**長軸方向** なし。**壁面** 外傾して立ち上がる。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 近世瓦、土師器、須恵器が出土したが、図示し得るものはなかった。**備考** 形態に特徴がないことから遺構の性格は不明である。近世瓦が出土していることから、本遺構の帰属時期は近世以降と考えられる。

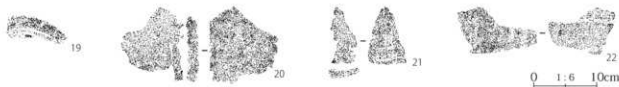
3号土坑 (第34図、写真図版5)

位置 調査区東部。**重複関係** なし。**遺存状態** 良好。**覆土** 黒褐色土である。**平面形と規模** 不整



第 32 図 堀出土縄文時代～平安時代遺物

円形を呈する。規模は長軸 0.55 m、短軸 0.49 m、深さは 25cm を測る。長軸方向 N-75°-E。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面 概ね平坦である。遺物 なし。備考 形態に特徴がないことから遺構の性格は不明である。出土遺物がないことから、本遺構の帰属時期は不明である。



第33図 堀出土古代瓦

4号土坑 (第34図・第35図、写真図版5・13)

位置 調査区東部。**重複関係** S D 0 4と重複し、本遺構の方が新しい。**遺存状態** 北側カクランによって壊されている。**覆土** 暗褐色土である。**平面形と規模** 楕円形を呈すると思われる。規模は長軸0.66m、短軸0.53mが残存し、深さは19cmを測る。**長軸方向** N-15°-W。**壁面** 南壁は外傾して立ち上がり、東壁は垂直に立ち上がり上部が外反する。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 近世瓦、近世陶器、灰軸陶器、土師器、縄文土器が出土し、そのうち灰軸陶器、縄文土器を図示し得た。**備考** 形態に特徴がないことから遺構の性格は不明である。近世瓦が出土していることから、本遺構の帰属時期は近世以降と考えられる。

5号土坑 (第34図・第35図、写真図版5・13)

位置 調査区東部。**重複関係** ニノ丸南堀・S D 0 3と重複し、本遺構が一番新しい。**遺存状態** 北側を二ノ丸南堀と一緒に掘ってしまったため壊してしまったが、大半は残存する。**覆土** 黒褐色土・暗褐色土と灰黄褐色土が交互に堆積する。**平面形と規模** 南北方向に細長い長方形で南端部が東側へ屈曲する。規模は長軸が3.71mが残存し、短軸は0.69m、深さは72cmを測る。**長軸方向** N-9°-W。**壁面** 西壁はほぼ垂直に立ち上がり、東壁は外傾して立ち上がる。**底面** 概ね平坦であるが、北側へ傾斜している。**遺物** 近代鉄製品、近世瓦、近世陶磁器、古代瓦、土師器、弥生土器が出土し、そのうち近代鉄製品、近世瓦・染付、古代瓦、弥生土器を図示し得た。第35図5は弥生土器で、赤彩が施されていることから高坏部部と思われる。第35図6は古代の丸瓦である。第35図7～9は近世染付で、第35図9は植木鉢破片である。第35図10は近代鉄製品で、ダルマストープの金網と思われる。第35図11～14は近世瓦ですべてAタイプである。第35図11が鬘斗瓦、第35図12が軒平瓦、第35図13が軒棧瓦、第35図14が棧瓦である。**備考** 形態に特徴がないことから遺構の性格は不明である。二ノ丸南堀を切っていること、近代遺物が出土していることから、本遺構の帰属時期は近代以降と考えられる。

6号土坑 (第34図)

位置 調査区東部。**重複関係** ニノ丸南堀・S E 0 1と重複し、本遺構が一番新しい。**遺存状態** 上部を二ノ丸南堀と一緒に掘ってしまったため壊してしまったが、下部1/3は残存する。**覆土** 底部際に灰黄褐色砂質シルト、下層にぶい黄褐色砂質シルト、上層にぶい黄褐色砂質シルト・土が南から北へ傾斜して堆積する。

平面形と規模 東西方向に長い不整形長方形を呈する。規模は長軸が3.32m、短軸は1.13m、深さは98cmを測る。

長軸方向 N-78°-E。**壁面** 外傾して立ち上がる。**底面** 概ね平坦であるが、西側へ緩やかに傾斜している。**遺物** なし。**備考** 形態に特徴がないことから遺構の性格は不明である。遺構覆土が二ノ丸南堀南壁際に堆積する自然堆積土と類似していることから、堀が埋められた後に掘られたが直ぐに埋められた土坑と判断した。帰属時期は近代以降と考える。

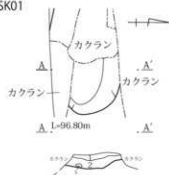
第4節 井戸跡

今回の発掘調査では1基の井戸跡が確認された。調査区北側の二ノ丸南堀と重複する位置に分布する。

1号井戸跡 (第36図、写真図版6・13)

位置 調査区東部の二ノ丸南堀内。**重複関係** ニノ丸南堀・S K 0 6と重複し、本遺構が一番古い。**遺存状態** 上部が二ノ丸南堀に壊されていると思われるが、下部は概ね良好。**覆土** 上部に地山と同じぶい黄褐色粘質土・ぶい黄褐色砂質シルト、その下に黒褐色土が自然堆積している。上部に地山と同じ土が堆積している状況から、二ノ丸南堀を造る際に埋まりきっていない穴があったため人為的に埋めたものと思われる。**平面**

SK01



SK01

- SK01
1. 10YR3/2 黒褐色土 しまり強 粘性中 ローム粘・粘土粘・礫(φ 3mm)少量含む
2. 10YR3/2 黒褐色土 しまり強 粘性強 ローム粘少量、粘土粘中少量、ロームブロック(φ 5mm)・白色粘(軽石)・礫(最大径)少量含む。

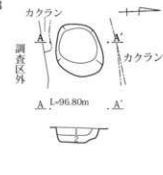
SK02



SK02

- SK02
1. 10YR3/3 暗褐色土 しまり強 粘性なし ロームブロック(φ 3mm)・ローム粘・灰化粘・粘土粘(φ 3mm)少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 しまり強 粘性弱 ローム粘少量、灰化粘粘・粘土粘・白色粘少量含む。灰化粘厚さ2mmの層状で20cmあり、木炭あり。
3. 10YR3/2 黒褐色土 しまり中 粘性中 ロームブロック(φ 5mm)・ローム粘・灰化粘(φ 5mm)・粘土粘・礫粘粒少量含む。ロームブロック(φ 3mm)あり。
4. 10YR3/2 黒褐色土 しまり弱 粘性強 ロームブロック(φ 5mm)少量、ローム粘・灰化粘(φ 5mm)・粘土粘少量含む。近辺瓦葺き含む。

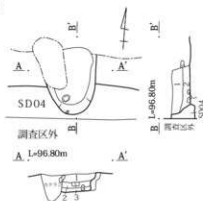
SK03



SK03

- SK03
1. 10YR2/3 黒褐色土 しまり強 粘性弱 灰化粘粘・礫粘粒少量、ロームブロック(φ 1mm)・ローム粘少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 しまり強 粘性強 ローム粘少量、ロームブロック(φ 3mm)・粘土粘・白色粘少量含む。

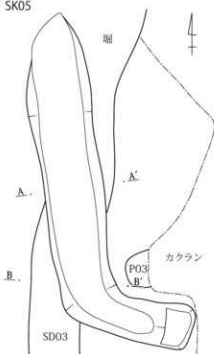
SK04



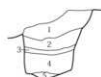
SK04

- SK04
1. 10YR3/3 暗褐色土 しまり強 粘性弱 ローム粘・灰化粘粘・粘土粘・白色粘・礫(φ 3mm)少量含む。
2. 10YR3/4 暗褐色土 しまり強 粘性弱 ローム粘少量、灰化粘粘・粘土粘(φ 5mm)・礫(最大径φ 3-5mm)少量含む。
3. 10YR3/4 暗褐色土 しまり強 粘性弱 ローム粘・灰化粘粘・礫(φ 3mm)少量含む。

SK05



A, L=1.96.50m



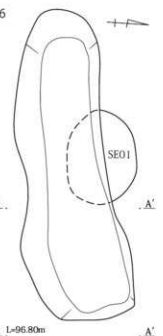
B, L=1.96.50m



SK05

- SK05
1. 10YR3/2 黒褐色土 しまり強 粘性なし 礫粘粒少量、ロームブロック(φ 3mm)・ローム粘・灰化粘粘・粘土粘・礫(φ 3mm)少量含む。
2. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質砂 しまり弱 粘性弱 ロームブロック(φ 3mm)・ローム粘・礫粘粒少量、粘土粘・礫(φ 1mm)少量含む。
3. 10YR4/2 灰黄褐色土 しまり強 粘性弱 ローム粘少量、礫粘粒少量含む。
4. 10YR3/2 黒褐色シルト質砂 しまり弱 粘性弱 ローム粘・白色粘・礫(φ 3mm)少量含む。
5. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質砂 しまり弱 粘性中 ローム粘少量、灰化粘粘・礫粘粒少量含む。
1. 10YR3/3 暗褐色土 しまり強 粘性なし ローム粘少量、ロームブロック(φ 3mm)・白色粘(軽石)少量含む。
2. 10YR3/2 黒褐色土 しまり強 粘性強 ローム粘、ロームブロック(φ 5mm)・ローム粘・礫粘(φ 1mm)・礫(最大径)少量含む。
4. 10YR3/2 黒褐色土 しまり強 粘性弱 ロームブロック(φ 1mm)・礫粘(φ 5mm)・礫(φ 5mm)少量含む。

SK06



A, L=1.96.80m

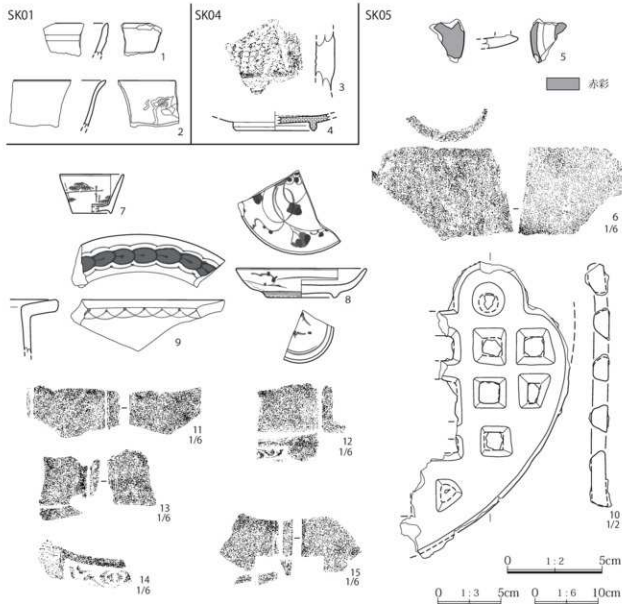


SK06

- SK06
1. 10YR4/3 濃い黄褐色土 しまり強 粘性中 礫粘粒(φ 1mm)・礫(φ 1mm)少量、ローム粘・灰化粘(φ 1mm)少量含む。
2. 10YR3/3 濃い黄褐色シルト質砂 しまり強 粘性強 礫粘粒(φ 1mm)少量、ローム粘・白色粘(軽石)φ 1mm少量、(φ 3mm)少量含む。
3. 10YR6/3 濃い黄褐色シルト質砂 しまり強 粘性強 白色粘(φ 1mm)・礫粘粒・礫(φ 1mm)少量含む。
4. 10YR4/2 灰黄褐色シルト質砂 しまり強 粘性中 礫粘粒(φ 1mm)少量、白色粘(φ 5mm)少量含む。灰化粘(φ 3mm)あり。

0 1:40 1m

第34図 1号～6号土坑平面・断面図



第35図 土坑出土遺物

形と規模 若干潰れた円形を呈する。規模は長軸 1.00 m、短軸 0.73 m を測る。堀壁面の中ほどにあるため遺構確認面からは 2.7 m に達したことから、これ以上の掘削は危険と判断し、確認できた面から深さ 79cm の所で掘り下げをとりやめた。**長軸方向** N-90°-E。**壁面** 垂直に立ち上がる。**底面** 危険と判断し掘削をやめたため不明。**遺物** 陶磁器、古代瓦、土師器、古式土師器、木製品が出土し、そのうち青磁、古代瓦、土師器、古式土師器、木製品を図示した。**備考** 遺構の形態の特徴から井戸跡と判断した。自然堆積土の上に入為堆積土が堆積している状況から、帰属時期は二ノ丸南堀が造られる前の中世と考えられる。

第5節 溝跡

今回の発掘調査では 4 条の溝跡が確認された。調査区南壁際に 2 条 (S D 0 2・0 4)、二ノ丸南堀付近に 2 条 (S D 0 1・0 3) が分布する。S D 0 1 は 3 つに分断されているが同一直線上にあることから 1 つの溝跡と判断した。S D 0 1・0 2・0 4 は二ノ丸南堀とほぼ平行に、S D 0 3 は二ノ丸南堀と直交する方向に走る。

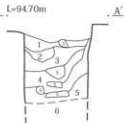
1号溝跡 (第37図・第38図、写真図版6・13)

位置 調査区東部、二ノ丸南堀に隣接する。**重複関係** S D 0 3 と重複し、本遺構の方が古い。**遺存状態**

SE01

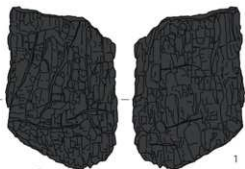


A. L=94.70m



SE01

1. 10YR5/3 に近い黄褐色粘質土。土中層。粘質中。燧石(φ1cm)多数、白色砂石(φ1cm)少量、礫(最大)散見済む。
2. 10YR5/2 に近い黄褐色粘質シルト。土中層。粘質中。燧石(φ5mm)少量、燧石(φ1cm)少量(φ3mm)散見済む。
3. 10YR3/1 黄褐色シルト質砂。土中層。粘質中。粘質中。燧石(φ5mm)少量、燧石(φ1cm)少量(φ3mm)散見済む。礫(最大)あり。
4. 10YR2/2 黄褐色シルト質砂。土中層。粘質中。粘質中。燧石(φ5mm)少量、燧石(φ1cm)少量(φ3mm)散見済む。礫(最大)あり。
5. 10YR2/2 黄褐色シルト質砂。土中層。粘質中。粘質中。燧石(φ5mm)少量、燧石(φ1cm)少量(φ3mm)散見済む。礫(最大)あり。
6. 10YR2/2 黄褐色シルト質砂。土中層。粘質中。粘質中。燧石(φ5mm)少量、燧石(φ1cm)少量(φ3mm)散見済む。礫(最大)あり。



炭化

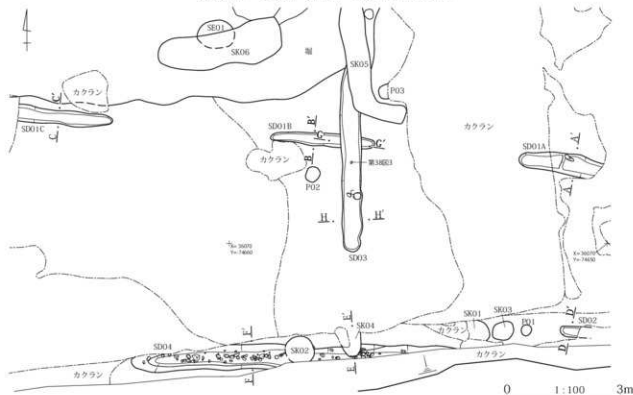
0 1:40 1m

0 1/6

0 1:3 5cm

0 1:6 10cm

第36図 1号井戸跡平面・断面図、出土遺物



SD01C

C. L=96.60m C'



SD01B

B. L=96.60m B'



SD01A

A. L=96.60m A'



SD03

G. L=96.60m G'



SD04

F. L=96.80m F'



SD04

E. L=96.80m E'



SD02

D. L=96.80m D'



SD03

H. L=96.80m H'



0 1:50 1m

第37図 1号~4号溝跡平面・断面図

SD01

- 10YR2/3 黒褐色土、しまり強、粘性なし、礫化なし(φ 5mm)少量、ロームブロック(φ 1mm φ 5mm)・ローム殻・礫(礫は黒褐色)土(φ 5mm)・炭化物(炭)・焼土(焼)を豊富に含む。
- 10YR3/3 黒褐色土、しまり強、粘性强、ローム多量、ロームブロック(φ 5mm)・焼土(焼)・炭化物(炭)を豊富に含む。
- 10YR3/3 黒褐色土、しまり強、粘性强、ローム少量、ロームブロック(φ 3mm)・焼土(焼)・炭化物(炭)・礫(φ 1mm)を豊富に含む。
- 10YR2/3 黒褐色土、しまり強、粘性なし、ロームブロック(φ 5mm)少量、ロームブロック(φ 3mm)・炭化物(炭)・焼土(焼)・白色砂(砂)・炭化物(炭)を豊富に含む。
- 10YR3/2 黒褐色土、しまり強、粘性强、ロームブロック(φ 5mm)・ローム殻・炭化物(炭)・白色砂(砂)を豊富に含む。

SD02

- 10YR2/3 黒褐色土、しまり強、粘性なし、ローム殻少量、ロームブロック(φ 3mm)・炭化物(炭)・焼土(焼)・礫(φ 1mm)を豊富に含む。

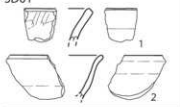
SD03

- 10YR3/3 黒褐色土、しまり強、粘性强、炭化物(炭)・焼土(焼)・白色砂(砂)を豊富に含む。
- 10YR3/3 黒褐色土、しまり強、粘性强、ローム殻・礫(φ 5mm)少量、ロームブロック(φ 5mm)・炭化物(炭)・焼土(焼)・白色砂(砂)・炭化物(炭)を豊富に含む。
- 10YR3/3 黒褐色土、しまり強、粘性なし、ローム殻少量、ロームブロック(φ 3mm)・炭化物(炭)・白色砂(砂)を豊富に含む。
- 10YR3/2 黒褐色土、しまり強、粘性なし、ロームブロック(φ 5mm)・ローム殻・焼土(焼)を豊富に含む。

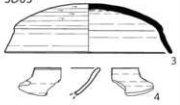
SD04

- 10YR3/2 黒褐色土、しまり強、粘性なし、ロームブロック(φ 5mm)・炭化物(炭)・焼土(焼)・礫(礫は黒褐色)を豊富に含む。
- 10YR2/2 黒褐色土、しまり強、粘性なし、ローム殻・礫(φ 3mm)・礫(φ 3mm)を豊富に含む。

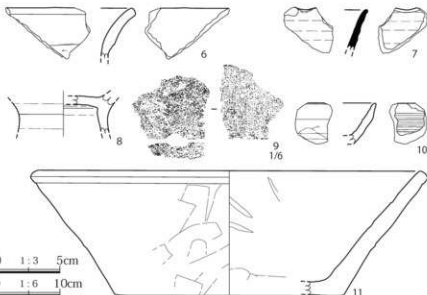
SD01



SD03



SD04



第38図 溝跡出土遺物

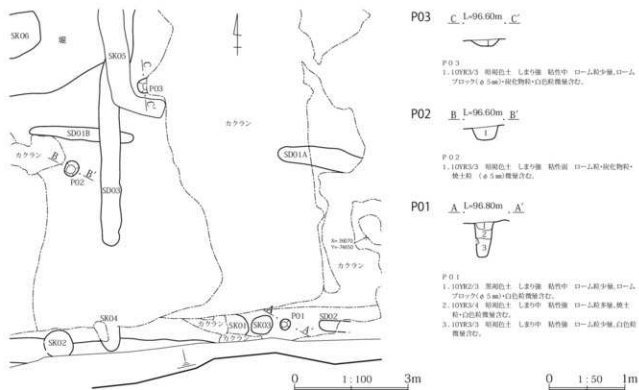
西側がカクランによって壊されている。上部もカクランによって壊されていると思われる、途切れるように確認された。覆土 黒褐色土・暗褐色土が堆積する。規模 長さは15.6m残存する。幅は0.3～0.6m、深さは6～17cmを測る。長軸方向 N-84°-W。壁面 外傾して立ち上がる。底面 概ね平坦である。遺物 土師器、須恵器が出土し、そのうち土師器甕、須恵器杯を図示した。備考 本遺構は、二ノ丸南堀の南側に隣接し、東西方向に走る幅の狭い溝跡である。堀の南側には土塁があったと考えられること、出土遺物が平安時代のものに限られていたことから、本遺構の帰属時期は平安時代と考えられる。

2号溝跡 (第37図、写真図版6)

位置 調査区南壁際。重複関係 なし。遺存状態 東側がカクランによって壊されている。西側もカクランによって壊されている可能性がある。覆土 黒褐色土である。規模 長さは0.9m残存する。幅は0.3m、深さは3cmを測る。長軸方向 N-83°-W。壁面 外傾して立ち上がる。底面 概ね平坦である。遺物 なし。備考 本遺構は、調査区南壁際に位置する東西方向に走る溝跡と考えられる。出土遺物がないため本遺構の帰属時期は不明であるが、SD01と平行していること、規模も近いことからSD01と同時期の平安時代の可能性が考えられる。

3号溝跡 (第37図・第38図、写真図版6・7・13)

位置 調査区東部、二ノ丸南堀に接する。重複関係 二ノ丸南堀・SK05・SD01と重複し、本遺構は二ノ丸南堀・SD05より古く、SD01より新しい。遺存状態 北側がSK05によって壊されている。覆土 暗褐色土・黒褐色土が堆積する。規模 長さは5.0m残存する。幅は0.4～0.5m、深さは8cmを測る。長軸方向 N-1°-W。壁面 外傾して立ち上がる。底面 概ね平坦であるが、北側に向かって非常に緩やかに傾斜する。遺物 中世土師質土器、須恵器、土師器が出土し、そのうち土師質土器かわらけ、須恵器



第39図 1号～3号ピット平面・断面図

円蓋を図示した。備考 本遺構は、二ノ丸南堀と南側で隣接し、堀と直交する方向に走る溝跡である。堀の南側に土塁があったと考えられること及び出土遺物から、本遺構の帰属時期は中世と考えられる。

4号溝跡 (第37図・第38図、写真図版7・13)

位置 調査区南壁際。**重複関係** SK02・SK04と重複し、本遺構の方が古い。**遺存状態** 東側が調査区外にあるが、概ね良好。**覆土** 黒褐色土・暗褐色土が堆積する。**規模** 長さは8.6mが確認された。幅は0.7m、深さは26cmを測る。**長軸方向** N-90°-E。**壁面** 外傾して立ち上がる。**底面** 中央部に向かって緩やかに傾斜する。**遺物** 近世瓦、近世陶器・焼締め陶器・土師質土器、古代瓦、土師器、須恵器が出土し、そのうち焼締め陶器鉢、土師質土器かわらけ、古代瓦、土師器甕、須恵器杯・高台付杯を図示した。

備考 本遺構は、調査区南壁際に位置する東西方向に走る溝跡である。二ノ丸南堀と平行していることから堀・土塁と関わりのあるものと考えられ、帰属時期は近世と考えられる。

第6節 ピット

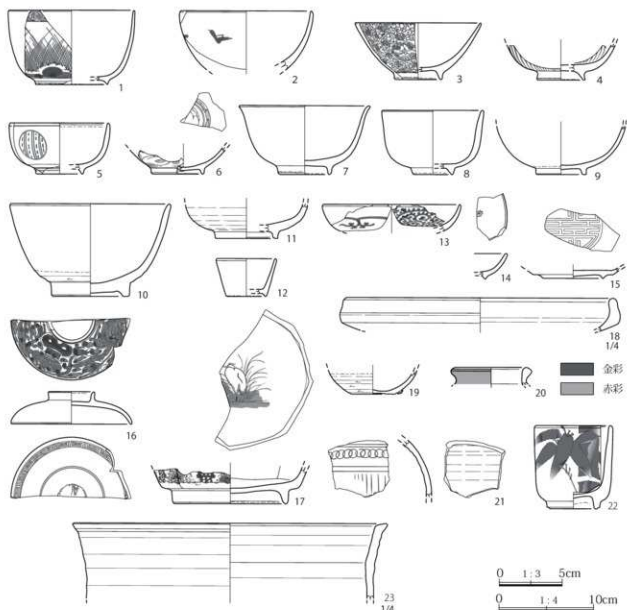
今回の発掘調査では3基のピットが確認された。カクランによって削平を受けていることから、本来はもっと多数のピットがあった可能性が考えられる。

1号ピット (第39図、写真図版7)

位置 調査区東部。**重複関係** なし。**遺存状態** 良好。**覆土** 黒褐色土・暗褐色土が堆積する。**平面形と規模** 円形を呈する。規模は長軸29cm、短軸27cm、深さは46cmを測る。**長軸方向** なし。**壁面** ほぼ垂直に立ち上がる。**底面** 概ね平坦である。**遺物** なし。**備考** 本遺構は、形態から柱穴と考えられる。出土遺物がないことから、本遺構の帰属時期は不明である。

2号ピット (第39図、写真図版7)

位置 調査区東部。**重複関係** なし。**遺存状態** 良好。**覆土** 暗褐色土である。**平面形と規模** 不整円形を呈する。規模は長軸41cm、短軸35cm、深さは17cmを測る。**長軸方向** なし。**壁面** 外傾して立ち上がる。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 土師器が出土したが図示し得なかった。**備考** 本遺構は、形態に



第40図 遺構外出土遺物

特徴がないことから性格は不明である。遺物が出土しているが遺構に伴うものではないと考えられることから、本遺構の帰属時期は不明である。

3号ピット (第39図)

位置 調査区東部。**重複関係** なし。**遺存状態** 東半分をカクランによって壊されている。**覆土** 暗褐色土である。**平面形と規模** 不整円形を呈する。規模は長軸41cm、短軸35cm、深さは17cmを測る。**長軸方向** なし。**壁面** 外傾して立ち上がる。**底面** 概ね平坦である。**遺物** 土師器が出土したが図示し得なかった。**備考** 本遺構は、形態に特徴がないことから性格は不明である。遺物が出土しているが遺構に伴うものではないと考えられることから、本遺構の帰属時期は不明である。

第7節 遺構外出土遺物

今回の発掘調査では、遺構外からも多数の近世陶磁器・近世瓦のほか、近代磁器及び中世土器が出土した。近世瓦はまともになっていたほうが見易いと考え掘出土遺物と一緒に掲載したが、土器類は分けて第40図に掲載することとした。廃土の9割近くが堀覆土であったことから、廃土出土遺物は堀内から出土したものの可能性が高い

と思われる。

第40図1～6は染付碗、第40図7～9は白磁碗、第40図10・11は陶器碗である。第40図12は白磁小坏である。第40図13・15は染付皿、第40図16は染付蓋、第40図17は染付鉢である。第40図18は土師質土器内耳土器、いわゆる焙烙、第40図19は陶器急須である。第40図20が色絵小型壺、第40図21が陶器壺である。第40図14・22は近代の染付皿・碗、第40図23は中世の土師質土器内耳土器、いわゆる内耳鍋である。

第8節 まとめ

高崎城遺跡25(第25次)の発掘調査では、近世高崎城二ノ丸南堀及び近代土坑2基、近世土坑3基・溝跡1条、中世井戸跡1基・溝跡1条、平安時代と思われる溝跡1条、時期不明の土坑1基・溝跡1条・ピット3基が確認された。

平安時代と思われる遺構は二ノ丸南堀の南に隣接する溝跡(SD01)である。二ノ丸南堀と方向が同一であるが、堀の南側に土塁があったとされることから高崎城築城以前で、出土遺物から平安時代のもと考えられる。時期不明としたSD02がSD01と長軸方向・規模がほぼ同じであることから道路の側溝など一連の遺構となる可能性が考えられる。

中世の遺構は二ノ丸南堀と重複する井戸跡(SE01)と溝跡(SD03)である。井戸跡が確認されたことから周辺に同時期の居住域があると考えられるが、カクランによって削平されてしまったため今回の調査範囲では確認できなかった。

近世の遺構は高崎城二ノ丸南堀、土坑3基(SK01・02・04)、溝跡1条(SD04)である。高崎城二ノ丸南堀は、今回の発掘調査範囲において南中門より西側の堀の東端部が確認された。堀と南中門の間には土塁があったと想定されることから南中門の遺構は確認されなかったが、南中門の位置はほぼ判明したということが出来る。また、東端部が確定できたことによって、過去の14次・16次・24次発掘調査成果と合わせて南中門西側の高崎城二ノ丸南堀の全体像を想定することが可能となった(第6図・第7図)。

二ノ丸南堀からは「威徳寺」と刻書された棧瓦が出土した。焼成前に寺名が刻まれていることから威徳寺で使用するために作られたものである。今回力不足で至らなかったが、瓦を精査することで瓦を調達した窯なし産地などが判明されるものと思われる。また、底面に「●●●● 鳥居氏」と人名が墨書された陶器小型碗が出土している。複数の高崎藩関連の文献資料に鳥居姓の人物が記載されていることから、松平(大河内)家の家臣の鳥居何某氏にまつわるものと考えられる。判読できていない文字があるため目的が不明な状況であるが、残りの文字が判読されて何のために墨書をしたためたのか明らかになることを期待したい。堀の中からは陶磁器などの多量の土器類、木製品のほか、金属製品、石製品、瓦といった遺物が出土した。堀の中から出土しているということで、落とした・廃棄したものがほとんどであると思われるが、様々な種類・形態のものが確認できたことで当時使用していたのを知り、理解するための一助となったものとする。

引用・参考文献

- 『高崎城遺跡』の第1次～第24次発掘調査報告書は表2に掲載しているのでそちらを参照
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2017 『東宮遺跡(3) ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第51集』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012 『東宮遺跡(2) -遺物編- ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第38集』
高崎市史編さん委員会 2002 『新編 高崎市史 資料編5 近世1』
九州近世陶磁学会 2009 『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通 関東・東北・北海道編』
九州近世陶磁学会 2004 『受容期の違いによる九州陶磁の様相』
九州近世陶磁学会 2001 『第11回 九州近世陶磁学会 資料 国内出土の肥前磁器 -東日本の流通をさぐる-』
関西近世考古学研究会 2000 『第12回関西近世考古学研究会大会 近世の末年代資料』
千代田区教育委員会・四番町歴史民俗資料館 1987 『千代田区立四番町歴史民俗資料館 特別展』

第3表 遺物観察表

種別	番号	出土位置	種類・器種	度量 (cm)			形状	地味	色調	部材、成・形、文、文様等の特徴	遺存状況
				口径	底径	高さ					
8	1	I区 堀下層	青磁染付 陶	(12.4)	5.8	7.2	粥	良好	明緑灰色	外面:全面青磁釉施。1～2mmの厚みがある。内面:口縁部除開の際に滑り、体部草木文を3単位。見込み二重線。中央に草木文。	口縁部 1/3 底部部 3/4 底面部 存在
8	2	I区 堀下層	染付 陶	(9.2)	(3.4)	5.7	粥	良好	—	外面:口縁部除開。体部一重線部で区画し、一方に杉林・唐・もう一方に竜・太閤・雲など。体下部部除開。脚部から左下へ見ゆる。高付台縁部彩色色付中に線を置く。高付部二重線。内面:口縁部四方障文。見込み二重線。中央に互角障文。	1/2
8	3	I区 堀上層	染付 陶	8.3	4.2	4.3	粥	良	—	外面:口縁部除開。体部中央が痺りつぶされた縦線模様(縦目型)の左側に中央が痺りつぶされた縦線模様の縦目型を帯びた文様を、茶葉のような文様の高部に置く。体下部部除開。高付部二重線。内面:口縁部除開。見込み二重線。脚部に漆付。漆継ぎの痕跡が。	1/2
8	4	I区 堀下層	染付 陶	(8.6)	(3.0)	5.8	粥	良好	—	外面:口縁部除開。体部草花文・漆付文。高付部除開。内面:口縁部四方障文。見込み二重線。中央に環状彩色障文。	1/2
8	5	I区 堀下層	染付 陶	(9.2)	(4.4)	5.0	粥	良好	—	外面:口縁部一体系下部1本の輪線文。高付部除開。内面:無文。口縁部除開。見込み二重線。	1/4
8	6	I区 堀下層	染付 陶	9.8	4.2	6.6	粥	良好	—	外面:口縁部一体系部除開に植物文(桐か)を矢張り平の他を右側文で埋める。体下部部除開。内面:植物文(桐か)を見込み1つ、体部に鳩目羽りに彩色文を添えし、その他を右側文で埋める。	口縁部一 体系部 1/3 底部部 存在
8	7	II区 堀下層	染付 陶	(10.3)	(4.5)	5.1	粥	良好	—	外面:口縁部一体系上部除開。体中部部除開。中央に雲文。高付部二重線。内面:無文。口縁部除開。見込み二重線。	1/3
8	8	I区 堀下層	染付 陶	—	(4.3)	(3.6)	粥	良好	—	外面:体部草木文。体下部部除開。高付部二重線。底部外輪線。中央に「明・無文」。天明年号と思われる。内面:無文。	体中部一 体系部 1/3
8	9	I区 堀下層	染付 陶	(9.7)	—	(4.8)	粥	良好	—	外面:口縁部除開。口縁部一体系部除開の両端。体中部2つ・右のふち雲文は縦か。体下部部除開。内面:無文。	口縁部一 体系部 1/3
8	10	II区 堀下層	染付 陶	(9.6)	—	4.2	粥	良好	—	外面:体部5割以上一部の色を帯びる。外面は右から左へ、内面は上から下へ通じている。	口縁部一 体系部 1/2
8	11	I区 堀上層	染付 陶	—	(6.9)	(3.5)	粥	良好	—	外面:口縁部一体系部除開。脚部。内面:無文。漆継ぎが行われている。	1/2
8	12	I区 堀下層	染付 陶	(10.1)	3.8	5.1	粥	良	—	外面:口縁部一体系下部二重線目文。体下部部除開。高付部除開。体部中央に三目目。内面:口縁部一体系部除開目文。見込み二重線。中央に菊花文。	口縁部一 体系部 1/4 底部部 1/2
8	13	I区 堀下層	染付 陶	(9.4)	(3.8)	5.1	粥	良	—	外面:口縁部一体系下部一重線目文。高付部二重線。内面:口縁部一体系部外輪線目文。見込み二重線。中央に菊花文。	1/3
8	14	I区 堀上層	染付 陶	(10.2)	(3.6)	5.4	粥	良好	—	外面:口縁部除開。口縁部一体系中部が花文・右側が二枚葉に上下の植物文の上に下つた二つの流線文を1つの単位として全部に置く。体下部に一重。下に二重の脚部。脚部に形不明の模様を交互に置く。高付部除開。内面:口縁部除開四方障文。見込み脚部。中央に「文・年」。文化年号と思われる。外面:第8回14と同じ意匠であるが口縁部一体系部の文様がすずかに異なる。右側の植物文様の上下の流線の土脈は両端が曲線に変わり、下側は直線の向が上下逆さになっている。置き方も異なる。内面:口縁部除開四方障文。見込み脚部。中央に「文化」。文化年号と思われる。	1/3
8	15	I区 堀上層	染付 陶	(10.6)	(3.6)	5.6	粥	良好	—	外面:口縁部一体系下部草木文。体下部部除開。高付部二重線。底部外輪線。中央に文様。文字か読み不明。内面:無文。	口縁部一 体系部 1/3 底部部 存在
8	16	II区 堀下層	染付 陶	(10.6)	4.3	6.1	粥	良好	—	外面:口縁部除開。体部松・竜を描いたものか。体下部一重線。高付部除開。内面:口縁部除開の際に3未1単位の文様を。	1/4
8	17	I区 堀下層	染付 陶	(10.0)	(3.4)	5.9	粥	良好	—	外面:口縁部除開。体部松・竜を描いたものか。体下部一重線。高付部除開。内面:口縁部除開の際に3未1単位の文様を。	1/4
8	18	I区 堀下層	染付 陶	(10.2)	(3.9)	5.0	粥	良好	—	外面:口縁部一体系部除開・松・草花・鹿面を描く。内面:無文。	1/4
8	19	I区 堀上層	染付 陶	(10.3)	3.3	5.1	粥	良好	—	外面:口縁部除開。口縁部一体系下部上下に輪線文。中央に雲文を描く。体下部に一重。下に二重の脚部。脚部に折角文と形不明の模様を交互に置く。高付部除開。内面:口縁部除開四方障文。見込み脚部。中央に菊花文あり。存の文である可能性が高い。	1/3
8	20	I区 堀上層	染付 陶	(10.3)	(3.8)	5.5	粥	良好	—	外面:口縁部除開。口縁部一体系下部上下に輪線文。中央に菊花文。体下部に一重。下に二重の脚部。脚部に三日月文と形不明の模様を交互に置くと思われる。高付部除開。内面:口縁部除開四方障文。体下部二重線。	1/4
8	21	I区 堀下層	染付 陶	10.0	3.6	5.1	粥	良好	—	外面:体下部植物文3単位。内面:無文。	2/3
8	22	I区 堀下層	染付 陶	9.5	3.5	4.2	粥	良好	—	小型碗。外面:体部草花文3単位。体下部部除開。高付部除開。内面:口縁部除開。見込み脚部。中央に点と横線を帯びる。	ほぼ完好
9	23	I区 堀下層	染付 陶	(10.0)	—	(3.6)	粥	良好	—	外面:口縁部一重線。体部部一草木文と思われる。内面:口縁部除開。口縁部除開。	口縁部破片
9	24	II区 堀下層	染付 陶	(9.9)	—	(4.4)	粥	良	—	外面:口縁部除開。口縁部一体系部除開した流線文に草花文を合わせたと思われる。体下部部除開。内面:口縁部一重線。内面:口縁部一重線。	口縁部一 体系部 1/2
9	25	II区 堀下層	染付 陶	(9.8)	—	(4.2)	粥	良好	—	外面:口縁部一体系部除開の際に菊花文を多数置き縦線模様を形成する。底部に向かうにつれて脚部が縮くなる。	口縁部一 体系部 1/2
9	26	II区 堀下層	染付 陶	(10.0)	—	(4.0)	粥	良好	—	外面:口縁部除開。口縁部一体系部一帯で竹文と龍と思われるものを置く。脚部中輪線が。内面:口縁部一重線の際に雲文。	口縁部一 体系部 1/2
9	27	I区 堀下層	染付 陶	8.6	2.9	4.7	粥	良好	—	小型碗。外面:体部部を表現したと思われる小さな輪線の文様を交互に置く。内面:見込み外面の小さい文様と同じもの。	口縁部一 体系部 1/2 底部部 存在
9	28	I区 堀下層	染付 陶	6.8	2.7	4.8	粥	良好	—	小型碗。外面:口縁部除開。口縁部一体系部の文様は系統化している。1つは上部に竹(竹か)・下部に植物文。もう1つは体中部に菊花文といった動きのある要素を帯びたものと思われる。高付部除開。内面:無文。	ほぼ完好
9	29	I区 堀下層	染付 陶	(6.7)	2.8	5.2	粥	良好	—	小型碗。外面:口縁部一体系部一帯に菊花文を描く。底部部外輪線。内面:無文。透明輪線。高付部透明輪。脚部に菊花文を描く1部を押し輪線。	口縁部一 体系部 1/2 底部部 存在
9	30	I区 堀下層	染付 陶	(7.1)	(3.1)	4.7	粥	良好	—	小型碗。外面:体部部と思われる文様を描く。体下部部除開。高付部二重線。高付部除開。内面:無文。	1/4
9	31	I区 堀下層	染付 陶	8.5	2.8	4.6	粥	良好	—	小型碗。外面:口縁部除開。体部部書体と思われる文字を90°ずらして交互に置く。1つは「林」と読めるがもう1つは同定不能。内面:見込みに形不明の文様。	口縁部一 体系部 2/3 底部部 存在

標	遺址位置	種類・器種	法量 (cm)	出土	焼成	色澤	遺存状況	遺存状況
番号			口径 底径 高さ					
10 63	I区 屋下層	焼締の陶器	— (4.3)	[2.1]	赤	良好	褐色色 外面：体下部に凹ヘラケズリ。高台部～底部ロクロナデ。全面暗赤褐色釉彩物。 内面：ロクロナデ。全面暗赤褐色釉彩物。	体下部～ 底部 1/3
10 64	I区 屋下層	焼締の陶器	— 6.0	[7.4]	赤	良好	暗赤褐色 同形碗。器底で高台状を呈する。外面：ロクロナデ。底部凹ヘラケズリ。 外縁高台状。体上部非赤褐色釉彩物。底部は凹ヘラケズリ。 全面暗赤褐色釉彩物。	体部～底部 1/3
10 65	II区 屋下層	染付 小片	(5.5) —	[2.1]	赤	良好	—	—
10 66	I区 屋上層	陶器 小片	(4.5)	1.6 1.8	赤	良好	灰白色 外面：口縁部～体下部全面に放射状沈積。口縁部～体中部白色釉彩物を施し、 濃汁掛け。内面：口唇部取り。口縁部～底部ナデか。全面白色釉彩物。 裏面付。	1/3
10 67	II区 屋下層	染付 器底部分	9.0 6.0 6.2	赤	良好	—	碗の目高台で中部部が無く。外面：口縁部隆起。口縁部～体中部暗赤文。 外縁高台状。下二重隆起。間に建付文。内面：口唇部四方隆起。見込 み中央に墨足花竹文。	口縁部～ 体部 4/5 底部存在
10 68	II区 屋下層	染付 器底部分	(7.8)	(5.6) 6.0	赤	良好	—	—
10 69	II区 屋下層	染付 器底部分	(7.5)	4.7 5.8	赤	良好	—	—
10 70	I区 屋下層	染付 器底部分	(7.1) —	[3.4]	赤	良好	—	—
10 71	I区 屋上層	染付 器底部分	(6.5) —	[2.0]	赤	良好	—	—
10 72	I区 屋下層	染付 器底部分	— 4.4	[2.3]	赤	良好	—	—
10 73	II区 屋下層	染付 皿	10.7 5.1 2.4	赤	良好	—	—	—
10 74	I区 屋下層	染付 皿	(13.9)	(7.6) 4.2	赤	良好	—	—
10 75	I区 屋下層	染付 皿	8.6	—	[1.3]	赤	良好	—
10 76	I区 屋下層	染付 皿	—	—	[1.3]	赤	良好	—
10 77	II区 屋下層	青磁 皿	—	—	[1.6]	赤	良好	—
10 78	II区 屋下層	青磁 皿	—	16.0	[2.3]	赤	良好	—
10 79	I区 屋上層	白磁 皿	(10.3)	(3.5) 2.3	赤	良好	—	—
10 80	I区 屋上層	白磁 皿	—	—	2.3	赤	良好	—
10 81	I区 屋下層	白磁 皿	—	—	2.3	赤	良好	—
10 82	I区 屋上層	陶器 皿	(11.8)	—	[2.6]	赤	良好	—
10 83	I区 屋下層	陶器 皿	—	(7.2)	[2.5]	赤	良好	—
10 84	II区 屋下層	磁器 皿	—	(3.5)	2.5	赤	良好	—
10 85	I区 屋下層	焼締の陶器	(10.0)	(4.5)	1.9	赤	良好	—
11 86	I区 屋下層	土師質土器 かわらけ	(9.9)	5.7 2.5	赤	良好	にぶい褐色 外内面：ロクロナデ。底部回転車切り。	口縁部～ 体部 1/2 体部存在
11 87	I区 屋下層	土師質土器 かわらけ	9.3 5.8 2.7	赤	良好	褐色 外内面：ロクロナデ。底部回転車切り。	2/3	
11 88	II区 屋下層	土師質土器 かわらけ	(9.8)	(5.3) 2.3	赤	良	にぶい褐色 のみ大きい。外面：口縁部～体部ロクロナデ。底部回転車切り。内面：口縁部 ～体部ロクロナデ。	1/3
11 89	II区 屋下層	土師質土器 かわらけ	8.7 5.5 2.1	赤	良	にぶい 黄褐色 外内面：ロクロナデ。底部回転車切り。	2/5	
11 90	II区 屋上層	土師質土器 かわらけ	(6.7)	4.3 1.9	赤	良	にぶい褐色 小型のかわらけ。外内面：ロクロナデ。底部回転車切り。	2/5
11 91	I区 屋下層	土師質土器 かわらけ	(7.6)	(4.8) 1.6	赤	良	にぶい褐色 小型のかわらけ。外内面：ロクロナデ。底部ヘラナデ。外縁部凹ヘラナデ。	1/4
11 92	I区 屋下層	青磁染付 器	つまみ — (9.5)	[2.6]	赤	良好	明緑色 外面は捺付し地方陶物。外面：体上部何の文様が描かれているか不明。 体下部無文。底部並しあり。無釉。内面：無文。白色釉彩物。	体部～底部 1/8
11 93	II区 屋下層	染付 つまみ	つまみ 4.1 (10.0)	3.0	赤	良好	—	—
11 94	I区 屋下層	染付 蓋	つまみ 3.5 (9.2)	2.6	赤	良好	—	—
11 95	I区 屋下層	染付 蓋	つまみ (3.7)	(9.9)	2.3	赤	良好	—
11 96	I区 屋下層	染付 蓋	つまみ — (7.6)	[1.6]	赤	良好	—	—

補修箇所	出土位置	種類・部類	法量 (cm)		出土	状況	色調	形状、構成、文様等の特徴	遺存状況	
			口径	底径	高さ					
11	Ⅰ区 屋下層	染付 蓋	つまみ (3.8)	(9.1)	(2.3)	灰	良好	—	8mm幅の帯状つまみがつまみか付。外面：白緑外縁部。内面は無文。つまみは扇形内に文様。体部：黒漆・竹・木が混ざっており、風痕文様か。蓋部は返しがついており無文。 内面：無文。	1/5
11	Ⅱ区 瓦人形石	染付 蓋	つまみ	(9.7)	(1.7)	灰	良好	—	外面：文字状に線を並べ4つに区画する。小さい瓦面は左右両面に2つずつ計4つの特徴を残し厚くつぶす。大きい瓦面は中心部に縦線を放射状で埋める。その他部分は厚く平らな面を施したと思われる。 内面：無文。	体部～蓋部 1/8
11	Ⅰ区 屋下層	陶器 蓋	つまみ	(7.7)	0.9	灰	良好	明オリーブ 灰色	平らな面に5mmほどの返しが付く平たい形状を有する。外面：ロクロナデ。緑色味を帯びた透明釉(灰釉か)施施。内面：ロクロナデ。裾部露出。裏面無文。	1/4
11	Ⅰ区 屋下層	染付 角形鉢	—	—	(4.6)	灰	良好	—	外面：体部露出による文様あり。 内面：口縁部二重施。土間を穿りつぶす。体部露出の痕を多く見出す。	口縁部～ 体部露出
11	Ⅰ区 屋下層	染付 鉢	(23.0)	—	(6.4)	灰	良好	—	大口か、折れ面に漆が付着。外面：体部何れの文様が描かれているか不明。早木文。内面：口縁部露出。口縁部～体部早木文と思われる。	口縁部～ 体部1/4
11	Ⅰ区 屋下層	染付 鉢	—	—	(5.2)	灰	良好	—	木葉を模した小さな帯のついた形状に似る。内外面：口縁部～体部上部の露出に向けて葉脈を表したと思われる彫刻を施す。下に二重施。	口縁部露出
11	Ⅰ区 屋上層	青磁 鉢	—	—	3.6	灰	やや不 良	—	外面：無文。 内面：彫刻による文様が見られるが何れの文様か判断できず。	体部露出
11	Ⅰ区 瓦上層	陶器 鉢	(10.2)	9.0	10.0	灰	良好	赤色	体部は内湾し、口縁部が内縮する。底部に凹坑ヘラケズリを施し直立状とする。外面：全面丁寧な緑色ミナギサを施し赤彩する。 内面：ロクロナデ。口縁部赤彩。	口縁部1/5 体部～ 底面1/3
11	Ⅱ区 屋下層	陶器 鉢	—	(12.0)	(7.7)	灰	良好	灰白色	外面：高台付後体部凹坑ヘラケズリ。体下部露出。 内面：ロクロナデ。全面無施。裏面無文。	体下部～ 底面1/3
11	Ⅰ区 屋下層	陶器 鉢	—	(11.2)	(2.0)	灰	良好	灰白色	底面わずかに高台状を呈する。外面：体下部～底面凹坑ヘラケズリ。高台部に輪軸が付着する。 内面：ロクロナデ。全面無施。口縁部あり。裏面無文。	体下部～ 底面1/3
11	Ⅰ区 屋下層	陶器 鉢	—	—	(5.6)	灰	良	灰白色	外面：ロクロナデ。口縁部～体部に深い沈陥。全面に黄白色釉施施。 内面：ロクロナデ。口縁部下部に1本の輪軸。口縁部無施施で深い沈陥。口縁部無施施で深い沈陥が主となる。裏面無文。	口縁部～ 体部露出
11	Ⅱ区 屋下層	陶器 鉢	(26.0)	—	(10.2)	灰	良好	浅黄褐色	口縁部に粘土線を巻き付け厚くし、外面に段を有する。外面：口縁部～体部ロクロナデ。体部～体下部露出ヘラケズリ。 内面：ロクロナデ。全面無施施。裏面無文。	口縁部～ 体部1/4
11	Ⅰ区 瓦上層	陶器 鉢	—	—	(6.8)	灰	良好	オリーブ 灰色	口縁部が外反し、口縁部上部は上方にわずかにつまみ上げられる。外面：ロクロナデ。口縁部下部に深凹施施。その後口縁部～体部上部に緑色味を帯びた透明釉を施施。内面：口縁部一重・面部一重・体部二重施施。口縁部二重施施文。面部～体部花唐草文。体中部露出早木文白粉土の染付で文様とする。その後緑色味を帯びた透明釉を施施する。	口縁部～ 体中部露出
11	Ⅰ区 瓦上層	土師質土師 鉢	(22.0)	—	(5.3)	灰	良好	灰色	外面：口縁部～体部ヨコナデ後2条1単位沈陥。 内面：口縁部～体部ヨコナデ。	口縁部～ 体部1/6
11	Ⅱ区 瓦上層	染付 蓋	—	—	(4.0)	灰	良好	赤彩	底彩。外面：体部早木文。 内面：ロクロナデ。無施。	体部露出
11	Ⅰ区 屋下層	陶器 土師	(17.6)	—	(7.5)	灰	良好	明赤褐色	小型の土師。耳の一部が遺存が大きさは不明。外内面：全面鉄輪施施。ロクロナデ無文。	口縁部～ 体部露出
11	Ⅱ区 屋下層	陶器 土師	(17.8)	—	(5.9)	灰	良好	明赤褐色	小型の土師。幅4.6cm。高さ1.2cmの耳が遺存する。外内面：全面鉄輪施施。ロクロナデ無文。	口縁部～ 体部露出
11	Ⅰ区 屋下層	土師質土師 内耳土師	—	—	5.9	灰	良	黒色	内耳鉢。口縁部と体部の間に横をもつ。平底。外内面：ヨコナデ。外面に縁付着。	口縁部～ 底面露出
11	Ⅰ区 瓦上層	土師質土師 内耳土師	—	(22.0)	(2.3)	灰	黒褐色	—	内耳鉢。外面：体下部デレ目か。幅3mmのヨコナデあり。底面平。 内面：口縁部～底面ヨコナデ。	体下部～ 底面1/8
11	Ⅱ区 屋下層	土師質土師 内耳土師	—	—	13.5	灰	良好	灰黄褐色	内耳鉢か。底面わずかに基部凹坑を呈する。外面：体下部ロクロナデ。底面平。内面：体下部～底面ヨコナデ後体部に1本の沈陥。沈陥より下は黒色の。縁付着または黒色彫刻か。	体下部～ 底面露出
11	Ⅰ区 屋下層	土師質土師 内耳土師	(35.4)	(33.0)	5.7	灰	良好	黒色	内耳鉢。丸みを帯びた体部で口縁部が外反気味に立ち上がる。平底。外面：口縁部露出あり。口縁部ヨコナデ。体部露出無施。 内面：口縁部ヨコナデ。体部～底面ヨコナデ。	1/8
11	Ⅰ区 屋下層	土師質土師 内耳土師	(39.7)	(36.0)	4.7	灰	良	黄灰色	内耳鉢か。底面わずかに基部凹坑を呈する。外面：体下部ロクロナデ。底面平。内面：口縁部ヨコナデ。体部露出無施。 内面：口縁部ヨコナデ。	口縁部1/10
11	Ⅰ区 屋下層	土師質土師 内耳土師	(28.0)	(25.2)	3.7	灰	良好	に濃い 褐色	非常に深い形状。始輪。外面：口縁部ヨコナデ。底面鉄輪ヘラケズリ。底面無施施。 内面：口縁部～底面ヨコナデ。	1/8
11	Ⅰ区 屋下層	土師質土師 内耳土師	(32.0)	(33.6)	(3.2)	灰	良好	黒褐色	非常に深い形状。始輪。外縁部が縁やかに立ち上がる平底と思われる。短い口縁部が内縮して立ち上がる。内面：口縁部中心4.1cm。高さ0.5cmの断面三角形の粘土を底付。内耳と同様の機能をもつものか。外面：口縁部ヨコナデ。底面鉄輪ヘラケズリ。底面無施施。 内面：ヨコナデ。	1/8
11	Ⅰ区 屋下層	土師質土師 内耳土師	(32.0)	(32.0)	(4.1)	灰	良	に濃い 褐色	非常に深い形状。始輪。縁部が縁やかに立ち上がる平底と思われる。短い口縁部が内縮して立ち上がる。外面：口縁部ヨコナデ。下部2本の帯状口縁部ヨコナデ。底面無施施。 内面：口縁部～底面ヨコナデ。	1/8
11	Ⅰ区 屋下層	陶器 土師	(10.6)	(8.6)	11.0	灰	良好	灰白色	底面は基部凹坑。基部は高さ6.5mmの穴を中心に1つ開削。6つ計7つ穿ちを作成する。外面：体下部凹坑ヘラケズリ。底面凹坑ヘラケズリ。口縁部～体下部に黄白色を塗り厚くし、耳と直交する口縁部に鉄輪で丸とそこから派生する曲線の沈陥を施す。その沈陥凹坑を帯びた透明釉を施施する。 内面：に濃い褐色釉を施す。そこに土間を帯びて体上部～底面に露出。	体下部～ 底面1/6
11	Ⅰ区 屋下層	陶器 土師	—	—	(10.3)	灰	良好	暗褐色	体中部のやや下へ最大段付を持つ顕著な段を有する。外面：ロクロナデ。口縁部露出。底面平。内面：口縁部ヨコナデ。体部露出無施。 内面：ロクロナデ。	口縁部～ 体下部1/6
11	Ⅰ区 屋下層	陶器 土師	—	(7.8)	(2.9)	灰	良好	明赤褐色	底面は基部凹坑を呈する。外面：凹坑ヘラケズリ。底面に粘土を底付け足として立っている。体上部に鉄輪軸。縁が付着する。 内面：全面鉄輪施施。ロクロナデ無文。	体下部～ 底面1/5
11	Ⅰ区 瓦上層	陶器 染付 急須	(8.3)	—	(2.3)	灰	良好	—	外面：口縁部露出。体部口縁部露出。体部早木文。 内面：ロクロナデ。口縁部露出。	口縁部露出
11	Ⅰ区 瓦上層	染付 急須	(6.2)	—	(1.7)	灰	良好	—	外面：口縁部露出の面を縦裂で深い丸文を巻く。面周りを施施で埋める。 内面：口縁部露出1mmほどの幅で輪軸。口縁部～体上部ロクロナデ。体上部～底面に輪軸施施。	口縁部～ 体上部1/4

棟 号	出土位置	種類・器種	法量 (cm)			素材	形状	色調	彫形、文様等の特徴	遺存状況
			口径	底径	高さ					
13128	Ⅰ区 地下層	陶器 黒鉢	(19.9)	—	(7.5)	赤	良好	明赤褐色	外面：口縁部2条の沈線。体上部口コナナ。体下部回転ヘラケズリ。 内面：口縁部コナナ。体下部の縦か、25本1單位の横リ目を取柄なく入れる。 彫り付盛か。	口縁部～ 体下部 1/6
13129	Ⅰ区 地下層	焼結地陶器 黒鉢	(35.8)	—	(12.6)	赤 小粥	良好	赤褐色	口縁部外面に緑色帯付断面三角形状を呈する。外面：口縁部2条の沈線。口縁部下部回転ヘラケズリ。以下回転ヘラケズリ。 内面：口縁部コナナ。底部に1条の沈線。体部8本1單位の横リ目を取柄なく入れる。 彫り付盛か。	口縁部～ 体下部 1/5
13130	Ⅰ区 地下層	焼結地陶器 黒鉢	—	—	(8.7)	赤 小粥	良好	灰赤色	口縁部外面に緑色帯付断面三角形状を呈する。外面：口縁部2条の沈線。自然跡が多量付着。体上部回転ヘラケズリ。体中部口コナナ。 内面：口縁部1条の沈線とヘラケズリによる横広の彫筋。体部11本1單位の横リ目を取柄なく入れる。 彫り付盛か。	口縁部～ 体中部縦断面片
13131	Ⅰ区 地下層	焼結地陶器 黒鉢	—	(16.7)	(6.7)	赤 小粥	良好	赤灰色	外面：体下部ナシ。底面口コナナ。底面無調整。外縁にヒビクラ。 内面：体部11本1單位の横リ目を取柄なく入れる。底面9本以上1單位の横リ目を入れる。摩耗が激しく残りの多い。 彫り付盛か。	体下部～ 底部 1/6
13132	Ⅰ区 地下層	陶器 黒鉢	—	(14.0)	(5.0)	赤 小粥	良好	明赤褐色	外面：口コナナ。底面回転ヘラケズリ。 内面：体部11本1單位の横リ目を取柄なく入れる。摩耗が激しく残りの多い。 彫り付盛か。	体下部～ 底部 1/6
13133	Ⅰ区 屋高層	土師質土器 小型壺	—	(3.8)	(7.4)	赤	良	褐色	断面直。外面：体中部斜位ヘラケズリ。体下部斜位ヘラケズリ。底面ナシ。 内面：無調整。ナシ。	体中部～ 体下部 1/4
13134	Ⅰ区 地下層	陶器 壺	—	—	(4.1)	赤	良好	暗褐色	西口筒形。外面：胴部に2条の沈線。体上部に耳を付着。丸底輪軸。 内面：口縁部～底部直輪軸	胴部～ 底部 1/4
13135	Ⅱ区 地下層	陶器 壺	—	—	(6.0)	赤	良好	明赤褐色	外面：全面丸底輪軸体下部以下に帶柄付輪軸。 内面：口縁部～底部直輪軸体下部に一段凹線付輪軸。	口縁部～ 体下部片
13136	Ⅰ区 地下層	陶器 壺	—	—	(3.2)	赤	良好	明緑灰色	小中型。外面：胴部に9.9mmの凹行突凹付。体下部に丸底輪軸後面に首かかった透明陶(灰輪か)輪軸。 内面：胴部～底部直輪軸後面にかかった透明陶(灰輪か)輪軸。	胴部～ 体下部 1/4
13137	Ⅱ区 地下層	陶器 水壺か	—	—	(9.1)	赤	良好	灰白色	外面：口コナナ。底面後沈線で文様を描く。丸底。緑色帯を帯びた透明陶(灰輪か)輪軸。 内面：口コナナ。底面無調整。	体下部片
13138	Ⅰ区 屋高層	焼結地陶器 壺	—	(3.6)	(11.7)	赤	良好	黒褐色	外面：体上部口コナナ。底面ヘラケズリ。体部直輪(黒色)輪軸。体下部に輪軸取り。 内面：同心円状で平坦。底面ナシ。体中部～底部赤褐色輪軸を取り。 彫り付盛か。	体下部～ 底部 1/6
13139	Ⅰ区 屋高層	焼結地陶器 小型壺	—	(32.6)	(7.0)	赤	良好	にぶい 赤褐色	外面：体部回転ヘラケズリ。底面回転ヘラケズリ後外縁部回転ヘラケズリ。 内面：口コナナ。底面無調整。	体下部～ 底部 1/4
13140	Ⅰ区 地下層	陶器 平鉢	(19.7)	—	(5.5)	赤	良好	暗褐色	外面：口縁部2条の沈線。外縁の縁筋あり。体上部2条の沈線。 内面：口縁部2条の沈線と取柄を呈する。 全面丸底の2度凹付(凹から内部)。	口縁部～ 体上部 1/5
13141	Ⅰ区 屋上層	陶器 灯明具	(8.9)	3.8	4.9	赤	良好	黒色	丸形油滴で縁を付く脚輪軸。たんころとも。下縁3/4を占める内部の空所に黄緑した角を帯び付けた芯受けとする。底面中央に欄干状の芯受けを刺すための穴がある。外面：口コナナ。底面直輪(黒色)輪軸。体上部～底部直輪軸。脚部一段凹線あり。 内面：口コナナ。全面赤褐色輪軸。溝口直輪軸。	油部部 1/3 脚部保存
13142	Ⅰ区 屋上層	焼結地陶器 灯明具	(7.1)	3.6	2.7	赤	不良	赤褐色	直形素焼。たんころとも。下縁1/4を占める内部の空所に芯受けとする。芯受けに数か所油滴が付着する。外面：口縁部～底部口コナナ。底面直輪軸取り。 全面赤褐色輪軸を呈するが剥落が激しい。 内面：口コナナ。全面赤褐色輪軸を呈するが剥落が激しい。 彫り付盛か。	1/2
13143	Ⅱ区 屋上層	陶器 灯明台	—	4.2	(4.4)	赤	良好	明オリブ 灰色	底面：脚部直輪軸に凹付付着。灯明部の凹付付着に使用されたか。外面：体部口コナナ。脚部一段凹線付ヘラケズリ。底面口コナナ。体部一部赤褐色輪軸軸取り。 全面赤褐色輪軸を呈するが一部の脚部直輪軸は無軸。 内面：口コナナ。体部～上部直輪軸輪軸軸取り。 彫り付盛か。	体部～底部 残存
13144	Ⅰ区 地下層	焼結地陶器 灯明台受皿	(7.5)	(5.0)	2.4	赤	良好	黒褐色	外面：腕口縁部～油付ヘラケズリコナナ。体部～底面回転ヘラケズリ。体部の一部に黒褐色輪軸。 内面：口コナナ。全面黒褐色輪軸。 彫り付盛か。	1/5
13145	Ⅱ区 屋高層	焼結地陶器 灯明台受皿	—	(5.0)	(1.7)	赤	良好	にぶい褐色	外面：腕口縁部コナナ。体部回転ヘラケズリ。底面回転ヘラケズリ。 内面：口コナナ。暗赤褐色輪軸。 彫り付盛か。	体部～底部 1/5
13146	Ⅱ区 地下層	焼結地陶器 皿	10.0	4.6	2.0	赤	良好	暗赤褐色	口縁部に油滴が付着。灯明部として使用されたと思われる。外面：口縁部口コナナ。体部直輪ヘラケズリ。重ね軸取り。底面回転ヘラケズリ後ヘラケズリ。口縁部～底部赤褐色輪軸。 内面：口コナナ。口縁部直輪軸取り。底面直輪軸。 全面赤褐色輪軸。 彫り付盛か。	ほぼ完整
13147	Ⅰ区 地下層	土師質土器 かわらけ	(9.2)	(5.2)	2.6	赤	良好	にぶい 黒褐色	口縁部2条の凹に油滴付着。灯明部として使用されたと思われる。切り磨した底に粘土に戻し再度切り磨したと思われる。そのため底面があるような形状をしている。外内面：口コナナ。底面直輪軸取り。	1/8
13148	Ⅱ区 屋高層	土師質土器 かわらけ	8.6	4.7	3.1	赤	良好	褐色	口縁部3か所の油滴付着。灯明部として使用されたと思われる。外内面：口コナナ。底面直輪軸取り。	ほぼ完整
13149	Ⅰ区 屋高層	土師質土器 かわらけ	9.7	6.0	2.1	赤	良好	褐色	口縁部2か所に油滴付着。1か所は打ち込み跡が見られる。灯明部として使用されたと思われる。外内面：口コナナ。底面直輪軸取り。	ほぼ完整
13150	Ⅰ区 地下層	土師質土器 空付 灰部器	—	3.7	(5.0)	赤	良好	—	外面：体部別の文様が強いているが不明。体下部凹線。脚部直輪軸。脚部直輪軸はあったが1/3ほど軸垂れする。 内面：無文。 彫り付盛か。	体下部～ 底部 残存
13151	Ⅰ区 地下層	陶器 灰部器	—	4.4	(2.4)	赤	良好	灰白色	脚部は短く、脚部は水平に広がる。外面：体下部一部口コナナ。底面回転ヘラケズリ。体部～上部直輪軸を帯びた透明陶(灰輪か)輪軸。 内面：体部口コナナ。脚部無調整。底面回転ヘラケズリ。底面直輪軸(灰輪か)輪軸。 彫り付盛か。	体下部～ 底部 残存
13152	Ⅱ区 地下層	土師質土器 水壺	—	—	(3.2)	赤	良	にぶい 赤褐色	外面：コナナ後文の刻印を押し。 内面：コナナ。	口縁部縦断面片
13153	Ⅰ区 屋上層	土師質土器 水壺	—	—	(3.4)	赤	良好	黒褐色	外面：コナナ後文の刻印を押す。 内面：コナナ後文の凹線。	体部縦断面片
13154	Ⅰ区 地下層	陶器 香炉	(10.7)	(7.0)	5.8	赤	良好	オリブ 黄色	台高を付す筒形外縁。外面：口縁部高ナシ。わずかに窪み。口縁部一部口コナナ後神杖状工具で早文施文。体下部～底部回転ヘラケズリ。口縁部～底部直輪軸。 内面：口コナナ。口縁部～底部直輪軸。一部体下部まで輪軸。底面：自然跡付着。直輪軸。	1/3
13155	Ⅰ区 地下層	焼結地陶器 水壺か	—	—	(4.0)	赤	良好	赤褐色	寸の揃った扁平型。外面：胴部～体上部口コナナ。体中部～体下部の横リ目回転ヘラケズリ。2ミサンに近い。全面赤褐色輪軸。 内面：口コナナ。 彫り付盛か。	胴部～ 体下部 1/2
13156	Ⅰ区 地下層	土師質土器 壺	つまみ 4.2	—	(2.5)	赤	良	にぶい褐色	水壺型の蓋と思われる。外面：つまみ部口コナナ後体部に回転ヘラケズリ。体部口コナナ。 内面：体部直輪軸。	つまみ部 完全残存

補正番号	出土位置	種類・器種	法量 (cm)			粘土	形状	色調	器形・成形、文様等の特徴	遺存状況
			口径	底径	高さ					
15	1区 堀下層	土師質土器 不明	—	—	15.5	赤	良好	黒色	方形を呈すると認められ(30.5)cm、横(11.1)cmを測る。上部は平行する2辺のみ立ち上り縁を形成する。下部は欠損しているが上部と直交する2辺のみ直交する2辺の直線延長を以て口径に下方の傾斜を形成すると思われる。底の上下で直交する方向に突き出した縁状となっている。丸縁が、外面：上部の縁部はヘラツケリ。外面は横縁はヘラツケリ・黒色処理が、底部ヘラツケリ。 内面：上部縁部・底部ヘラツケリ。	口縁部～ 底部破片
32	2区 堀下層	縄文土器 深鉢	—	—	14.3	中や 粗	不良	にぶい 黄褐色	外面：1.8平部縮文。 内面：ナデ。	底部破片
32	3区 堀上層	赤生土器 壺	—	—	15.6	赤	良好	にぶい 黄褐色	口縁部が大きく反りする。外面：口縁部はヘラツケリ工具ヨコナデ。口縁部ナデ。縮減したm・横1.8mのウツ式工具刺文。 内面：口縁部縁部・肩位ヘラツケリ。中部以下表面磨光し不明。	口縁部～ 底部破片
32	4区 堀下層	土師器 環	(12.8)	—	4.7	赤	良好	にぶい 赤褐色	丸底で口縁部はわずかに内湾する。外面：口縁部ヨコナデ。体部～底部はヘラツケリ・放射状。口縁部はヘラツケリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部～底部ヘラツケリ・放射状。	1/5
32	5区 堀下層	土師器 環	(11.2)	—	3.5	赤	良	にぶい 褐色	磨光片。外面：口縁部ヨコナデ。体部縁部・肩位ヘラツケリ。 内面：口縁部～体部ヨコナデ。	口縁部～ 体部1/8
32	6区 堀下層	土師器 煎餅手	—	—	14.2	赤	良	にぶい 黄褐色	縦(3.6)cm・横(5.0)cmを測る。円柱状の粘土をへらで型を整え、先端部を尖らせた丸下部にケズリを施す。先端部は平らに整えられ、断面の中央ややや下下部から丸縁状に上による削文を施す。	ほぼ完整
32	7区 堀下層	土師器 高杯	—	—	16.7	赤	良	褐色	外面：露上部縮位ヘラツケリ。露下部ナデ。 内面：絞り筋。	露部1/3
32	8区 堀上層	円筒陶輪	—	—	16.4	赤	良好	にぶい 黄褐色	透かし部。外面：肩位ハケメヨコナデ。 内面：ナデ。	体部破片
32	9区 堀下層	土師器 蓋	(16.4)	—	16.8	赤	良	にぶい 褐色	外面：口縁部ヨコナデ。頭部～体上部縮位ヘラツケリ。 内面：口縁部ヨコナデ。頭部～体上部縁部ヘラツケリ。	口縁部～ 体上部1/8
32	10区 堀下層	須恵器 蓋	(17.5)	—	(5.5)	赤	還元焼 成焼成	灰色	外内面：ロクロナデ。	体下部～ 底部1/8
32	11区 堀下層	須恵器 環	(6.0)	—	1.8	赤	良	灰色	外内面：ロクロナデ。底部回転車切り。	体下部～ 底部破片
32	12区 堀下層	須恵器 環	(6.0)	—	1.6	赤	還元焼 成焼成	にぶい 黄褐色	外内面：磨減激しく調整不明。	体下部～ 底部破片
32	13区 堀下層	須恵器 高台付杯	(7.0)	—	1.8	赤	還元焼 成焼成	灰色	底部の軸車切り後高台部削付。外内面：ロクロナデ。外面は高台付を備えて付けるようにユビナデ。	底部 ほぼ完整
32	14区 堀下層	須恵器 高台付杯	(6.4)	—	1.5	赤	還元焼 成焼成	灰色	底部の軸車切り後高台部削付。外内面：ロクロナデ。外面は高台付を備えて付ける様にユビナデ。	体下部～ 底部1/4
32	15区 堀下層	須恵器 高台付杯	(4.8)	—	2.2	赤	還元焼 成焼成	にぶい 褐色	外面：底部～底部ロクロナデ。内面：底部～底部ロクロナデ。高台部ロクロナデ。底部ヘラツケリ。	底部 ほぼ完整
32	16区 堀高層	須恵器 門前焼か	(14.4)	—	1.6	赤	還元焼 成焼成	灰白色	形状の異なると思われる。肩位部は粘土を削り付けて形成。外面：頂部はヘラツケリ。わずかに磨光する。口縁部ロクロナデ。 内面はロクロナデ。	露部1/10
32	17区 堀上層	須恵器 蓋	(6.1)	—	1.1	赤	還元焼 成焼成	灰色	外内面：ロクロナデ。	口縁部破片
32	18区 堀高層	土師質土器 甘茶	—	—	14.4	赤	不良	灰白色	外面：ロクロナデ。 内面：横位ヘラツケリ。	露部1/8
35	1区 SK01	土師器 環	(2.0)	—	2.6	赤	良好	明赤褐色	外内面：ヨコナデ。	口縁部破片
35	2区 SK01	青文土器 白文土器	(3.7)	—	3.7	赤	良好	良	外面：無文。 内面：頸部による文様が認められるが不明確。植物文。	口縁部破片
35	3区 SK04	縄文土器 深鉢	(6.6)	—	6.6	赤	良好	にぶい 黄褐色	外面：沈頭・1.8平部縮文。内面：ナデ。	体部破片
35	4区 SK04	須恵器 高台付壺	(6.2)	—	1.8	赤	良好	灰白色	外面が縦状となり内側が外縁する二日月高台付。内側縁部を棒状に具す。外面：ロクロナデ。 内面：底部ロクロナデ。重ね焼き痕と見られる円形の突起部あり。外面は自然焼付。高台部は棒状具す。下部ロクロナデ。	底部1/3
35	5区 SK05	赤生土器 高杯	(1.1)	—	1.1	赤	良好	赤色	円筒状の体部(底部)から上方はぼびると認められる形状から高杯と考えられる。外内面：へらミ子手赤赤。	体部破片
35	7区 SK05	染付 小杯	(3.0)	(3.0)	3.1	赤	良好	—	底部は磨光成で高台付を具する。外面：体部付を描く。内面：無文。	1/3
35	8区 SK05	染付 盃	(10.2)	(5.4)	2.3	赤	良好	—	外面：口縁部～体部縁の文様が描かれているが不明。体下部磨光。高台部～重磨光。底部一部に二重磨光。中央に磨光を描くが判読不能。 内面：口縁部～底部は無文。	1/4
35	9区 SK05	染付 楕圓鉢	—	—	14.1	赤	良好	—	右面縁部木灰。外面：無文。 内面：口縁部縁部の尾節のような文様。頭部縁部から下へ約1cmの幅で流文文を2本並べ。	口縁部～ 底部破片
36	1区 SE01	古式土師器 高台付壺	—	—	3.1	赤	良好	にぶい 褐色	外面：口縁部縁部。外面：肩位ハケメ。 内面：横位ハケメ。	台部破片
36	3区 SE01	土師器 環	(3.0)	—	3.0	赤	良	明赤褐色	外面：口縁部ヨコナデ。体部縁部ヘラツケリ。 内面：口縁部～体部ヘラツケリ。	口縁部～ 体部破片
36	5区 SE01	青磁 碗	(2.0)	—	2.0	赤	良好	—	外面：口縁部整形後輪軸磨光。 内面：口縁部整形後輪軸磨光工具痕跡ケズリ。輪軸磨光。	口縁部破片
38	1区 SD01	土師器 蓋	(2.7)	—	2.7	赤	良好	黄褐色	外面：口縁部縁部放射状に付く。口縁部縁部ハケメ後ヨコナデ。 内面：ヨコナデ。	口縁部～ 体部破片
38	2区 SD01	土師器 環	(3.5)	—	3.5	赤	良好	にぶい 黄褐色	内内面：ロクロナデ。	口縁部～ 体部破片
38	3区 SD03	須恵器 蓋	(13.2)	—	3.9	赤	還元焼 成焼成	灰白色	外面：頭部～体中部はヘラツケリ。体下部～底部ロクロナデ。底部の体部部に棒状具す。 内面：ロクロナデ。	1/4
38	4区 SD03	土師質土器 かわらけ	(9.8)	—	9.8	赤	良好	にぶい 褐色	外内面：ロクロナデ。	口縁部～ 体部破片
38	5区 SD04	土師器 蓋	(2.7)	—	2.7	赤	良好	灰褐色	外面：口縁部縮位ヘラツケリ。頭部縮位ハケメ。 内面：口縁部ヨコナデ。頭部縁部ヘラツケリ。	口縁部破片
38	6区 SD04	土師器 蓋	(4.1)	—	4.1	赤	良	にぶい 黄褐色	外面：口縁部ヨコナデ。頭部縁部ヘラツケリ。 内面：口縁部～底部ヨコナデ。	口縁部破片
38	7区 SD04	須恵器 環	(3.6)	—	3.6	赤	還元焼 成焼成	灰色	口縁部の1か所をつまみ、片口状としている。外内面：ロクロナデ。	口縁部～ 体部破片
38	8区 SD04	須恵器 高台付杯	(3.1)	—	3.1	赤	還元焼 成焼成	にぶい 褐色	外内面：ロクロナデ。	磨光部1/4
38	10区 SD04	土師質土器 かわらけ	(3.2)	—	3.2	赤	良好	褐色	外面：口縁部ヨコナデ。体部縮位ヘラツケリ。 内面：口縁部ヨコナデ。体部縁部ハケメ。	口縁部～ 体部破片

種別	番号	出土位置	種類・器類	法量 (cm)			素材	状況	色調	器形・成形、文様等の特徴	遺存状況
				口径	底径	高さ					
	38	1区 S004	黄銅製陶器 鉢	10(2)	1(8.0)	9.9	銅	良好	灰褐色	外面：口縁部ヨコナデ、体部斜位・横位ヘラナデ。内面：口縁部一体部ヨコナデ。体上部は縁の厚み3条あり。底部ユビナデ。	1/4
	40	1区 廃土	染付 陶	19(9)	5(7)	5.9	焼 銅	良好	—	外面：口縁部四方薄文。体部水辺戸文。体下部二重線彫。内面：無文。	1/5
	42	1区 廃土	染付 陶	11(3)	—	14.7	焼 銅	良好	—	外面：体部何の文様が描かれているか不明。地色色を遺したか。内面：無文	口縁部破片
	43	1区 表土	染付 陶	19(9)	3(6)	4.5	焼 銅	良好	—	外面：体中部に花文を横書き、口縁部一高台部まで縦線が文様で埋まる。内面：無文。19世紀前後か。	1/6
	44	2区 表土	染付 陶	—	13(8)	12(8)	銅	良好	—	内面：口縁部から底部に向けて縦線を多数書き縦線模様を形成する。底部に向かうにつれて幅が細くなる。	体下部一 底部1/6
	45	1区 廃土	染付 陶	17(8)	3(7)	4.1	銅	良好	—	小型碗。外面：口縁部線彫。体中部二重線彫で4区画1外側に3つ。内面に5つ縦線を描いた丸文を横書き。体下部線彫。高台部二重線彫。内面：無文。口縁部破片を有す。	口縁部一 底部1/4
	46	2区 廃土	染付 陶	—	14(0)	13(1)	銅	良好	—	蓋の可能性もあるが、外内ともに縦線が文様が描かれる。外面：体部何の文様が描かれているか不明。高台部線彫。内面：体上部に一重。下に二重線彫。間に不明の文様を描く。見込み何の文様が描かれているか不明。	体下部一 底部1/8
	47	2区 廃土	白磁 陶	11(0.2)	3.9	5.5	密 銅	良好	—	縦反彫。肥前か。	口縁部一 体部1/4 底部定存
	48	1区 廃土	白磁 陶	17(9)	3(0)	5.1	密 銅	良好	—	肥前か。	1/5
	49	2区 表土	陶器 皿	—	3.8	3(9)	密 銅	良好	灰白色	外面：ロクロ整形。高台部一底部がヘラナデ。口縁部一体下部黄白色輪彫。内面：ロクロ整形。全面黄白色輪彫。裏口焼か。	体中部一 底部2/3
	50	2区 表土	陶器 皿	11(2.5)	6.0	7.4	密 銅	良好	暗赤褐色	外面：ロクロ整形。体下部一底部がヘラナデ。口縁部一体下部鉄軸(暗赤褐色)輪彫。内面：ロクロ整形。全面鉄軸(暗赤褐色)輪彫。裏口焼か。	口縁部1/10 体部2/3 底部定存
	51	2区 廃土	陶器 皿	—	5(0)	12(7)	密 銅	良好	暗褐色	外面と内面で輪彫を施している。外面：体下部がヘラナデ。高台部を覆う鉄軸輪彫。輪彫の多くで鉄軸輪彫が見える。内面：ロクロ整形。全面緑褐色を覆う鉄軸輪彫(鉄軸)輪彫。裏口焼か。	体下部一 底部1/6
	52	2区 表土	白磁 小鉢	14(6)	3(0)	3(0)	密 銅	良好	—	底部は唇状で高台行を有する。肥前か。	1/4
	53	2区 表土	染付 皿	11(0)	—	12(1)	密 銅	良好	—	外面：体部斜位文。体下部線彫。内面：口縁部線彫。体部斜位文。口縁部破片	口縁部破片
	54	1区 廃土	染付 皿	—	—	2(0)	密 銅	良好	—	外面：無文。内面：見込みに「唐」。また文字が刻まれている。近代。	1/10
	55	2区 表土	白磁 皿	—	14(7)	9(9)	密 銅	良好	—	外面：無文。内面：見込みに磁器で外面と内面を全面に白く仕上げた文様。底部1/3	底部1/3
	56	1区 表土	染付 蓋	つまみ (3.5)	19(5)	2.6	密 銅	良好	—	外面：つまみ側無文。つまみ部線彫。体部全面に縦横と不明の文様を描く。縦線線彫。内面：口縁部線彫の間に縦線を描いた丸文を横書き。肥前を模倣で埋める。見込み二重線彫。中央に巻を遺したと思われる。	1/2
	57	2区 廃土	染付 八角鉢	—	18(8)	12(9)	密 銅	良好	—	高台部は円形。体部は八角形を呈する。外面：体部全部赤文。体下部線彫で縦線が内面に水玉模様を塗り分けた文様を描く。高台部線彫を覆う輪彫。内面：見込み中央「唐」。漆器製の縁飾が見られる。	体下部一 底部1/2
	58	1区 廃土	土師質土器 内耳土器	128(8)	29(2)	13(5)	銅	良好	暗赤褐色	非常に古い赤灰。短筒。外縁部が縁やかに立ち上がる平縁と思われ、短い縁部が傾いて立ち上がる。外面：口縁部ヨコナデ。底面線彫。内面：口縁部一底部ヨコナデ。	1/8
	59	1区 確認部	陶器 急須	—	3(4)	12(1)	銅	良好	暗赤褐色	外面(体部)の底面に転倒防止と思われる紐状突起あり。外面：体中部ロクロナデ。体下部一底部がヘラナデ。体中部鉄軸(茶色)輪彫。内面：ロクロ整形。全面鉄軸(茶色)輪彫。	体中部一 底部1/8
	60	1区 確認部	磁胎 不明	5(6)	—	1(4)	密 銅	良好	—	小型碗。外面：口縁部線彫が主眼状を呈する。口縁部1/4ほどに全形で線彫。その下半を黄色で塗る。内面：無文。	口縁部破片
	61	2区 廃土	陶器 蓋	—	—	14(5)	銅	良好	暗褐色	外面：体上部・体中部二重線彫。体上部を覆う1/4重文文様。体中部縦文を白色顔料の染付で施文する。その後縁部中央部及び体部輪を輪彫。内面：ロクロナデ。縁部を覆う鉄軸輪彫。裏口焼か。	体部破片
	62	2区 表土	染付 陶 土師質土器 内耳土器	5(8)	3(6)	6(6)	密 銅	良好	—	外面：口縁部一底部線彫で内面を大きく覆く。内面：無文。近代。	完形
	63	2区 廃土	土師質土器 内耳土器	132(8)	—	18(0)	銅	良好	黒色	内耳鉢。外内面：口縁部面取り。口縁部一体下部ヨコナデ。	口縁部一 体上部1/10

金属製品

種別	番号	出土位置	種類	法量 () : 検定 1 遺存				材質	器形・成形等の特徴	遺存状況
				長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
	16	2区 庭下層	兵衛銅製品 尖角	15.2	1.1	1.2	24.7	真鍮	一体型の尖立であるが、分層型尖立の事例の形状を呈する。底板・天板・側板・仕板・板蓋部分・裏板・帯部天板・帯部側金具・帯部蓋の部分で構成される。底面には一寸ごとに彫が明まれの1つの角に縦線を10区区分する彫が施される。	完形
	17	1区 庭下層	兵衛銅製品 狸首銅首	8.5	1.6	3.7	[12.2]	真鍮	外面の下半部は縁部は中央部を境として上向きに彫が施される。尖立部には尖角の彫を有する。裏面は帯部一帯部が内側。体下部が円形を呈し、帯部中央部に縦線が施される。	ほぼ完形
	17	1区 庭下層	銅製品 狸首銅首	6.2	1.8	1.4	16.0	銅	帯部と体部との間に段を有する。体部は両端部と中央部に円筒による区画を有し、その中央を交する細い帯で縦線の装飾を施す。大部の中央を帯と思われる構造物。体部の中に縦字の一部が遺存し、ほぼ全周に縁が付録する。	完形
	17	4区 庭下層	兵衛銅製品 狸首銅口	10.0	1.2	1.2	13.3	真鍮	体部がφ12mm。裏口部がφ6mmの円形を呈し、縁が施されている。小口一帯部は横線の装飾があり、小口の幅は2mmほどが傾いており、その他は1mm幅の円筒で構成される。	完形
	17	5区 庭下層	鉄製品 不明	14.3	11(5)	1.0	116(0)	鉄	断面が平直で、断面に曲がる形状を呈する。全面に赤色塗料が塗布されている。	破片
	17	6区 庭下層	鉄製品 釘か	36(9)	9(7)	0.6	19(3)	鉄	断面四角形を呈する。	ほぼ完形
	17	1区 庭下層	鉄製品 不明	14(8)	15(5)	10(7)	153(4)	鉄	断面が丸い板状で直線方向に湾曲している。	破片
	35	1区 S005	鉄製品 ロストルか	115(8)	19(0)	1.5	1219(0)	鉄	約1m四方の目の鉄網。直径40mmほどの円形と思われる。	破片

石製品

棟別	種別	種別	法 規 () : 規 定 () : 遵 守 ()			石質	形状・成形等の特徴	遺存状況			
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)						
17	1	1区 屋上層	石製品	板	13.6	5.8	2.0	[136.4]	粘板岩	縦長・短冊形を呈する。海面に露出が見られる。裏面も親として使用されており、幅 4.7cm、長さ 7.0cmの隅丸方形で形入っている。墨組が顕著に残る。	海面部 2/5
32	1	1区 屋上層	石製品	四石	[7.7]	11.2	7.0	[462.6]	安山岩	表面内面ともに窪む。表面は薄らから裏面までごこてである。裏面には2本の溝筋、下端部には目隠し筋があり、叩きか・砥石としても使用されたと思われる。	1/2

木製品

棟別	種別	種別	法 規 () : 規 定 () : 遵 守 ()			形状・成形等の特徴	遺存状況				
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)						
18	1	3区 屋下層	木製品	下駄	[10.8]	9.4	3.5			台と面が別の定座下駄。行儀は断面直線状と思われるが、種は不明瞭である。心材。	1/3
18	2	1区 屋下層	木製品	下駄	[15.0]	8.3	[4.0]			台と面が一体の木下駄。縦長方形を呈し最大幅はほぼ中央と思われる。面は行部から連続し、裏側の杉材は平田と思われる。前面の上下に側面への窪みがあり、裏側の付け根の端線と考えられる。大きさが揃りなごき性質または子留木と思われる。板目材。	2/3
18	3	3区 屋下層	木製品	板敷	11.7	[11.6]	0.9			小型の幅または縁の板敷と思われる。板目材。	ほぼ完形
18	4	1区 屋下層	木製品	板	11.0	9.5	2.3			板敷板の板材。裏面に目隠し筋が見られる。板目材。	完形
18	5	1区 屋下層	木製品	板敷	[22.7]	16.8	1.0			幅または縁の板敷と思われる。板目材。	1/6
18	6	1区 屋下層	木製品	板敷	[18.0]	[7.4]	1.1			幅または縁の板敷と思われる。表面に目隠し筋が見られる。面が欠けており加工途中と思われる。	1/4
18	7	1区 屋下層	木製品	板敷	[34.5]	[9.3]	2.5			大型の縁の板敷。板目材。	1/8
18	8	1区 屋下層	木製品	板敷	[10.8]	16.8	1.0			小型の面付けの板敷と思われる。裏面の一部が欠けている。板目材。	2/3
19	9	3区 屋下層	木製品	板敷	45.5	6.5	1.4			水浅舟幅または手縁の板敷。上部に目隠し筋を欠け付ける幅 1.1cm、長さ 3.4cm以上の穴を穿つ。外面中部及び下端部にタガの端線が見られる。板目材。	ほぼ完形
19	10	3区 屋下層	木製品	板	[30.6]	7.4	1.5			水浅舟幅または手縁の板敷。上部に目隠し筋を欠け付ける幅 1.1cm、長さ 3.9cmの穴を穿つ。外面に短尺「口」小（ヤマシホシ）と思われる部分が見られる。板目材。	1/2
19	11	1区 屋下層	木製品	板敷	27.6	[10.5]	1.4			縁の板敷。たらいか。外面上部にタガの端線が見られる。内面直線・直線状が見られる。板目材。	4/5
19	12	3区 屋下層	木製品	板敷	34.9	3.6	0.8			縁の板敷。内面直線に直線の端線。外面に要領不明の端線が見られる。板目材。	完形
19	13	3区 屋下層	木製品	巾着のし縁	24.9	3.7	3.7			上面にφ 1 ~ 3mmの小孔を穿つつし縁。心木材。	完形
20	14	1区 屋下層	木製品	糸巻	[35.0]	3.3	3.5			内側の端部を斜めに巾着口加工し、巾中に部品を繋げる切り込みを設ける。切り込みのほぼ中央にφ 4mmの目釘（木製）が残る。心木材。	ほぼ完形
20	15	1区 屋下層	木製品	縁	[29.2]	16.9	1.7			「口」縁の「口」部分と思われる。板目材。	1/2
20	16	3区 屋下層	木製品	縁	[77.0]	[10.1]	4.4			残存部の断面形状は平田を呈する。	一部か
20	17	3区 屋下層	木製品	板	8.3	6.4	6.2			角を落としたり隅丸の内側材。断面の一部に多数の小さな窪みが見られる。叩き板か。心材。	完形
20	18	3区 屋下層	木製品	浮き	5.7	3.9	2.7			両端部にケズリ加工を施し扁平な重玉玉の形状を呈する。長軸方向にφ 7 ~ 10mmの穴を穿つ。板目材から浮きと考えられる。	完形
20	19	1区 屋下層	木製品	縁か	5.0	3.2	2.1			外面に行くにつれ徐々に断面が三角形の板材。覆と考えられる。板目材。	完形
20	20	1区 屋下層	木製品	角材	10.2	14.5	3.7			木口部の角に3つ切り込みが穿つ角材。心木材。	破片
21	21	1区 屋下層	木製品	縁か	23.3	3.0	2.5			先端に行くにつれ徐々に断面が三角形の板材。覆と考えられる。板目材。	完形
21	22	3区 屋下層	木製品	角材	[26.6]	3.7	3.8			木口に角部で1つの角部が削滅している。1面にφ 3mmの小孔がある。板目材。	一部か
21	23	3区 屋下層	木製品	角材	[24.4]	6.9	2.1			ほぼ平を穿つ板材。板目材。	1/3か
21	24	3区 屋下層	木製品	角材	45.5	4.8	2.0			両端部にφ 4 ~ 6mmの小孔を穿つ。中央部断面に溝が打ち込まれ、釘が遺存する。表面の一部に炭化が見られる。板目材。	ほぼ完形
21	25	3区 屋下層	木製品	角材	[39.3]	5.5	2.9			側面の一部が木口に角形で削滅している。端部に3mm四方の小穴が2つ横並びで開け、釘によるものと思われる。縁の跡も残る。縁の跡も残る。板目材。	4/5
22	26	3区 屋下層	木製品	角材	[11.9]	3.2	2.5			残存する3面のうち、側面の1面のみ平田部を造るよう加工されている。他の2面は加工面が顕著している可能性がある。裏面にある凹差はほぞ穴の端線の可能性が考えられる。斜め方向に削り付けた状態。	破片
22	27	3区 屋下層	木製品	角材	[7.6]	2.3	2.2			長径約3cmの縁と思われる材の端部を造るよう加工し、残りはそのままの形状を法かして断面直線の形状を呈する。角の下の長径するようφ 7mmの穴を少なくとも3つ穿つ。	破片
22	28	1区 屋下層	木製品	角材か	[10.3]	[4.5]	[4.5]			大半が炭化している。火災に遭った建築物のものか。	破片
22	29	3区 屋下層	木製品	板材	[32.1]	9.7	2.7			ほぼ平が炭化している。上下両面に切り込みが見られる。木口に溝かと思われる。板目材。	4/5
22	30	1区 屋下層	木製品	板材	[14.3]	3.2	2.0			ほぼ平が炭化している。上下両面に切り込みが見られる。木口に溝かと思われる。板目材。	ほぼ完形
23	31	3区 屋下層	木製品	部材	[7.9]	10.1	1.7			面を削り落した状態のほぼ正方形を呈する。断面と思われる部分が見られる。角材加工時の木製を利用したものか。四方板目角材か。	2/3
23	32	3区 屋下層	木製品	板材	12.7	12.5	0.9			面をつらねたと思われる切り込みが6本見られる。縦長に割るための、削り面作るためのものと思われる。板目材。	4/5
23	33	1区 屋下層	木製品	板	[17.5]	[7.0]	1.5			端部を斜めに切断し行形を呈すると思われる板材。板目材。	一部か
23	34	1区 屋下層	木製品	板材	44.8	14.0	1.2			表面内面ともきれいに加工されている。後か。板目材。	ほぼ完形
23	35	1区 屋下層	木製品	板材	35.0	2.0	0.7			一方の端部を斜めに切断し、もう一方の端部に1か所切り込みを入れた縁型・板材。板目材。	完形
23	36	1区 屋下層	木製品	板	[14.3]	[3.3]	0.5			φ 4mmの小穴を2つもつ縁型薄板。板目材。	破片
23	37	3区 屋下層	木製品	板材	11.8	[2.0]	1.1			長軸端部のほぼ中央にφ 1mmの小孔がある。両面に釘が付着している状況から釘打られたことと思われる。断面部。2つの小孔がある。板目材。	ほぼ完形
23	38	3区 屋下層	木製品	板材	13.8	1.6	0.8			縦長に角形の断面に縁・板材。上部に端に溝で2か所と中央部1か所にφ 2mmの小穴（木釘）が打たれる。板目材。	完形
23	39	3区 屋下層	木製品	板材	[87.7]	8.9	2.6			縦長に板材で、端から約30cmの所から端部に沿って側面が削り落とされた断面は全縁幅約1/3まで残る。一方の断面は平らに加工されており、もう一方の断面は平らからケズリを入れて薄く加工している。断面の残りはほぼ材にφ 3 ~ 5mmの小孔が2つ横並びで穿たれる。板目材。	1/2
24	40	1区 屋上層	木製品	板	[32.0]	4.1	4.9			縁の断面を削り落しただけで縁か・板材を削っていない板材。下部を一方から削り方に切断し、反対側は5cmの長さで削り落とす。上部2/3に同じく下部1/3の縁が削り落とされていないことから、削り落とす部分の削り落とす部分に削り落とす部分があると思われる。	1/2か
24	41	3区 屋下層	木製品	板	[31.0]	2.7	2.7			縁の断面を削り落しただけで縁か・板材を削っていない板材。下部を内側と外側から斜めに切断し削り落している。	1/2か
36	1	1区 SE01	木製品	板材	[12.8]	[8.9]	3.3			ほぼ炭化している板材。火災に遭った建築物のものと思われる。	破片

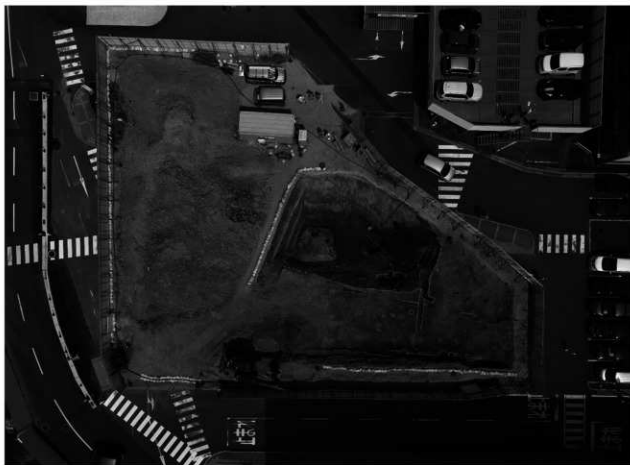
近世・近代瓦観察表

種 番	番号	出土位置	種類	法 量 (口・幅定) (口・幅定)		口・幅定 長さ (mm)	口・幅定 幅 (mm)	口・幅定 厚さ (mm)	規格	説明、成・形等の特徴	遺存状況
				口	幅						
25	1	Ⅱ区 地下層	伏間瓦	112.4	112.1	1.8			高崎瓦 24 分組 A、角枕伏間瓦。	破片	
25	2	Ⅱ区 地下層	伏間瓦	99.8	111.3	1.7			高崎瓦 24 分組 A、角枕伏間瓦。	破片	
25	3	Ⅱ区 地下層	伏間瓦	14.6	95.0	1.7			高崎瓦 24 分組 A、脚に切欠あり。「口」の中に小さな「凸」を配したものとと思われる。	破片	
25	4	Ⅱ区 地下層	伏間瓦	111.4	99.1	1.7			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
25	5	Ⅱ区 地下層	伏間瓦	113.4	111.6	1.9			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
25	6	Ⅱ区 地下層	高島瓦か	123.4	12.8	2.0			高崎瓦 24 分組 Aか、下部部に段差がある。	破片	
25	7	Ⅱ区 地下層	高島瓦か	113.9	112.8	2.2			高崎瓦 24 分組 B、下部部に段差がある。	破片	
25	8	Ⅱ区 地下層	軒平瓦	10.7	86.3	1.7			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
25	9	Ⅱ区 地上層	軒平瓦	116.3	12.2	2.0			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
25	10	Ⅱ区 地上層	軒平瓦	112.2	12.0	1.8			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
25	11	Ⅱ区 地上層	軒平瓦	112.8	12.3	1.8			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
25	12	Ⅱ区 地上層	軒平瓦	110.1	12.0	1.7			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
25	13	Ⅱ区 地上層	軒平瓦	105.6	8.5	1.7			高崎瓦 24 分組 B。	破片	
25	14	Ⅱ区 屋根棟	白和瓦	109.6	114.6	2.0			高崎瓦 24 分組 A、角枕兼付白和瓦、高さ 15.8mm。	破片	
25	15	Ⅱ区 地上層	白和瓦	115.1	111.3	2.5			高崎瓦 24 分組 B、角枕兼付白和瓦瓦と思われ。	破片	
25	16	Ⅱ区 地下層	白和瓦	103.5	88.8	2.2			高崎瓦 24 分組 Aか、釘穴あり。	破片	
25	17	Ⅱ区 地下層	角瓦か	17.7	17.8	2.0			高崎瓦 24 分組 A、下に上字に並ぶの付く角瓦と思われる。	破片	
26	18	Ⅱ区 地上層	軒瓦	111.9	10.6	1.7			高崎瓦 24 分組 A、大、径 (17.0) cm。	破片	
26	19	Ⅱ区 地下層	軒瓦	14.7	16.5	—			高崎瓦 24 分組 A、中 2、径 12.0cm。	破片	
26	20	Ⅱ区 地下層	軒瓦	110.0	11.8	—			高崎瓦 24 分組 A、中 2、径 11.8cm。	破片	
26	21	Ⅱ区 地下層	軒瓦	99.0	12.5	—			高崎瓦 24 分組 A、中 2、径 12.5cm。	破片	
26	22	Ⅱ区 地下層	軒瓦	17.5	15.5	—			高崎瓦 24 分組 B、大、径 16.4) cm。	破片	
26	23	Ⅱ区 地下層	軒瓦	13.9	112.0	—			高崎瓦 24 分組 B、中 2、径 12.3cm。	破片	
26	24	Ⅱ区 地下層	軒瓦	146.0	13.3	1.8			高崎瓦 24 分組 B、中 4、径 13.3cm。	破片	
26	25	Ⅱ区 地下層	軒瓦	109.5	17.6	—			高崎瓦 24 分組 B、中 2、径 17.2) cm。	破片	
26	26	Ⅱ区 地下層	凹瓦	99.6	111.0	3.2			高崎瓦 24 分組 Aか、方丁形の凹部と思われ。	破片	
26	27	Ⅱ区 地上層	丸瓦	117.0	99.6	1.9			高崎瓦 24 分組 Bか、他の丸瓦と重ねるための切り込みあり。	破片	
26	28	Ⅱ区 地上層	丸瓦	111.0	99.8	2.2			高崎瓦 24 分組 Bか、他の丸瓦と重ねるための切り込みあり。	破片	
26	29	Ⅱ区 地下層	丸瓦	10.2	99.8	2.3			高崎瓦 24 分組 Bか、他の丸瓦と重ねるための切り込みあり。	破片	
26	30	Ⅱ区 地下層	丸瓦	112.3	99.9	2.5			高崎瓦 24 分組 Bか、他の丸瓦と重ねるための切り込みあり。	破片	
26	31	Ⅱ区 地下層	丸瓦	113.2	111.3	1.9			高崎瓦 24 分組 B、取高が低く平べったい、縁部より内面に釘穴あり。	破片	
26	32	Ⅱ区 地上層	丸瓦	112.5	11.3	2.0			高崎瓦 24 分組 B、取高が低く平べったい、縁部に釘穴あり。	破片	
26	33	Ⅱ区 地上層	丸瓦	113.6	11.2	1.8			高崎瓦 24 分組 Aか、取高が低く平べったい、縁部に釘穴あり、別れ口付近の内面に盛り上がりが見られ、段が付く形状か、内面縁部方向へ張り出す。	破片	
26	34	Ⅱ区 地下層	丸瓦	113.6	88.8	1.7			高崎瓦 24 分組 B、取高が低く平べったい、縁部より内面に釘穴あり。	破片	
26	35	Ⅱ区 地上層	丸瓦	14.2	86.2	1.7			高崎瓦 24 分組 B、取高が低く平べったい、瓦唇を早見する。	破片	
26	36	Ⅱ区 地下層	丸瓦	20.5	11.1	1.8			高崎瓦 24 分組 A、高さ 5.0cm。	破片	
26	37	Ⅱ区 地下層	丸瓦	115.7	111.5	2.1			高崎瓦 24 分組 B。	破片	
26	38	Ⅱ区 地下層	丸瓦	18.3	99.2	1.8			高崎瓦 24 分組 B。	破片	
26	39	Ⅱ区 地下層	丸瓦	11.7	101.7	2.1			高崎瓦 24 分組 Aか、内面縁部方向に 2 本の浅い溝状の溝あり。	破片	
26	40	Ⅱ区 地下層	丸瓦	17.5	109.8	2.1			高崎瓦 24 分組 Aか、内面縁部方向に多数の溝あり。	破片	
26	41	Ⅱ区 地下層	丸瓦	111.8	111.3	2.2			高崎瓦 24 分組 Aか、内面縁部方向に多数の溝あり。	破片	
26	42	Ⅱ区 地上層	丸瓦	118.9	112.7	1.9			高崎瓦 24 分組 Aか。	破片	
26	43	Ⅱ区 地上層	丸瓦	115.2	86.5	2.1			高崎瓦 24 分組 Aか。	破片	
26	44	Ⅱ区 地下層	丸瓦	99.5	86.7	1.8			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
26	45	Ⅱ区 地下層	丸瓦	86.6	17.0	1.9			高崎瓦 24 分組 Aか。	破片	
26	46	Ⅱ区 地下層	丸瓦	119.3	112.3	2.1			高崎瓦 24 分組 B、内面有り残る。	破片	
26	47	Ⅱ区 地下層	丸瓦	115.8	111.0	1.9			高崎瓦 24 分組 B、内面縁部方向に 2 本の深い溝状の溝あり。	破片	
26	48	Ⅱ区 地下層	丸瓦	111.8	101.1	2.2			高崎瓦 24 分組 B、内面有り残る。	破片	
26	49	Ⅱ区 地下層	丸瓦	114.7	80.1	2.3			高崎瓦 24 分組 B、釘穴あり。	破片	
26	50	Ⅱ区 地下層	丸瓦	100.0	17.5	2.0			高崎瓦 24 分組 B。	破片	
26	51	Ⅱ区 地下層	丸瓦	112.4	89.9	2.2			高崎瓦 24 分組 B。	破片	
26	52	Ⅱ区 地下層	丸瓦	114.5	99.0	1.8			高崎瓦 24 分組 B。	破片	
26	53	Ⅱ区 地上層	丸瓦	113.9	17.7	1.7			高崎瓦 24 分組 B。	破片	
26	54	Ⅱ区 地上層	軒平瓦	109.5	24.5	1.7			高崎瓦 24 分組 Aか、高さ 4.9cm。	破片	
26	55	Ⅱ区 地上層	軒平瓦	109.5	118.5	1.9			高崎瓦 24 分組 A、高さ 4.7cm。	破片	
26	56	Ⅱ区 地下層	軒平瓦	107.1	117.0	2.1			高崎瓦 24 分組 A、高さ 5.1cm。	破片	
26	57	Ⅱ区 地下層	軒平瓦	13.6	112.2	—			高崎瓦 24 分組 A、高さ 4.8cm。	破片	
26	58	Ⅱ区 地下層	軒平瓦	13.8	114.5	—			高崎瓦 24 分組 Aか、高さ 15.0cm。	破片	
26	59	Ⅱ区 地下層	軒平瓦	14.6	111.7	—			高崎瓦 24 分組 A、高さ 15.0cm。	破片	
26	60	Ⅱ区 地下層	軒平瓦	12.8	109.5	—			高崎瓦 24 分組 Aか、高さ 14.2cm。	破片	
26	61	Ⅱ区 地上層	軒平瓦	16.4	80.0	1.7			高崎瓦 24 分組 Aか、高さ 15.0cm。	破片	
26	62	Ⅱ区 屋根 大軒石組	軒平瓦	111.0	115.7	2.0			高崎瓦 24 分組 B、高さ 4.6cm。	破片	
26	63	Ⅱ区 地下層	軒平瓦	13.2	109.8	—			高崎瓦 24 分組 B。	破片	
26	64	Ⅱ区 地下層	軒平瓦	15.3	116.1	—			高崎瓦 24 分組 B、高さ 14.8cm。	破片	
26	65	Ⅱ区 地下層	軒平瓦	2.6	97.7	—			高崎瓦 24 分組 B。	破片	
26	66	Ⅱ区 地下層	軒平瓦	12.5	99.2	—			高崎瓦 24 分組 B、無文の軒平瓦と思われる、高さ 5.1cm。	破片	
26	67	Ⅱ区 地上層	軒平瓦	22.0	110.8	1.9			高崎瓦 26 分組 A、反縁あり。	破片	
26	68	Ⅱ区 地下層	平瓦	18.5	99.6	2.2			高崎瓦 24 分組 A、釘穴・反縁あり。	破片	
26	69	Ⅱ区 地下層	平瓦	101.4	86.2	2.2			高崎瓦 24 分組 A、反縁あり。	破片	
26	70	Ⅱ区 地下層	平瓦	113.0	112.9	2.1			高崎瓦 25 分組 A、反縁あり。	破片	
26	71	Ⅱ区 地下層	平瓦	118.1	121.0	1.7			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
26	72	Ⅱ区 地上層	平瓦	101.1	110.6	1.7			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
26	73	Ⅱ区 地下層	平瓦	112.7	99.3	2.0			高崎瓦 24 分組 A。	破片	
26	74	Ⅱ区 地下層	平瓦	112.5	113.9	1.8			高崎瓦 24 分組 A。	破片	

棟 号	出土位置	種類	法 量 (): 推定 (): 遺存			図形、成・整形等の特徴	遺存状況
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
28 75	Ⅱ区地下層	平瓦	10(1)	13(0)	1.9	高崎城 24 分組A。	破片
28 76	Ⅰ区 礎土	平瓦	12(7)	11(6)	1.7	高崎城 24 分組A。裏面ハケ状工具痕あり。	破片
28 77	Ⅱ区地下層	平瓦	14(0)	14(5)	1.8	高崎城 24 分組Aか。	破片
28 78	Ⅰ区地下層	平瓦	13(8)	14(6)	1.7	高崎城 24 分組Aか。	破片
28 79	Ⅱ区地下層	平瓦	17(3)	14(0)	1.9	高崎城 24 分組A。	破片
28 80	Ⅰ区 礎土	平瓦	10(0)	9(3)	1.7	高崎城 24 分組A。両面が小さく直線的。裏面ハケ状工具痕あり。	破片
28 81	Ⅱ区 礎土	平瓦	12(0)	9(3)	1.7	高崎城 24 分組A。両面が小さく直線的。	破片
28 82	Ⅱ区地下層	平瓦	12(7)	9(3)	1.7	高崎城 24 分組A。両面が小さく直線的。	破片
28 83	Ⅱ区地下層	平瓦	8(6)	9(5)	1.6	高崎城 24 分組A。両面が小さく直線的。	破片
28 84	Ⅱ区地下層	平瓦	8(3)	7(0)	1.7	高崎城 24 分組A。両面が小さく直線的。	破片
29 85	Ⅰ区地下層	平瓦	11(5)	8(7)	2.1	高崎城 25 分組B。縁に「(一)」の刻印あり。	破片
29 86	Ⅰ区地下層	平瓦	8(5)	10(2)	2.3	高崎城 24 分組B。瓦面あり。	破片
29 87	Ⅰ区地下層	平瓦	14(7)	14(4)	2.7	高崎城 24 分組B。打穴・穴痕あり。	破片
29 88	Ⅰ区地下層	平瓦	9(2)	10(5)	2.6	高崎城 24 分組B。打穴・穴痕あり。	破片
29 89	Ⅱ区 表土	平瓦	8(3)	10(9)	2.4	高崎城 24 分組B。打穴あり。	破片
29 90	Ⅰ区地下層	平瓦	12(2)	13(8)	1.8	高崎城 24 分組B。打穴あり。	破片
29 91	Ⅱ区地下層	平瓦	15(8)	13(5)	2.2	高崎城 24 分組B。	破片
29 92	Ⅰ区地下層	平瓦	17(5)	14(0)	1.8	高崎城 24 分組B。	破片
29 93	Ⅰ区地下層	平瓦	14(0)	10(0)	1.8	高崎城 24 分組B。	破片
29 94	Ⅰ区地下層	平瓦	11(8)	14(2)	1.9	高崎城 24 分組B。	破片
29 95	Ⅰ区地下層	平瓦	16(1)	8(2)	2.0	高崎城 24 分組B。	破片
29 96	Ⅱ区 表土	平瓦	9(8)	13(5)	1.9	高崎城 24 分組B。	破片
29 97	Ⅱ区地下層	平瓦	12(5)	5(7)	2.0	高崎城 24 分組B。両面が小さく直線的。	破片
29 98	Ⅱ区地下層	平瓦	9(7)	7(8)	1.9	高崎城 24 分組B。両面が小さく直線的。	破片
29 99	Ⅱ区地下層	平瓦	9(4)	6(0)	1.9	高崎城 24 分組B。両面が小さく直線的。	破片
29 100	Ⅱ区地下層	平瓦	11(3)	8(6)	1.8	高崎城 24 分組B。両面が小さく直線的。	破片
29 101	Ⅰ区 礎土	平瓦	11(6)	11(0)	2.5	高崎城 24 分組B。両面が小さく直線的。	破片
29 102	Ⅰ区 礎土	平瓦	10(2)	8(9)	2.3	高崎城 24 分組B。両面が小さく直線的。	破片
30 103	Ⅱ区地下層	軒瓦	22(5)	7(6)	—	高崎城 24 分組A。径 7.5cm。	破片
30 104	Ⅰ区 礎土	軒瓦	18(5)	8(0)	2.0	高崎城 24 分組B。	破片
30 105	Ⅰ区地下層	瓦	8(1)	11(5)	1.7	高崎城 24 分組A。表面に変体仮名「日又は皆乃刀」●又は皆、裏面に「威徳寺」と刻書される。●は正と認めらる。	破片
30 106	Ⅱ区地下層	瓦	7(3)	11(0)	1.7	高崎城 24 分組A。	破片
30 107	Ⅰ区地下層	瓦	17(7)	10(7)	1.7	高崎城 24 分組A。	破片
30 108	Ⅰ区地下層	瓦	17(4)	11(8)	1.7	高崎城 24 分組A。	破片
30 109	Ⅰ区 礎土	瓦	9(6)	10(4)	1.8	高崎城 24 分組A。裏面ハケ状工具痕あり。	破片
30 110	Ⅰ区 表土	瓦	13(2)	10(5)	1.7	高崎城 24 分組A。裏面ハケ状工具痕あり。	破片
30 111	Ⅱ区地下層	瓦	7(5)	6(3)	1.7	高崎城 24 分組A。地面が丸く平ばまる。	破片
30 112	Ⅱ区 表土	瓦	10(4)	11(4)	1.8	高崎城 24 分組A。	破片
30 113	Ⅰ区地下層	瓦	14(3)	15(2)	1.9	高崎城 24 分組A。	破片
30 114	Ⅰ区地下層	瓦	9(3)	8(4)	2.2	高崎城 24 分組B。瓦瓦に相当する部分に切り込みあり。	破片
30 115	Ⅰ区地下層	瓦	13(7)	11(1)	1.9	高崎城 24 分組Bか。瓦瓦に相当する部分に切り込みあり。	破片
30 116	Ⅰ区 礎土	瓦	10(8)	11(9)	1.7	高崎城 24 分組B。	破片
30 117	Ⅱ区地下層	瓦	8(4)	12(3)	2.0	高崎城 24 分組Bか。	破片
31 118	Ⅰ区地下層	不明	10(8)	14(8)	16(6)	高崎城 24 分組B。	破片
31 119	Ⅰ区地下層	不明	9(3)	9(0)	2(8)	高崎城 24 分組B。磨り長い一部分。	破片
31 120	Ⅱ区地下層	引付瓦	7(1)	5(3)	1.7	高崎城 24 分組A。引付初期に考案された瓦。	破片
31 121	Ⅱ区地下層	引付瓦	3(7)	3(5)	1.6	高崎城 24 分組A。引付初期に考案された瓦。	破片
31 122	Ⅱ区 礎面	引付瓦	4(4)	9(3)	1.4	高崎城 24 分組A。引付初期に考案された瓦。	破片
31 123	Ⅰ区 礎土	平瓦	8(7)	7(4)	1.6	高崎城 24 分組A。裏に「江の中央に二組、左上組、右上組、の刻印あり。	破片
31 124	Ⅱ区 礎面	平瓦	9(7)	7(0)	1.7	高崎城 24 分組A。裏に「江の中央に二組、左上組、左下組、右下組」の刻印あり。	破片
31 125	Ⅱ区地下層	平瓦	8(9)	8(2)	1.7	高崎城 26 分組A。縁に「永」の刻印あり。	破片
31 126	Ⅱ区 礎土	平瓦	9(2)	14(0)	1.6	高崎城 26 分組A。縁に「扇形の押」に刻印の刻印あり。	破片
35 11	Ⅰ区 S805	軒瓦	8(6)	2(2)	1.9	高崎城 24 分組A。	破片
35 12	Ⅰ区 S805	軒瓦	7(3)	10(2)	1.8	高崎城 24 分組A。高さ 4.0cm。	破片
35 13	Ⅰ区 S805	平瓦	9(8)	8(1)	1.6	高崎城 24 分組A。	破片
35 14	Ⅰ区 S805	軒瓦	8(0)	15(2)	1.8	高崎城 24 分組A。軒瓦部分は欠損。高さ 4.3cm。	破片
35 15	Ⅰ区 S805	瓦	9(8)	9(3)	1.6	高崎城 24 分組A。	破片

古代瓦観察表

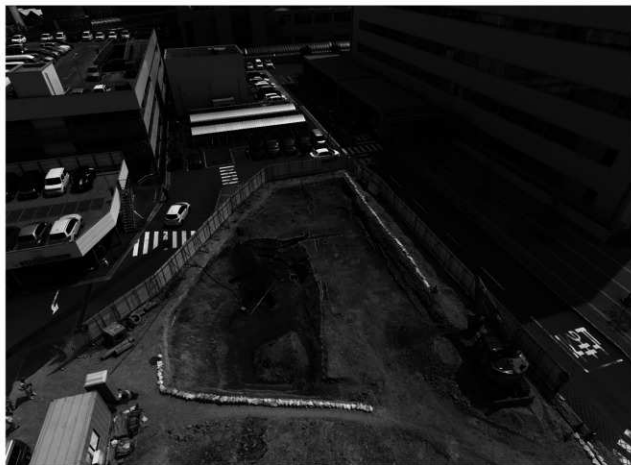
棟 号	出土位置	種類	法 量 (): 推定 (): 遺存			図形、成・整形等の特徴	遺存状況
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)		
33 19	Ⅰ区地下層	軒瓦	3(6)	10(0)	—	高さ 3.8cm。	破片
33 20	Ⅱ区地下層	平瓦	12(4)	10(7)	1.8	表：布目組。	破片
33 21	Ⅱ区地下層	平瓦	9(4)	5(6)	1.6	表：布目組。	破片
33 22	Ⅱ区地下層	瓦	18(8)	10(0)	1.9	裏：布目組。高さ 7.3cm。	破片
35 6	Ⅰ区 S805	瓦	13(1)	13(3)	1.8	裏：布目組。高さ 7.6cm。	破片
36 4	Ⅰ区 S801	平瓦	8(7)	3(9)	1.7	表：布目組。裏：横目組。	破片



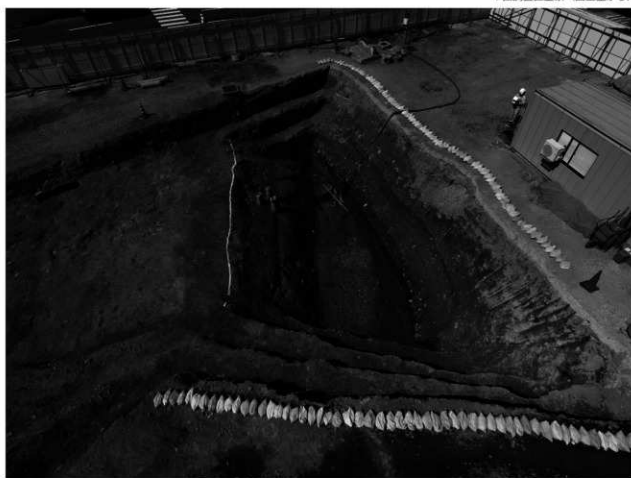
I区調査区全景（真上から 上が北）



II区調査区全景（真上から 上が北）



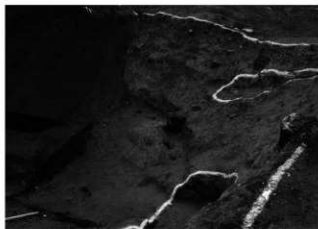
I区調査区全景（西上空から）



II区調査区二ノ丸南堀全景（東上空から）



I区調査区二ノ丸南堀全景 (西から)



I区調査区二ノ丸南堀大走り全景 (南西から)



II区調査区二ノ丸南堀全景 (西から)



II区調査区二ノ丸南堀全景 (東から)



I区調査区二ノ丸南堀東端部底面全景 (西から)



I区調査区西端部二ノ丸南堀底面全景 (東から)



I区調査区二ノ丸南堀全景 (東から)



II区調査区二ノ丸南堀全景 (西から)

写真図版 4



I区調査区西壁二ノ丸南堀土層断面B-B'① (東から)



I区調査区西壁二ノ丸南堀土層断面B-B'② (東から)



II区調査区東壁二ノ丸南堀土層断面① (西から)



II区調査区東壁二ノ丸南堀土層断面② (西から)



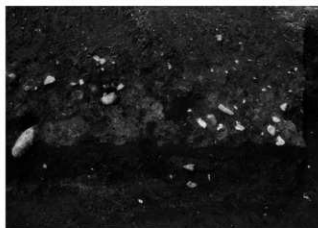
II区調査区西壁二ノ丸南堀土層断面C-C'① (東から)



II区調査区西壁二ノ丸南堀土層断面C-C'② (東から)



II区調査区北壁二ノ丸南堀土層断面① (南から)



II区調査区北壁二ノ丸南堀土層断面② (南から)



1区調査区北壁二ノ丸南堀土層断面A-A' (南から)



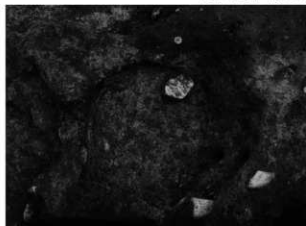
II区調査区二ノ丸南堀坑出土状況 (東から)



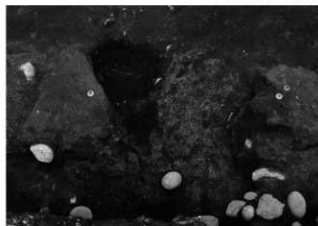
1号土坑全景 (南から)



2号土坑全景 (南から)



3号土坑全景 (南から)



4号土坑全景 (南から)



5号土坑土層断面 (北から)

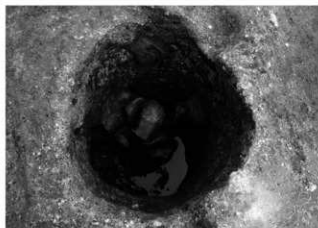


5号土坑全景 (南から)

写真図版 6



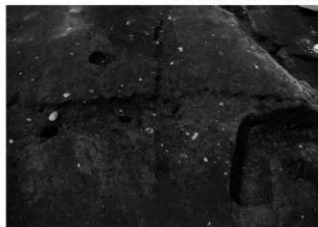
1号井戸跡土層断面 (東から)



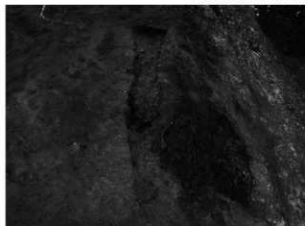
1号井戸跡遺物出土状況 (東から)



1号溝跡A全景 (東から)



1号溝跡B全景 (東から)



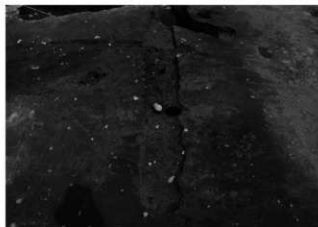
1号溝跡C全景 (東から)



1号溝跡全景 (東から)



2号溝跡全景 (東から)



3号溝跡全景 (南から)



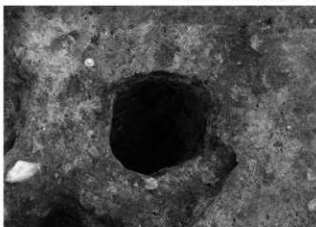
3号溝跡遺物出土状況（南から）



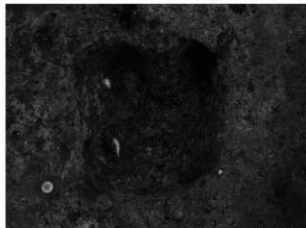
4号溝跡遺物出土状況（西から）



4号溝跡全景（西から）



1号ピット全景（南から）



2号ピット全景（南西から）



作業風景①



作業風景②



作業風景③

写真図版 8

二ノ丸南堀



第8図1



第8図2



第8図3



第8図6



第8図9



第8図14



第8図19



第8図22



第9図28



第9図29



第9図31



第9図35



第9図38



第9図42



第9図45



第9図49



第9図39



第9図50



第9図52



第9図54



第9図57



第10図59



第10図60



第10図61



第10図64



第10図63

第10図66



第10図67



第10図69



第10図83



第10図73



第10図77



第10図78



第10図79



第10図80



第10図81



第10図84



第10図85



第11図86



第11図87



第11図88



第11図89



第 11 图 93



第 11 图 94



第 11 图 98



第 11 图 104



第 11 图 105



第 12 图 109



第 13 图 113



第 13 图 114



第 13 图 117



第 13 图 118



第 13 图 120



第 13 图 122



第 13 图 123



第 13 图 124



第 13 图 126



第 13 图 127



第 13 图 128



第 13 图 129



第 14 图 130



第 14 图 132



第 14 图 133



第 14 图 139



第 14 图 141



第 14 图 144



第 15 图 146



第 15 图 150



第 14 图 142



第 14 图 143



第 15 图 147



第 15 图 148



第 15 图 151



第 15 图 152



第 15 图 153



第 15 图 154



第 15 图 155



第 15 图 156





第18图7



第19图10



第19图12



第20图18



第19图13



第20图14



第20图15



第21图24



第23图35



第21图25



第22图29



第22图27



第23图37

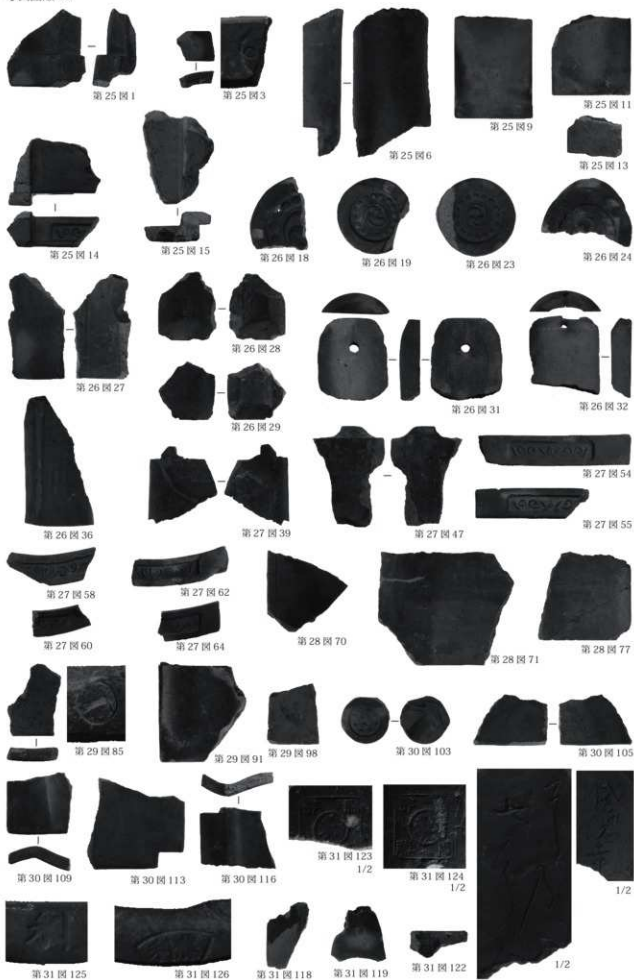


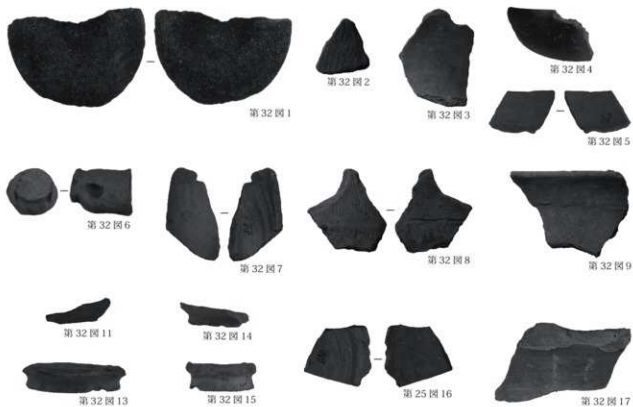
第23图38



第23图39

写真图版 12





発掘調査報告書抄録

ふりがな	たかさきじょういせき 25
書名	高崎城遺跡 25
副書名	独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター病棟等増築整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高崎市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 408 集
編者名	高林 真人
編集機関	株式会社 測研
所在地	〒370-3517 群馬県高崎市引間町 712-2
発行年月日	平成 30 年 3 月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
高崎城遺跡 25	群馬県高崎市高松町 36 番地	102024	702	36° 19' 20"	139° 0' 6"	20170723 ～ 20171012	690	病棟建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高崎城遺跡 25	城館跡	近世	二ノ丸南堀 1条 土坑 3基 溝跡 1条	陶磁器・土師質土器・ 金属製品・木製品・ 石製品・瓦 かわらけ 土師器・須恵器・瓦	近世高崎城南中門西側の 二ノ丸南堀の東端部が確 認された。堀の中から「威 徳寺」刻書瓦・「鳥居氏」 墨書陶器が出土した。
		散布地	中世		
	平安時代	溝跡 1条			
	時期不明	土坑 1基 溝跡 1条			
	近代	ピット 3基 土坑 2基			

要約	本遺跡は高崎台地上に立地する縄文時代～近現代までの遺構が確認される高崎城遺跡の第 25 次調査地点である。近世高崎城の南中門西側に位置する二ノ丸南堀の発掘調査を実施し、堀の東端部が確認された。堀からは近世陶磁器ほかの土器類、金属製品、木製品、石製品、瓦などの多種多様の遺物が多量に出土した。その中から線刻で表面に変体仮名・裏面に「威徳寺」と書かれた棧瓦、底面に「●●●● 鳥居氏」と墨書のある陶器小型碗が確認された。
----	--

高崎城遺跡 25

独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター病棟等増築整備工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2018 年 3 月 20 日 印刷

2018 年 3 月 28 日 発行

発行 独立行政法人国立病院機構高崎総合医療センター
高崎市教育委員会
株式会社 測研

印刷 上毎印刷工業株式会社